

授 業 科 目 の 概 要			
（教育文化学部教育学科）			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全 学 共 通 科 目	導 入 科 目		
	基礎教育セミナーⅠ	大学で「学生」として「学ぶ」ということを理解する。専門的学習の場において、読み書き調べることに関する基礎能力の習得が重要となる。そのため、情報検索、ノートテイキング、リーディング、ライティングの各種能力を向上させる。さらには、情報を整理しまとめ伝えることができる力を獲得する。加えて学生生活全般にわたっての心の健康（メンタルヘルス）について学ぶ。大学で学ぶということは学長、メンタルヘルスはカウンセラーが担当し、他は学科専任教員全員で担当する。	
	基礎教育セミナーⅡ	基礎教育セミナーⅠで習得した大学で学ぶために必要不可欠な知識、技術、情報をさらに自分のものとして身につけていくために、多分野にわたる学びを深める。現代社会における様々なトピックスを題材にして、レジュメの作成やディスカッションを行いながら、社会に関わるためのコミュニケーション・スキルの向上をめざす。自分の将来への意識を確かなものにしなが、専門の学びへの準備を整えていく。自ら調べ、整理し、まとめ、伝えるといった能力をスキルアップさせる。そして、大学生活に必要なマナーや態度を身につける。学科専任教員全員で担当する。	
	日本語表現	日本語による表現能力の向上と、基本的知識の修得を目的とする。その表記方法（文字・語彙・文法・文体・仮名遣い・送り仮名・文章表現に際して用いる符号類等）を学習し、文章の種類・形態と文章を書くときの要領や修辭法について学習する。伝えることの大切さを意識すると同時に、日本語の各分野における能力を向上させることを目的としている。各自が持つ日本語表現能力を向上させ、効果的で円滑なコミュニケーションを図ることができるように、基礎的な力をつけることを目的としている。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○話し言葉と書き言葉：山本（麻） ○漢字（成り立ち、同音意義語等）：福田 ○四字熟語、慣用句など：小坂 ○二語の関係：村松 ○敬語：小杉 ○文章をつくる：石原 ○文と文の関係（文の並べ替え、文法）：小原 ○情報を読み取る：前川	オムニバス
	数学入門	私たちが便利で快適な生活を送ることができるのは、ベースに数学がある。普段、数学の存在を気にすることなく、生活をおくることは可能である。しかし、いざ世の中の仕組みを知りたいと思うと数学が得意とする論理的思考力が必要になる。本学では、生活における数学という切り口で身近にある数学を学び、各専門分野で必要な、ものを考えるための基礎力を身に付けることを目的としている。2年後期に開講される（履修する）就業力特別講義Ⅰに向けた基礎力を培うことをも目的としている。 8回の講義内容は、以下の通りである。 ○携帯端末と数（数の仕組み）：松澤 ○点と線と面（図形の基本）：佐藤（克） ○速さと時間：菊池 ○美と比率（黄金比等）：水野 ○行き先と道順（樹木図等）：松村 ○借りたお金はいくら返せばいいの？（金利等）：澤田 ○集合：西村 ○資料の数値化（統計の基礎、そもそもなぜ数にするのか？）：佐々木（雅）	オムニバス
	情報機器操作Ⅰ	コンピュータハードウェアの基本と情報処理の基本を理解するとともに、コンピュータを活用して、データ管理、ネットワーク処理等を行う。インターネットの利用を通して、情報社会における情報モラルの必要性や情報発信に対する責任等について考える態度を養う。パソコンの日本語文書処理、プレゼンテーション、表計算のソフトウェアを使い、日本語文書処理の基本とデータ処理の基本、プレゼンテーション用資料作成の基本的な知識と技能を習得し、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力の育成をねらいとしている。	
	情報機器操作Ⅱ	情報処理の基本を踏まえて、コンピュータを用い、実際にアプリケーションソフトを使って、情報処理におけるコンピュータの基本的・応用的な活用と初歩的な画像処理の方法を学ぶ。また、文書の作成、データの活用、プレゼンテーション等の活用について知識を深め、情報モラルについても考察を深める。いずれの活用においても、基本的な知識・技能について確実でより高い習得を行なうとともに、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力を育成することを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
基礎 科 目		健康体育(実技を含む)	自分の身体に責任を持ち、健康な身体をつくります。また、そのための基礎知識と基礎体力を向上させる。さらに、「身体と頭がSmartに(賢く)なる体育」を目標に、自分自身の身体を通して健康について考えます。また、いろいろなスポーツのもつ面白さとトレーニングの喜び・難しさを理解します。そのために、健康の保持・増進に関する知識を深め、運動の体験をととして、自分自身とのコミュニケーション、自分と他者とのコミュニケーション能力を高めるなどの活動を行います。 (教育学科学習コーチングコース) オムニバス ○講義：体育理論の学習 1～5 (浅尾秀樹) ○実技：身体を知り、動きの質を高める 6～12 (山崎あずさ) ○講義：トレーニングの方法について学ぶ 13～15 (浅尾秀樹) ○実技：表現する、伝えることを中心に、身体を動かし、創造する力を身に付け、グループに分かれて作品をつくり発表する 16～23 (山崎あずさ) (教育学科養護コース、音楽コース、芸術学科、心理学科) オムニバス ○講義：(花井) ○実技：(畠山、花井、千葉) 3クラス展開	※実技/オムニバス
		英語コミュニケーションⅠ	本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行います。受講するにあたり、英語力の前提条件はない。 最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。 この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。	
全 学 共 通 科 目	外 国 語 科 目	英語コミュニケーションⅡ	この講座を受講するにあたり、英語コミュニケーションⅠを修了していることが必須である。 本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行い、レベルアップを図ります。最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。	
		英語(中級)	社会に出て仕事や研究のツールとして使うに足る、英語力を養うために、英語を多角的に学び、教養のある「英語」に向上させていく。「読む」「聴く」の受信面と「書く」「話す」の発信面の4つの技能を大学レベルまで高める。アカデミックライティング(エッセイの構成の基礎的理解)とオーラル・プレゼンテーションを中心に学習する。適切な文を書き、ライティングの過程を踏まえて、論理的に構成されたパラグラフを書くことを学ぶ。習熟度別クラス展開を行なう。	
		英語(上級)	各自の専門分野に関連させたかたちで、より高度な英語運用能力が身につくように勉強する。論文作成を行なうことを目的にして、英語文献を読みこなし、国際会議等で発表や議論をするための基礎能力開発を行う。学術論文の構成を理解した上での読み方、効果的なプレゼンテーションの仕方、ディベートの訓練等を行う。習熟度別クラス展開を行なう。	
		韓国語	韓国語は、日本語とほぼ同じ語順で、日本人にとって最も習得しやすい言語と言える。文字と発音に習熟すると同時に、簡単な会話文やあいさつなど実用性に重点をおいて、韓国語に慣れ親しみ学んでいく。また視聴覚教材を通して、韓国の文化や風習に触れる。	
		中国語	中国語の基本的な文法事項を確実に習得して、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。また、ビデオやDVDを用いて中国の文化遺産や歌などを紹介して、中国の文化や社会事情を通して理解を深める。	
		ドイツ語	ドイツ語では、初歩的な文法の一部を取り上げて、学習する。また、文法事項を通じて、ドイツ語圏(ドイツ・スイス・オーストリアなど)の生活・文化についても触れながら、理解を深めていく。	
		フランス語	フランス語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。フランス語を学ぶことを通して、フランス語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、フランスの文化や社会事情への理解を深める。	
		スペイン語	スペイン語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。スペイン語を学ぶことを通して、スペイン語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、スペインの文化や社会事情への理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学 共通 科目	教養 科目	現代生活と政治・経済	「現代生活と政治経済」は、政治と経済を中心に社会の動く仕組みを理解する。政治と経済は不可分の関係にあり、その相互作用を理解することが、社会の動きを読み解くためのリテラシーを高めることにつながる。社会的格差が広がりつつあると指摘される現代だが、政治学と経済学の基礎理論を通して、競争や公平の概念を理解し、議論できる学びの深化を目指す。まず、経済学から説き起こし、提起された課題を政治学が引き取り、最後に二つの学の重なりを双方向的授業展開の中で確認し、現代生活への理解を深める。 経済学については、基礎理論として基礎概念を学び、さらに市場メカニズムについて考察する。身近な生活と経済とのかかわりを考察するとともに今日の課題を理解する。(澤田一義 1回～8回、15回) 政治学については、基礎理論として政治学、公共経済学について学び、生活と政治の関連を探る。社会における公平や世界の中の日本について考察を深める。(相内眞子 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と法律	現代生活において、社会の秩序を維持するためには、「法律」という客観的な価値の基準が必要である。人々の生活を強制できる唯一のものでもある。この根本には「人間の尊重」があり、これは現在、日本国憲法のもとで定められているあらゆる法律に共通する普遍的な原理である。高度に進化した現代社会では、個人においても組織体においても、コンプライアンスという言葉により、いっそう法の遵守の意義が求められている。私たちの日常生活において、様々な場面で関わりのある法律の存在を改めて意識し、理解を深めていく。	
		現代生活と福祉	現代社会においては、私たちの暮らしは、個人的な力だけでは営むことができなく、社会全体で助け合う仕組みにより成立している。授業では、現代生活の特徴を明らかにし、福祉制度がどのように私たちの暮らしに結びついているかを学び、生活全般にわたる福祉についての理解を深める。	
		現代生活と芸術	現代社会における芸術をどのように位置づけ、考え、学び、実践していくのかを、音楽、美術の両面から考察し検証する。芸術が社会とどのように関連し、何が創造され、生活や社会活動を豊かにするのかを、過去と現在を比較しながら学んでいく。音楽では、現代生活に大きく影響を与えた音楽史での発明とこれまでの経緯をたどり、現代における音楽のあり方を検証する。また美術では表現の歴史と社会背景について知り、それらが現代にまで与える影響や生かされている点について、現代の美術作家の視点をもとに検証を進め学びにつなげていくと同時に社会活動としてのアートという観点から様々な実践例をもとに学んでいく。 ○原始時代の痕跡、ルネッサンス、印象派、葛飾北斎、コンテンポラリーアート、アウトサイダーアート、アートプロジェクトといった視点を通して、現代の生活や価値観を通して、芸術を比較し検証する。(末次弘明 1回～8回) ○楽譜、オペラ、歌舞伎、平均律、ピアノ、録音技術、音楽鑑賞プロジェクトといった切り口から現代生活における音楽のあり様を比較し検証する。(鈴木しおり 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と教育	教育を成長の過程と併せてとらえ、現代生活を有意義に過ごす上で必要となる基礎的なリテラシーを磨く。教育とは何かを考えることから始め、第Ⅰ部では、人間の成長段階に合わせ、貝原益軒の「和俗童子論」、世阿弥「花伝書」、宮本武蔵「五輪の書」、鴨長明「方丈記」、高田好胤「好胤のこぼれ」等と比較しながら教育の意味や意義を考える。第Ⅱ部は、企業の新人教育、新製品開発にかかわるエピソード、一流スポーツ選手へのインタビュー等をもとに、教育と成長との関わりについて考える。	
		現代生活と心と体	現代生活は、経済の発展、技術革新、人・物・情報などが自由に移動する等により、豊かで便利な生活となり、人間の健康水準は向上している。しかし、その一方で、感染症、生活習慣病、心の病といった新たな健康問題も出現している。本講義では、人間を取り巻く現代生活の特徴、心や体の基本的知識、代表的な心や体に関わる問題について理解を深める。また、自らの心と体に目を向け、現代生活で心や体を守るために必要なことについて考える力を養う。	
		現代生活と物理	物理は自然科学の基礎と言われている。普段私たちは物理ということ意識して過ごすことはあまりない。実は、自然現象や日常生活においておこる様々な現象は、物理に密接に関係している。物理は身近なものなのである。「なぜ飛行機はとぶのか」「空はどうして色が変わるのか」「そもそも色とは何か」「超伝導とは何か」「音や音程のしくみは」「なぜ時には速さがあるのか」「なぜ摩擦がおきるのか」など、疑問はつきない。物理の基本的概念の助けを借りて理解できることがたくさんある。この講義では、物理の知識を学び、日常生活においておきる現象を客観的に見る力を養い、専門分野の学びを深めることにつなげる。 ○光(空の色、物体の色、色) 松澤衛/3回 ○音(音程、音色、ドップラー効果) 松澤衛/3回 ○運動(時速、衝突) 小田研/3回 ○熱と摩擦 小田研/3回 ○電気と磁気(磁気と記憶) 小田研/3回	オムニバス
		現代生活と宇宙	身近なところにある現代生活と宇宙のつながりについて、3つの視点で講義を展開する。まず、宇宙誕生から現代までの時間を様々な時間スケールに置き換えて考える。137億年の歴史を1年に縮め、宇宙の歴史における人類について考える。次に、宇宙に飛び出した人類の視点から、宇宙開発や宇宙から見た地球、宇宙飛行士などをテーマに宇宙から見た地球を考える。最後に、人類が宇宙へ進出する中で生まれた様々な技術が、私たちの生活の中にも役立てられている。この技術移転(スピノフ)について紹介する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	教養科目	現代生活と環境科学	現代の私たちの生活は、科学の発展とともに物質的に豊かで便利なものになってきた。しかしその反面、自然環境の汚染による生活環境の悪化、資源エネルギーの不足、地球温暖化など様々な問題が生じている。本講義では、人間をとりまく自然のおよび社会的環境とその中で生じている今日の問題について理解し、環境と人間の関わりについて考え、問題解決の方向を探ることを目的とする。はじめに、環境とは何かについて考える。地域環境と生命とのかかわりや、快適環境への人間の適応、現代生活における生活リズム・大気・水・化学物質等について考察を深め、地球を取り巻く環境の諸問題について考える。
		北海道の文化	北海道はアイヌ民族が先住民族として居住する地域に、明治以降に各地から200万人以上の人々が移り住んだ地域である。移住地で庶民はどのような生活文化を築いたのだろうか。庶民が営々と築きあげてきた日本の生活文化について、民俗学視点から講義する。本講義では昔から伝承された生活文化が、現在はどういうように変化しているのか。昔と今の文化を比較しながら、具体的な事例をもとに自文化について考察する。また人の移動と文化形成の視点から、北海道が新しい文化を受け入れやすいという道民性についても考える。
		日本国憲法	日本国憲法は、我が国の最高法規・国づくりの基本となるものである。したがって、私たちの住む国家・社会をどのように発展させていくかの指標ともいえる。その意味では、日本国憲法の内容、役割、機能を真摯に学習することは、主権者である私たち国民にとって極めて大切なことである。中学・高校と学んできた日本国憲法の知識をもとに、憲法の基本理念やしきみについて理解を深めていく。さらに、憲法が制定されて60年以上が経過する間に、多くの憲法問題、裁判例が蓄積されてきたことを踏まえ、現代的な諸課題についても主権者としてどうあるべきかを学んでいく。
		情報社会及び情報倫理	インターネットの普及により、情報や情報技術、ネットワーク技術に関わる様々な事柄が、当然のこととして扱われている。それらを正しく理解、利用することで、社会生活により良い効果が生まれる。しかし、間違った理解や、利用方法を誤ると、個人においても社会に対しての悪影響を防ぐことはできない。情報や情報技術、ネットワーク技術がめまぐるしく発達する中で、その利用方法や役割、影響等について、正しく理解し、考察し、情報倫理の必要性や、情報を扱う責任について考え、望ましい情報社会の構築に積極的に参加する態度を身につけることを目的としている。
		情報処理(中級)	どのような社会分野でも情報処理の技術が、求められる時代になってきた。本学でも情報処理の基礎としての科目を用意しており、社会人生活で最低限必要な知識と技術を身につけることができる。情報処理中級では、基礎技術をベースとして、より高い社会の要求に対応できる人材育成を目的とし、アプリケーションを自在に操るマクロ、情報の整理整頓を行うデータベースを中心に、コンピュータでのデータ処理の知識、技術を学習する。
		情報処理(上級)	どのような分野でも仕事を行う上での必須アイテムがコンピュータである。本学では、情報処理の基礎、中級という科目を用意しており、社会で必要な情報処理技術を学ぶことができる。この科目では、更にコンピュータ、スマートフォンに代表される携帯端末、ネットワークの仕組みを理解し、より高度な情報処理技術を学ぶ。情報端末やネットワークをプログラミングにより制御をして、コンピュータを自由自在に制御する方法を習得することを目的とする。
	就業力養成科目	キャリアデザインⅠ	本講義は、体系的に開講される本学キャリア教育科目のスタート地点に位置する基礎科目である。自己の進路を見据えて望ましい職業観の醸成を主なねらいとし、学び、働くことの意味を考えることから始める。いずれ、己の足で立つ労働市場の現状を早い時点で知ること、次の段階への意欲づけにつなげたい。講義を通じ、大学で学ぶことや社会で働くことの意義について、若年労働市場の現状を経済情勢や雇用環境の変化などと関連づけて理解し、自らのキャリアについての展望を持てるように促す。
		キャリアデザインⅡ	本講義は、キャリアデザインⅠに続く基礎科目として、キャリア意識の醸成を目指す。様々なキャリアを経験してきた教員や各種の仕事で活躍している卒業生の話を聞き、多様な生き方や考えがあることを学ぶ。これにより自己の興味範囲外の世界があり、一見関係のない分野も全てが繋がって社会が成り立っていることを理解し、キャリアの広がりや認識する。また、社会に出ていくために必要なワークルールや敬語など社会人としてのコミュニケーションのルールについて学ぶ。
		キャリアデザインⅢ	本講義は、自らのキャリアを構築させるための対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の醸成を目指す。様々なコミュニケーションワークを体験し、自己の意見を伝え、他者の意見に耳を傾けることができる「発信力」「傾聴力」の習得を図る。また、自己の考えを文書化し、グループの中で主張できる「表現力」「企画力」の習得を図る。小グループでの企画書づくりを通して、他のメンバーと協力して物事を作り上げる「課題解決力」の習得を目指す。
		キャリア演習Ⅰ	本演習は、自らのキャリア構築のための実践的な対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の向上を目指す。対自己基礎力では、就職活動の自己アピール文を作るための自己分析を行い、自分の強みを正しく理解する。対人基礎力では、他者へ訴求できることを目指し、実践的な自己PR演習を行う。また、就職活動には欠かせない履歴書の作成を通して言語的コミュニケーション基礎力の向上を目指す。まとめとして、就職活動で成功するために自らの目標を設定し、実現のための具体的な行程表を作成する。

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
全学 共通 科目	就業 力 養 成 科 目	キャリア演習Ⅱ	本演習では、進路決定のための実践的な就職活動の基本についてを学ぶ。模擬面接、模擬グループディスカッション等の実践的な演習を通じて、自己のコミュニケーション力を正しく把握し、さらなる自主努力の必要性を理解し、自発的行動への意識を喚起する。民間企業、福祉施設、教職、公務員など志望分野は異なっているが、社会・職業への移行に必要な力・本質は同じであるという大原則を正しく理解する。また、ビジネスマナーを通じて社会人としての立ち居振る舞いの習得を目指す。	※講義
		キャリア演習Ⅲ	本演習は、大学のキャリア教育の中で実践教育に位置づけられる。就職活動中の民間企業希望者や福祉施設希望者、面接試験を控えた教員や公務員志望者を対象に開講する。演習では、模擬グループディスカッションや模擬面接を通して「面接力」の向上を目指す。模擬面接では、受験者役、面接官役、評価者の3役全てを体験することで、それぞれの視点を理解し、柔軟性と状況把握力を養う。また、「面接力」の基本となるコミュニケーション能力の向上を目指す。	
		キャリア演習Ⅳ	本演習は、大学のキャリア教育科目の総括科目にあたる。将来の進路決定の有無に関わらず、今後一生続く自らのキャリアを見つめる社会人としての視点を学ぶ。社会で活躍している人の講演や、ビジネスマナー、働く人の法制度等を学ぶことにより、物事に対する俯瞰的視点を習得を図る。社会のルール、社会的行動への理解を深め、応用力を養成することで、社会人1年目から活躍できる「+αの社会人力」を身につけることを目指す。	※講義
		就業力特別講義Ⅰ	本講義は、民間企業の就職試験において90%以上実施されている筆記試験対策の実践教育である。対策分野はSPIの非言語分野に絞り、展開方法は全8回のオムニバス方式で実施する。各分野の担当講師から解法のポイントを学び、論理的思考の醸成を目指す。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○確率 : (松澤) ○グラフの領域 : (佐藤(克)) ○速度算(速度・距離・時間) : (菊池) ○割合、比率、濃度 : (水野) ○仕事算、水槽算 : (松村) ○損益算 : (澤田) ○集合、順列・組み合わせ : (西村) ○表の読み取り : (佐々木(雅))	オムニバス
		就業力特別講義Ⅱ	本講義は、就業力特別講義Ⅰで学んだSPIの解法を正しく理解し、自らの実践力を確認し、論理的思考の深度を図ることを目指す。講義では「就業力になぜSPIの勉強が必要か」を問い、相互確認することから始める。社会人基礎力における論理的思考の重要性を再認識することでSPI対策に自主的に取り組む姿勢を醸成する。SPI対策の実践では、就業力特別講義Ⅰの復習と応用問題に取り組み、正確でより速い解法力を育む。 (オムニバス方式/全8回) (小室晴陽/1回) SPI非言語対策と論理的思考の必要性 (菊池隆夫/7回) SPI非言語応用問題対策	オムニバス
		インターンシップ	本演習は、企業・団体等での就業体験を通じて就業力を育成することを目的としている。インターンシップは、①日々学んでいる専門性を実践の場で発揮する機会として、②自ら選択した職種の適性を判断する機会として、③進路とは異なる業種、職種を経験する機会として等、各自の目的に応じて活用することが可能である。インターンシップにより、将来の進路選択の際に必要なさまざまな知識を吸収すると共に、社会に通用する価値観や労働を通じた社会貢献の重要性に気づき、社会人としての基礎力を培うことを目指す。	
外国人 留 学 生 科 目		日本語	外国人留学生対象科目である。本学における学習場面でのコミュニケーション・学習・発表がスムーズに行えるように、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの技能の向上を目標とする。また、日本の文化、事情、風習、マナーなどを読み物や視聴覚教材を通して理解することで、日本での留学生活がより有意義なものになるようにする。例えば、読解を目的に小説を読むことや、語彙と文法事項、漢字などの学びに加えて、日本の事情や文化等を扱ったニュースに触れ、日本の演劇鑑賞などを教材として学ぶ。日本語能力検定1級を必ず取得しよう。	
		現代日本の文化	外国人留学生対象科目である。現代日本の文化では、留学生の出身国(地域)における自国の文化認識を確認し、それらと比較しながら、日本文化や地域文化(北海道)の内容について理解を深める。出身国(地域)の文化認識の確認ことから始めて、日本の伝統文化である「食文化」「文化遺産」「スポーツ」「芸術」「マンガ・アニメ」「生活習慣」等を学ぶ。また、北海道の地域文化を理解することを目的にして、「博物館体験授業」を通じた学びを行なう。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
発展科目	心身・健康に関する科目群	食生活と健康	日本の食事や日本人が培ってきた食事文化は世界一の長寿国をもたらした。しかしながら、現在の日本人の食事のあり方にはさまざまな問題点が指摘されている。私たちの現状の食生活を直視し、健康的な食生活を営むための基礎的な知識を学ぶ。さらには自ら食事を実践するための基本的知識を養う。
		スポーツ施設管理論	体育などのスポーツ関連施設だけでなく、集会場を含む一般的な公共施設を良好な状態で使用し続けるための各種知識を伝授する。生涯スポーツを含む生涯学習時代を迎えて益々、これらの多様な活動を支える公的施設の重要性が高まっている。そのような現代日本において、健全な社会生活を保障するために各種の施設が保つべき環境条件を講義する。具体的には各種の施設、建築物、設備、器具、屋内環境、運営面、専門家の資格ほかを学ぶ。
		心理学概論	人間の心のはたらきについての科学的・客観的な理解を得るために、心理学の基礎的な理論や知見を学ぶことを目的とする。人間の「見る」「考える」「学ぶ」「覚える」といった基礎的な過程についての知見を解説を行う。また、「欲する」「感じる」といった心理的活動の背景にある生理的・身体的な基盤について解説する。それらを基に、心の個人差や、健康や病理についても考える。個人の自己理解や他者理解を深め、実生活や実践の場にも活用できる知恵へとつながることを目指す。
		心理統計法	基礎統計学で学んだ知識をもとにして、心理学領域で必要となるデータ処理の方法を学ぶ。実際のデータおよび研究事例をもとに、データ処理をフローチャート化し、どのようなデータに対してどのような処理を行うのかについて、解説する。特に統計処理の結果をどのように理解するかに焦点をあてる。具体的には、毎回、演習課題を実際に行い、考察することを通して、データの表示、平均の差の分析、実験計画と分散分析、相関・予測の分析、度数の分析、因子分析、回帰分析について、理解を深める。到達目標：(1)データの種類によって、適切な統計処理の方法を選択できる、(2)基本的な統計処理を行うことができる、(3)多変量解析の結果を理解できる。
		生涯発達心理学	従来の発達心理学は、誕生から成人に至る段階までを対象に、それぞれの発達段階で何ができるのか、どのような行動を示すのかを明らかにするものであった。近年、人の寿命が延び、胎児期からの心理学的研究がなされるようになったことから、これまでの傾向が見直され、全生涯を扱う縦断的な観点から発達過程を捉え直すようになってきている。人間は一生をかけて発達する可能性があるという視点に立ち、誕生から死に至る人間の心理的発達過程について、これまでに明らかにされてきた研究成果を中心に概説する。
		人間関係の心理学	人間関係は二者関係が基本となるが、それにとどまらず、より複雑な人間関係の中で様々な心の動きが生じ、その事が個々人の認知や感情、そして行動面に影響を及ぼす。人間関係はその存在が心の支えになることもあれば、ストレスになることもある。他者の心理状態を知り、適切なコミュニケーションが取れることは、家庭、学校、職場、近隣を問わず、あらゆる場面において重要である。本講義では、人間関係を心理学の視点から包括的に理解することを目的とする。
		育児支援の心理学	現代社会では少子化が進む一方で、育児ノイローゼや児童虐待問題が益々深刻化している。子育て支援についてもさまざまな見解がある。本講義では、現代社会の実情をふまえたうえで、子育て・家族支援の現場からの具体的な事例を適宜提示しつつ、子育て支援の必要性和重要性について改めて確認し、実際に求められる子育て支援と、その実践について考える。さらには、母子世帯、父子世帯他、さまざまな家族形態における生活事象をみずえた子育て支援のあり方についても具体的に検討する。
		福祉心理学	今日の福祉問題に関する心理学的研究は始まったばかりであり、いまだに未開拓な面が多い。社会福祉学と心理学の学際的研究領域である福祉心理学とはどのような学問なのか、福祉的対応がどのような心理的影響を与えるのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、福祉的対応を必要とする人々の心理的特性ならびに福祉的対応に役立つ心理的技法、そして福祉施設における心理的問題などについて、いくつかの事例をもとに学ぶ。到達目標：(1)福祉心理学とは何かを理解する、(2)対人援助における心理的支援について、基本的な理解を得る、(3)対人援助における心理的援助の方法について、基本的な理解を得る。
		犯罪心理学	犯罪（非行）という行為を通して、社会や人間のあり方を考えることを目的とする。過去や現在の犯罪（非行）の情勢、その特徴、対策や対応などについて、心理学的視点をもとに考えていく。 具体的には、犯罪（非行）の発生する生物・心理・社会的要因について考えることや、暴力犯罪や窃盗、性犯罪などの罪種についての概要、警察におけるプロファイリングなどの犯罪対応、矯正の現場など多岐にわたって取り上げていく。
	社会と生活に関する科目群	社会学	家族、企業、地域等々、現代社会は様々な領域において深刻な社会問題を抱えている。本科目では、これら生活上の諸問題が生み出された背景について、近代の主要な社会変動とのかかわりから理解しつつ、社会学者がどのような理論構築をしてきたのかについて講義する。さらに、いくつかの話題を例示しつつ、様々な問題解決に必要な福祉のあり方を考える機会を設け、学びを深める。
		社会保障論Ⅰ	社会保障の理念や経済的な機能について解説するとともに、社会保障を構成する諸制度（公的年金、医療保険、介護保険、労災保険、雇用保険、生活保護など）の仕組みについて解説を行う。これにより各制度により保障される生活の水準を理解することを目的とする。また、社会保障の財政事情を解説して、その規模と課題を理解することも合わせて目指す。 講義形式で展開し、現代社会とのつながりを理解するため適宜、新聞や専門誌の記事およびVTRを紹介する。

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会と生活に関する科目群	発展科目	地域福祉論Ⅰ	これからの地域福祉において、社会福祉士は地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成を図る等、地域福祉の増進に働きかける役割等を適切に果たすことが求められるようになった。そこで地域福祉論Ⅰはまず地域福祉の基本的な考え方、新しい社会福祉システムとしての地域福祉の考え方や地域福祉の理念、地域福祉を担う主体の形成および公私協働の実践を学習する。	
		生活の中の介護福祉	介護を必要とする人の増加を背景に、介護および介護福祉に関連する様々な課題が問われている。それらの課題と関連させながら介護とは何かを考える。その上で介護援助の要素について学んでいく。介護および介護福祉の概念・理念から授業をスタートし、それらを踏まえて介護福祉サービスを提供するための基本的な考え方と技法を学ぶ。 本講義は、受講する学生が介護および介護福祉について、身近な事柄として関心をもって考えられることを目標とする。	
		高齢社会の街づくり	今日の人々にやさしい福祉の街づくりについての国及び自治体の制度・政策について学ぶ。特に重要な公共的建築物の福祉環境整備調査項目については、大学のキャンパス内での事例の検証とバリアフリー・ユニバーサルデザインについての企業の考え方をグループで協同して調査・研究を行い、その成果をポスターにまとめて合同で発表する。また、住宅の福祉環境整備項目についてはホームワークとして各自がレポートを作成し提出する。	
		社会教育概論	本講義は、社会教育の本質を学び社会教育主事として必要な知識を習得する。生涯学習社会における社会教育の立場と役割を学び、将来、教育委員会の社会教育行政や社会教育施設などへ就職していくための知識と技能を習得する。さらに、社会教育主事資格を取得するための必修科目であり、専門職としての知識を修得する。	
		社会教育計画	生涯学習社会の構築を目指し、地域の振興策を考える上で社会教育が重要な役割を担っている。社会教育を進める際の指針となるものが社会教育計画であり、その社会教育計画策定の基本的なことについて学ぶ。具体的な事例などを踏まえた講義と演習を取り入れながら学ぶ。	
		社会教育課題研究	生涯学習時代といわれる今日、多くの学びに取り組んでいるが、生涯学習と社会教育の立場や違いを整理し両者の役割と内容について具体的な事例などを交えながら学ぶ。さらに、生涯学習社会の実現のために社会教育が果たす役割について講義、演習を通じて学ぶ。	
		社会教育課題演習	教育行政における社会教育行政は、生涯学習を推進するためには欠かすことのできない重要な行政分野である。社会教育行政の専門的職員である社会教育主事は、社会教育を行う者に対する助言と指導が求められるため、その専門的な知識を学ぶ。講義と実践的な演習を行う。	
		社会教育施設論	社会教育施設が教育機関としての役割を果たすためには、「人」「物」「事業」等の機能の充実が求められている。本授業は、社会教育施設の目的や役割を学習するとともに、これからの施設の方向性と単なる場所としての施設ではなく、新しい学習空間としてのあり方を学ぶ。	
		ファッションデザイン概論	ファッションデザインは、形、色彩、素材、さらには作り方と着こなしがあり完成する。そして、そのデザインが歴史を作り変わり続ける。ファッションの持つ社会的役割が、どのように変化していったのかを検証し、ファッションをどのように生活の中で役立てていけば良いのかを考える。衣服とは何か？ファッションとは何か？デザインとは何か？おしゃれとは何か？自分らしさとは何か？を一緒に考える。 (オムニバス方式/全15回) (大信田静子/7回) 日常生活の中での衣服・ファッションとは何か？を考え、基礎的要素のデザインから入り、造形・色彩のセオリーを通して内面的・外面的な美しさを学ぶ。 (富田玲子/8回) 基礎デザインを踏まえ、情報と視覚、聴覚、臭覚、触角などから入る外部情報とを組み合わせ、新しいデザインの発想と展開を学ぶ。	オムニバス
		インテリアデザイン	インテリアデザインを学習する上で必要な、基本的知識の修得を目的とする。内装材料・家具・建具等のインテリア計画、移動経路を示す動線計画、人体寸法を含む寸法計画、建物の大きさや部屋数を示す規模計画、浴室・キッチン・暖房・照明等の設備計画、換気・シック対策を含む室内環境計画を総合的に理解することを目的とする。	
		ユニバーサルデザイン	ユニバーサルデザインの理念を含む建築計画について学ぶ。具体的な建築事例などを見ながら、ユニバーサルデザインの視点から人間の行動や意識と空間との相互作用に関する建築計画について習得する。特に、国土交通省の取り組んでいるバリアフリー新法(高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律)の視点から建築計画を学ぶ。	
		空間デザイン史	本講義は、日本建築および西洋建築ならびに近代建築について、それぞれの時代において人類が生活空間を獲得してきた歩みを振り返る。わが国にあっては、海外からの技術と様式を取り入れながら独自の発展を遂げてきたことを述べる。また海外の諸国では、各時代の文化との関連性にふれつつ構法と造形の発展過程や表現などについて講義する。さらに近代の建築作品では、著名な建築家と代表作、そして作家たちの系譜に関しても論じる。その上で、まとめとして世界の現代建築と近未来を展望する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
発展科目	文化と芸術に関する科目群	美術史	西洋と日本の美術史の流れを学びながら、当時の宗教や政治、経済など社会との関係の中で理解するとともに、美術作品を鑑賞する際の基本的な視点についても学ぶ。西洋美術は、ルネサンスから20世紀まで、日本美術は飛鳥時代から現代までの美術史を通してそれぞれの変遷を理解し、現代美術の多岐にわたる様相を考える手がかりを得ることが本講義の目的である。さらに、日本の伝統美術とアジアの美術の潮流を眺めながら、こうした展開を具体的な作品を取り上げて鑑賞しながら検証する。	
		美学	西洋におけるプラトン、アリストテレス、カント、シラー、バルト、リクール等、また中国と日本における画論、詩歌論、芸道論などを紹介を通じて、美と芸術に対する体系的な知識を講述する。またそうした思索力、記述力、鑑賞力が応用が可能かどうか、大学キャンパス内や札幌市内の美術館、ギャラリーに展示されている実作品を対象にして、検証する。	
学部共通科目		教育文化学	グローバル化と情報化が進み変動がすさまじい現代社会において、乳幼児から高齢者に至るあらゆる年齢層の人々が生き生きと豊かな生活を送るには何が求められるのであろうか。本講義では、教育学、芸術学、心理学の各専門領域から、人間生活の真の豊かさとは何かを考えつつ、人間の幸福につながる教育的な取り組みや、幅広く奥深い芸術の力、および、人間の幸福感につながる心理的理解について検討していく。 (浅尾秀樹／講義4回) 教育学の観点から、未来を担うこどもたちへの教育的かかわりや、地域生活における文化の継承について学ぶ。 (林 亨／講義4回) 芸術学の観点から、人間の精神生活を豊かにするアートの力について多面的に検討していく。 (風間雅江／講義4回) 人間の幸福感とは何か、どのような要因が幸福感に影響をおよぼすのか等について、心理学の観点から異文化を比較しながら検討していく。 (武邑光裕／講義3回) 文化芸術の多様な表現に代表される創造性を活かし、産業振興や地域の活性化などのまちづくりを進める創造都市について考える。	オムニバース
		芸術と心理学	本講義は心理学の視点から芸術全般について考えていくことを目的とする。特に「造形芸術」「言語芸術（文芸）」「音響芸術（音楽）」「総合芸術（舞台芸術、映像芸術）」など広い視点で芸術と心理学の関連を考えることを目的とする。担当教員はこれまでカウンセリングの技法として描画や箱庭などの表現療法を行ってきた。そのような悩みを抱えた人間の回復過程における「芸術・表現」の意味についても取り上げたい。	
		生涯学習論	当講義は、生涯学習の初心者を対象としている。生涯学習という言葉で提唱されたのは、1965年パリにおいて、ユネスコの成人部会長であったポール・ラングランによる。その背景、学習理念、目的、成り立ち、我が国への導入について基本的な理解をし、それが我が国の社会でどのように進展したのかを学習するのがこの講義の目標である。	
		生涯学習展開論	生涯学習とは人々が自由に自主的に学習活動を行うことである。その学習活動を支援するためには、人間の発達課題を理解することも必要である。乳幼児期から高齢期までの発達課題や学習課題を踏まえて、学習活動の展開・方法を教育行政の役割を通して学習する。 本講義における到達目標は、(1)人間の発達課題についての理解、(2)人々の発達課題に対応するための学習の展開・方法の理解、(3)様々な学習活動を展開するための行政の役割の理解、である。	
		メディアデザイン概論	さまざまな芸術分野で活用されているデジタル技術について分野ごとに学習する。本科目は、メディアデザイン分野を学習する上での第一歩として、メディアとは何か、デザインとは何かについて学ぶ。メディアデザインの根底となる情報通信技術(ICT)とは何かを理解し、ICTの発展が今後デザインの世界にどのような影響を与えるのか推測できるようになることを目標とする。	
		カウンセリング心理学	個人の心理的問題を解決するために、カウンセリングは主要な支援方法の1つとなっている。本講義では、カウンセリングとはどのようなことをするものか、カウンセラーとはどのようなことをする人なのか、カウンセラーと来談者（クライエント）とはどのようなコミュニケーションを行っているのか、また、その中でカウンセラーはどのような観点でクライアントの話を聴き、応答しているのか、など、臨床心理学におけるカウンセリングについて、基本的な知識を学ぶことを目的とする。	
		青少年学習コーチング論	青少年の学習活動は、学校教育が中心であるが、生涯学習が進んだ今日では、地域における生涯学習活動の一環であると捉えることも重要な視点である。特に昨今、青少年の健全な育成のために学校教育と地域社会の連携に注目が集まっている。本講義では、青少年心理学に通ずる学習を先に行い、その後、青少年を取り巻く環境の変化を知り、青少年に対する理解や支援のありかたを探ることを目的とする。	
		リカレント教育論	リカレント教育とは、成人が学習の場に戻りその後再び職業へ回帰することをいう。生涯学習の範疇であり、成人が学習する場合の重要な要素として位置づけられている。特に、ヨーロッパ諸国では、生涯学習が職業的な向上を目的として実施されてきたが、今日では、学習をしたことの満足感、達成感など精神的な面での効果も明らかになっている。本講義では、OECD、ILO、ユネスコなどの見解や条約なども勘案しながら、諸外国と日本におけるリカレント教育の類似点や相違点を探る。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学科専門科目	コース 共通科目	教職概論	教師としての必要な知識や技能を学ぶとともに、教師の仕事の内容について理解を深め、教師としての資質・能力を磨く。また、現在、教師が当面する課題を取り上げ、グループで討議をし、自らの考えをまとめて発表するなど実践的な授業を展開し、教師としての意識づけを図っていく。 (オムニバス方式／全15回) (山谷敬三郎／6回) 教育の今日的現状と課題について学ぶ。子どもをどうとらえるか、そして、教えること学ぶことの意義について理解し、時代の変遷とともに求められる教師像について考えます。 (高田茂／10回) 教職の使命と責任を理解し、自らの適性についての自覚と、教職選択の目的を明確にする。教師の仕事と役割の理解のため、図書・新聞等からの情報をもとに考察し、グループ活動で討議する等の学習を行う。	オムニバス
		教育原理	教育や教育学に関する基礎的・基本的な概念や知識を提供する。そのことを通して、より専門的な内容を学習する上で不可欠な教育学的教養の形成を促す。その際、毎講義ごとに、必ず学生に質問を投げかけ自ら考えてもらう機会を設けるだけでなく、毎回のレスポンスカードや小テスト(2・3回に1度)を活用することで、学生に能動的に講義に取り組んでもらう工夫をする(アクティブラーニングの実施)。	
		教育心理学	教育心理学は、「教育」という事象を理論的・実証的に明らかにし、教育の改善に資するための学問である。本講義では、幼児・児童・生徒の心身の発達や学習の過程についての理解を深め、適切な指導のあり方を学ぶ。また、障害のある子どもたちの心身の発達や学習の過程についての理解と指導のあり方を学ぶ。本講義の到達目標は、(1)児童・生徒の心身の発達についての理解、(2)学習のプロセスと指導のあり方についての理解、(3)児童・生徒の理解と指導・評価のあり方について理解、である。	
		教育経営学	今、子どもたちは、様々な課題を抱えていることが指摘されている。また、教育の意義が問われてもいる。このような中で、改めて、学校教育などの公教育の意義や可能性を考える時間としたい。「教育経営」を学校経営を学ぶことで学習していく。本講義の到達目標は、(1)子どもたちを取り巻く教育環境を広い視野に立ち理解できること、(2)学校教育だけでなく教育全般について基本的な理解ができること、(3)教育について経営の視点の重要性が理解できること、である。	
		学校ボランティア活動Ⅰ	教員の資質として、学習指導のみならず、生徒指導や学校行事等の小学校教育を実際に経験することは、教員を目指す者にとって大変重要なことある。本講義では現場での授業や学校行事等を参観したり、アシスタントティーチャー(ボランティアティーチャー)を体験するなど、教育現場の実際を目と体で体験することで、小学校教育の理解を深める。さらには、教師を目指す者として、現場での体験交流を通して自身の教育観を確立できるよう学びを深める。	
		学校ボランティア活動Ⅱ	教員の資質として、学習指導のみならず、生徒指導や学校行事等の小学校教育を実際に経験することは、教員を目指す者にとって大変重要なことある。本講義では現場での授業や学校行事等を参観したり、アシスタントティーチャー(ボランティアティーチャー)を体験するなど、教育現場の実際を目と体で体験することで、小学校教育の理解を深める。さらには、教師を目指す者として、現場での体験交流を通して自身の教育観を確立できるよう学びを深める。	
		特別支援教育総論	本講義では、「障がい」の捉え方、各障がいにおける特別支援教育における諸課題について学ぶ。また、寄宿舎教育、兄弟の支援の在り方について学ぶ。とりわけ各「障がい」については、「障がい」理解を深めるとともに、各歴史性を踏まえつつ、共生社会の形成の在り方についての諸課題についての理解を図る。	
		知的障害者の心理・生理・病理	知的障がい児(者)の障害特性、心理的影響、認知機能の発達、評価方法、生理・病理について、基本的な理解を得る。また事例を通して、自立及び社会参加、教育的ニーズ、基本的な支援方法について、考察する。さらに、通常学級において特別な支援を必要とする軽度発達障害児の行動特性と支援方法についても理解を深める。	
		肢体不自由者の心理・生理・病理	肢体不自由の定義やその原因となる様々な疾患について学び、さらに身体各部位の名称と各関節の運動及び肢体の表示法について学ぶ。また心理テストの使用法の理解を深め、肢体不自由教育で必要となる基礎的な知識を身につける。特に、「脳性まひ」の原因と病型について学び、反射や反応について具体例をとおして学ぶ。	
		病弱者の心理・生理・病理	病弱者や身体虚弱者の定義及び心理的な影響、基礎的な生理・病理について学ぶ。心理的な側面については、特別支援学級、特別支援学校、院内学級などの教育をとおして学ぶ。病理については、慢性の呼吸器疾患や腎臓疾患、神経疾患、悪性新生物などの基礎知識を学ぶ。また、生活面における生活規制や心理面での配慮について学ぶ。	
		知的障害教育Ⅰ	知的障がい教育の歴史的な変遷及び教育内容・指導方法について学ぶ。特に変遷においては、「アヴェロン」の野生児」より、模倣教育、感覚統合教育の原点について学ぶ。また、知的障がい教育の変遷を日本及び世界の歴史から学ぶ。さらに、教育課程の特徴である、領域・教科を合わせた指導である「日常生活の指導」「遊びの指導」「生活単元学習」「作業学習」などについて学ぶ。	
		知的障害教育Ⅱ	知的障がい教育の教育内容・指導方法について、実際に学習指導案を検討しながら学ぶ。特に教育課程の特徴である、領域・教科を合わせた指導である「遊びの指導」「生活単元学習」「作業学習」や「教科別の学習」について学ぶ。さらに、「個別の指導計画」や「各種心理検査の仕方」について学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	コ ー ス 共 通 科 目	肢体不自由教育Ⅰ	肢体不自由児に応じた教育課程の編成や、各教科の指導の工夫、自立活動の具体的指導内容やＡＴを含む情報機器等の活用方法について学ぶ。このことを通して、肢体不自由の障害特性に応じた指導上の配慮事項への理解を深めることを本講義の目的とする。また、肢体不自由教育において、ICFの理念を生かした授業作りを進めるために、個別的教育支援計画と個別の指導計画との関連をどのように図っていくべきであるかについて学ぶ。	
		肢体不自由教育Ⅱ	特別支援学校の指導場面で有効な応用行動分析の手法について理解する。学校での指導におけるデータ収集及び分析の必要性を知り、エビデンスに基づく指導の在り方についての理解を深める。	
		病弱教育	病弱教育の意義・歴史について学び、児童生徒の病気の状態や学習環境に応じて、教育内容の精選や指導方法の工夫、諸機関との連携等の在り方について理解を深める。特に、特別支援学校・特別支援学級の教育の特徴や教育課程における自立活動について学ぶ。機関等の連携としては、病院・前籍校・保護者・養護教諭とのつながりの中での諸課題について学ぶ。	
		視覚・聴覚障害者の心理・生理・病理	視覚・聴覚障害の原因や心理的な特性について学ぶ。特に心理的な特性では、見え方、聞こえ方による認知発達や言語発達について学ぶ。また、生理・病理においては、網膜の働きや映像の及ぼす認知特性、聴覚器官の構造と機能、聴覚検査法について学ぶ。さらに、社会参加・自立に至る過程の心理的な諸課題についても学ぶ。	
		重複障害者の心理・生理・病理	重複障害の原因や心理的な特性について学ぶ。特に「乳幼児期」における見え方、聞こえ方等の感覚器官への影響による認知発達や言語発達について学ぶ。また、生理・病理においては、「大脳の働き」と「てんかん」などについて学ぶ。さらに、具体例として「盲ろう重複」「肢体不自由を伴う事例」や「医療的なケア」等の諸課題についても学ぶ。	
		発達障害者等の心理・生理・病理	発達障害については、脳科学の進歩により、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、アスペルガー障害などの障害の特性が少しずつ解明されてきている。本講義では、自閉症、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)などの障害の特性に応じた教育課程の編成や指導方法について学ぶ。	
		視覚・聴覚障害者の教育課程及び指導法	視覚・聴覚障害者教育の自立活動や教科学習時における配慮事項などについて学ぶ。特に見え方、聞こえ方による認知発達や言語発達の特性や感覚器官の機能特性に基づいた指導法について学ぶ。さらに、進路指導における社会参加・自立に至る諸課題についても学ぶ。	
		重複障害者の教育課程及び指導法	重複障害者教育の特徴である自立活動の項目を中心に、学習時における室温度管理などの配慮事項などについて学ぶ。特に残存能力の把握の過程で皮膚感覚や見え方、聞こえ方など感覚器官の発達に基づいた指導法について学ぶ。さらに、訪問教育の諸課題についても学ぶ。	
		発達障害者等の教育課程及び指導法	発達障害については、脳科学の進歩により、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、アスペルガー障害などの障害の特性が少しずつ解明されてきている。本講義では、自閉症、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)などの障害の特性に応じた教育課程の編成や指導方法について学ぶ。	
		特別支援教育実習事前指導	特別支援学校における教育実習の事前指導として位置付けている。実習を行う前に学校経営や学級経営について基礎的な知識を身につける。学習指導案の細案の書き方を習得し、障がい種別による指導案を作成する。その後模擬授業を展開し、指導案及び授業の展開について反省等の話し合い活動を展開する。さらに４年生の行った教育実習の報告会に参加し、今後に向けての課題の整理を行う。	
		特別支援教育実習事後指導	特別支援学校での教育実習後の指導として位置付けている。教育実習中に行った授業研究の指導案を基に、授業を行った際の成果と課題を明らかにし、教授に関する専門的な知識・技能に関して習得すべき内容について整理を行う。また、学校経営、学級経営等の基礎知識の確認や、実際の生徒指導等の課題について整理を行い将来に向けての学習課題を明確にする。	集中
		特別支援教育実習	特別支援学校における教育実習をとおり学校経営や学級経営について専門的な知識を身につける。学習指導案の作成をとおり児童生徒の実態に即した書き方を習得し、障がいに応じた個別指導の重要性を確かなものにする。授業展開後は、指導案及び授業の展開について反省等を行う中で、今後に向けての課題の整理を行う。	集中
		介護等体験	本講義の目標である「個人の尊厳」及び「価値観の相違を超える社会連帯の意義理解」を中核に、「障がい者、高齢者等に対する介護・介助及び交流」を活動内容として理解する。具体的には、特別支援学校では「登下校の送迎」「自立活動へのかかわり」「給食時の補助」「児童生徒との交流」などの具体的な関わり方の配慮点について学ぶ。社会福祉施設では「利用者の食事補助・環境保全・入浴、排泄などの衛生管理」などの仕方及び配慮点について学ぶ。	集中

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	コ ー ス 共 通 科 目	学習者の視点に立ち、学習者が自ら問題を発見し、自ら問題解決に取り組む学習活動を支援する理論や支援の手立てを専門的に研究することが授業のねらいである。2年次までに学習したことに基づいて、専門性を深めるために、教員と学生の協力によってゼミナールを運営する。自らが極めたいと考える領域をもとに指導教員を選択し、選択した研究室等においてゼミナール形式によって授業を展開する。 (浅尾秀樹) 子どもは運動遊びの中から多くのことを学び、身につけていく。そのあそびについて探究する。まずは、いろいろな遊びを調べて、体験し、いつでも・どこでも指導できることを目指す。そのために、運動遊びの指導法を工夫する、季節に対応した運動遊びを工夫する等を行う。 (今野 洋子) 専門分野研究の前段階として、専門分野の基礎知識を学ぶとともに、研究の進め方の基礎を学ぶことを目的とする。学校教育や養護実践等に関する文献研究を行い、内容についてディスカッションを行う。また、研究方法として、質問紙調査及び聞き取り調査等について学び、演習する。 (岡元眞理子) 声楽の発声、歌唱の方法に関する実技、演奏について学ぶ。歌曲、アリア、また民謡や宗教曲などの楽理的理解、表現方法を学習する。また、健康（心身を含む）に与える療法的効果などについて学ぶ。さらにそのものの内在する時代背景や言語について研究する。さらにイタリア語、ドイツ語、日本語の発音と発声方法について基礎的知識を学び、歌曲を中心にその歌唱法を体得することを目的に学習する科目である。 (神田 英治) 障がいの重度・重複化、多様化している児童生徒の実態把握のための多様なアセスメントの在り方について考察し、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導について、各種発達検査、知能検査等から指導方法への活用法を学ぶ。 (小杉 直美) 母語としての日本語について理解を深める。母語能力の育成とともに、言葉の教育について考察を進める。日本語について様々な角度から考察し、日本語に関する文献や言葉の教育に関する書籍を読み進める。言葉への理解を深め、外国人児童への日本語教育という考察をも試みる。教育へのICT活用を実践する。 (佐々木邦子) 専門演習Ⅰでは、児童の問題行動について文献を中心に学習する。学生の希望があれば、関連機関等の見学も予定している。前期中ごろまでは、定期的な文献輪読によるゼミ形式で、読解力、表現力、発表力、思考力と総合的な力を養い、その後フィールドワークへ移行予定である。 (佐々木浩子) 専門分野研究の前段階として、専門分野の基礎知識を学ぶとともに、研究の進め方の基礎を学ぶことを目的とする。心とからだに影響を与える様々な生活環境に関する文献研究を行い、内容についてディスカッションを行う。また、研究方法として、調査及び各種測定方法を学び、演習する。 (佐藤 朱美) 専門分野研究の前段階として、専門分野の基礎知識を学ぶとともに、研究の進め方の基礎を学ぶことを目的とする。養護実践と学校保健等に関する文献研究を行い、内容についてディスカッションを行う。また、研究方法について学ぶとともに質問紙調査及び聞き取り調査について演習する。 (島津彰) 教育相談の臨床場面をとおして、障害のある子供の実態把握としてのアセスメントの方法、指導内容・指導方法などの基礎を学ぶ。 (菅原克弘) 個々の演奏技術を活かし全員で協力し合って一つの音楽をつくる「合奏」に焦点を当て、作品の魅力を感じながら表現方法の工夫ができる合奏指導法について探求する。 (鈴木しおり) 「ピアノ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」と「ピアノ表現演習Ⅰ・Ⅱ」での学習を基礎に、技術力・表現力・鑑賞力を深化させる。学習成果を学内外で発表し、地域での音楽貢献を目指す。「卒業研究」を視野に入れ、自らの課題を見つける。 (高田 茂) 北海道らしい生涯学習社会の構築に向けて、道民が豊かな生活を送るために生涯を通じ積極的に学び、その成果を活かせる環境について学びます。具体的には、地域にやさしい町づくりを推進するため子育て家庭や障害者、高齢者を見守る活動等に積極的にに関わり、共に学び、体験する活動を通して世代間での交流を進めていきます。 (福田信一) 子どもの語彙の現状に着目し、語彙の獲得という視点から国語教育について学習を深める。語彙調査の結果等をもとに理解を深め、文章の書き方などについても学ぶ。その後、各自のテーマを深める演習とする。要望に応じて、小学校の国語授業の参観等も計画したい。 (松村憲治) 専門演習Ⅰでの学びをもとに、算数学習におけるコーチングについて学びを深める。特に、「おもしろ算数教室」における教材の開発や工夫、研究会の授業参観とその意見交流をもとに、算数科の創意ある指導の在り方を探る。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	コ ー ス 共 通 科 目	(山谷敬三郎) 学校において子どもたちが抱える諸問題の発生のメカニズムの理解を通してその解決方法を探る観点から、カウンセリングの理論と技法についてその理解を深める。具体的には学校心理学の視点から、一次援助、二次援助、三次援助のあり方を理解する。 (木下教子) 正しい食生活の知識・理論があっても、日々、それが食事として活用されなければ食生活の改善もされない。一人ひとりが「ご飯、汁物、肉か魚の1皿、野菜1～2皿」という基本となる食事が作れて、その大切さを伝承していく実践力を培う。 (末次弘明) 幼児や児童が遊びながら体験的に学ぶことを、造形活動を通して支援していく内容を取り上げる。主に教材研究と指導法について実践活動を通し学ぶ。また卒業研究を視野に入れた幅広い経験を持つように取り組む。 (千葉 圭説) 器楽基礎演習I, IIと器楽表現演習I, IIでの楽器演奏上の基礎的要素を生かしてより音楽的表現力や、個々の技能の向上を目指す。特に管楽器を演奏する上で不可欠な呼吸法をマスターした上でのブレスコントロールを重視する。エチュードから独奏曲のレパートリーを増やすと同時にバロックから現代までの演奏法上の違いなどを理解し演奏する。 (中山雅茂) 小学校で扱われる理科の実験に限らず、科学全般を対象として実験や観察、工作などの教室を企画する。特に、宇宙教育をテーマに取り組む予定である。子ども達がもつ旺盛な好奇心を、自然を愛する心や科学技術に対する純粋な興味・関心に育てていくために、どのように工夫したらよいかを考える。 (伏見千悦子) 幼稚園や児童デイサービスなどのボランティアや公開保育への参加を通して幼児教育・保育の現場を知るとともに、からだの動きで音・音楽を表現する「ミュージックムーブメント」(主にダルクローズメソッド<リトミック>)を中心に uptake、その理論と実際について学ぶ。幼児の豊かな感性や表現する楽しさ、集中力、記憶力、コミュニケーション力などを育む音楽遊びやその指導法について研究する。 (丸岡 里香) 健康に関する意識や行動についての疑問や興味を発展させ、研究に取り組む基礎を学びます。関連する文献を検索し、レジメを準備しゼミの中で紹介することからテーマを絞り調査研究へ進める事を目標とします。	
		学習者の視点に立ち、学習者が自ら問題を発見し、自ら問題解決に取り組む学習活動を支援する理論や支援の手立てを専門的に研究することが授業のねらいである。2年次までに学習したことに基づいて、専門性を深めるために、教員と学生の協力によってゼミナールを運営する。 (浅尾秀樹) 子どもは運動遊びの中から多くのことを学び、身につけていく。そのあそびについて探究する。まずは、いろいろな遊びを調べて、体験し、いつでも・どこでも指導できることを目指す。そのために、子どもの運動遊びに関する文献研究、レポート、指導資料づくりおよびプレゼンテーション作成、卒業研究のための資料収集などを行う。 (今野 洋子) 学校教育や養護実践の課題等について、調査を実施し、まとめる方法を学ぶ。まとめたものを発表し、ディスカッションを行い、研究を深める。また、日本養護教諭教育学会や北海道学校保健学会等への参加を行う。 (岡元真理子) 声楽芸術発祥の目的、現代に至るまでの発達と精神文化の成立過程などを歌唱体験を踏まえ実践学習していく。曲目の原点となる、グレゴリアンやミサ曲などからオペラアリアまでの特色を見出し、それぞれの歌唱技術を学ぶ。また、ラテン語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語、そして日本語のそれぞれの言語歌唱発声法について学び、声楽学習を深める。 (神田 英治) 障がい児童生徒の実態把握と教育的診断を行うために、各種発達検査、知能検査等を理解し、診断型検査、目標型検査、評価・分析型検査などの特徴から、実践的な指導に役立つ活用方法・内容について理解を深める。特に検査用具を活用した指導技法について習得する。 (小杉 直美) 専門演習Ⅰの発展的な位置づけとして行なう。外国人児童をも視野に入れた幼児や児童を対象とした言葉の教育について考察を深める。自身の興味を焦点化して、日本語教育について考察する。4年次の卒業研究に向けて、テーマに即した課題研究を進める。教育へのICT活用の視点に立ち、自身の活用能力を高める。 (佐々木邦子) 前学期の学習を基に小学校の生徒指導や進路指導を想定し、ケーススタディ(事例研究)を中心に学習する。教員からの一方的な伝達ではなく、学生の発意を促すようなコーチングが目的である。また、将来の教職や採用試験を意識し、幼稚園や小学校、および児童・生徒を取り上げた新聞記事、それらに関する見学学習などを通じて、こどもに対するより深い理解と認識を得られるような学習を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	コース 共通科目	(佐々木浩子) 生活環境やストレス、運動や睡眠不足等による心とからだへの短期・長期的影響とその改善方法について、研究論文等の講読および検討を通じて知識と理解を深める。各自のテーマに沿った文献の要旨をまとめて、関連する文献の紹介も含めて発表し、ディスカッションを行う。また、健康実践現場の見学および実験・実習を随時行う。 (佐藤 朱美) 学校教育や養護実践の課題等について調査を実施しまとめる方法を学ぶ。まとめたものを発表し、ディスカッションを行い、研究を深める。また、日本学校保健学会や北海道学校保健学会等に参加し研修を深める。 (島津彰) 教育相談の臨床場面をととして、障害のある子供の「個別の指導計画」を立案し、最適な指導方法の実施と検証を行う。 (菅原克弘) 専門演習Ⅰの内容を踏まえ、教材研究を深化させながらより豊かな表現力を培うための合奏指導法について探求する。 (鈴木しおり) 「ピアノ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」と「ピアノ表現演習Ⅰ・Ⅱ」、及び「専門演習Ⅰ」での学習を基礎に、技術力・表現力・鑑賞力を深化させる。学習成果を学内外で発表し、地域での音楽貢献を目指す。「卒業研究」を視野に入れ、自らの課題に取り組む。 (高田 茂) 専門演習Ⅰでの学習を基に、子どもを取り巻く環境など現状について学んでいきます。地域の大人が子ども達と関わりながら教育活動を進めていくことの大切さについて学んでいきます。 (福田信一) 後学期は、専門演習Ⅰの発展的な位置づけの演習とする。国語教育への考えを深めるとともに、4年時の卒業研究との関係から各自のテーマについて深める。 (松村憲治) 専門演習Ⅰでの学びをもとに、算数学習におけるコーチングについて学びを深める。特に、「おもしろ算数教室」における教材の開発や工夫、研究会の授業参観とその意見交流をもとに、算数科の創意ある指導の在り方を探る。 (山谷敬三郎) 学校において子どもたちが抱える諸問題の発生のメカニズムの理解を通してその解決方法を探る観点から、カウンセリングの理論と技法についてその理解を深める。具体的には、性格検査やQJ検査を用いてその検査の理論的背景を理解するし、その活用について深めるとともに、卒業研究のテーマを決める話し合いも含める。 (木下教子) 正しい食生活の知識・理論があっても、日々、それが食事として活用されなければ食生活の改善もされない。一人ひとりが「ご飯、汁物、肉か魚の1皿、野菜1〜2皿」という基本となる食事が作れて、その大切さを伝承していく実践力を培う。 (末次弘明) 専門演習Ⅰで取り組めなかったことや持続的に進める研究について確認をし、その経験をさらに発展させるものとする。実践力をさらに高めるためのワークショップや学外活動にも取り組む。 (千葉 圭説) 器楽基礎演習Ⅰ,Ⅱと器楽表現演習Ⅰ,Ⅱでの楽器演奏上の基礎的要素を生かしてより音楽的表現力や、個々の技能の向上を目指す。特に管楽器を演奏する上で不可欠な呼吸法をマスターした上でのブレスコントロールを重視する。エチュードから独奏曲のレパートリーを増やすと同時にバロックから現代までの演奏法上の違いなどを理解し演奏する。現代曲では特殊奏法を学ぶ。 (中山雅茂) 専門演習Ⅰで取り組んだ実験工作教室の経験をもとに、さらに地域の子ども達に向けた企画を考え実施する。 (伏見千悦子) 専門演習Ⅰを発展応用する形で進める。具体的には「ミュージックムーブメント」の理論と実際を基礎として幼稚園や児童福祉施設、障がい児の音楽遊びの会などでの継続的な活動を行い、教育実習や教員採用試験を見通した実践力の育成を目指す。幼児の「生活」「からだ」「こころ」「音」「動き」などの関連性について理解を深め、それらの学びを卒業研究に繋げられるよう各自のテーマを明確にしていく。 (丸岡 里香) 専門演習Ⅰで取り組んだ各自のテーマについての調査研究を実際に行い研究としてまとめる方法を学ぶ。Ⅱでは理解を深め発展させるために、これまでの学びを統合し健康観、教育観についてディスカッションする。また、異学年との交流や健康や教育に関連する研究会やセミナー、学会へ参加なども積極的に行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 専 門 科 目	コ ー ス 共 通 科 目	卒業研究	これまでの学習から自己の問題意識に基づく研究テーマを設定し、課題解決に取り組む結論に至る経験をとおり、教育の専門職としての実践的な資質・能力を高めます。研究の成果は、それぞれの課題・研究方法等に応じて、研究論文、作品制作、作品発表、卒業公演などにより公表します。	
		就業力特別演習Ⅰ	授業や授業の分析に関する課題をふまえ、授業の意義や課題を明らかにし、授業実践に生かすことができる基礎的能力を培う。	
		就業力特別演習Ⅱ	今日、「授業が思うように展開できない」「学級づくりに行き詰まっている」「保護者との関係に苦慮している」など、教師として職務の基本に関わる問題が、多くの学校の教師に共通する課題となっている。教師を目指すものとして、これらの課題をしっかり受け止め、その解決に向けての学習が大変重要である。様々な課題の原因を究明するとともに、それを克服するための手立てを探り、教師としての基礎的・基本的な力量の獲得を目指す。	
		就業力特別演習Ⅲ	現在、教育界では、教師力の向上が望まれている。教師の力量を高めるには、教科等の指導内容の理解や指導方法や指導技術の獲得だけではなく、正しい学数評価の理解とその能力を身につけることが必要となっています。本講義では具体的な場面での評価の仕方と活用について、理論と実践の視点から展開し学習評価能力の向上を目指す。	
	初 等 教 育 ・ 幼 児 教 育 コ ー ス 共 通 科 目	国語科概論(書写を含む)	小学校学習指導要領に基づき、小学校における国語科授業のあり方を考察する。母国語である言葉の教育として、国語科教育の目標を理解し、楽しく学ぶ国語の授業を通して言葉の理解力や表現法の指導原理を学ぶ。すべての教科目の基礎となる科目である。話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと・伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項や言語活動についてともに考察を深め、自身の国語への概念形成を行うことが目的である。講義では、学習指導要領の改訂の経緯や国語科の骨子への理解を深める。また、日本語の文字表記や文章を正しく表記し、漢字指導や文字について、基本を正しく理解するとともに、評価できることを目指す。	
		算数科概論	小学校教育における算数科の目標や内容や果たす役割について知り、指導内容の構成や子どもたちの様々な学習方略の有り様を理解しながら、小学校における算数科指導を概観し、指導原理を学ぶ。また、人間形成上、算数科が果たす役割に着目し、子どもたちの算数的な活動を大切に算数学習について、4つの領域内容について具体的な活動を演習形式で毎回取り上げ、子どもの多様な発想を高める指導について、実践的かつ体験的に学びを深める。	
		生活科概論	生活科開設の経緯やその意義及び教育的な背景について理解し、指導計画作成の基本や学習指導の在り方について学ぶ。また、幼児期における遊びや生活の中での学びと、小学校における生活科との連続性、生活科教育の果たす役割などを、具体的な活動や体験を通して理解を深める。特に、生活科の9つの内容の理解を深めるために、内容ごとに対応した活動例を演習形式で実践・体験しながら、各内容間の関連や活動の意図について学びを深める。 (オムニバス方式/全15回) (咲間まり子/9回)生活科の教科目標や内容について、学習指導要領に基づき理解を深める。科学的な見方・考え方の基礎を養い、自分と社会とのかかわりに関心を持つという観点から、多様な学習活動とともに表現活動を重視した指導の方法を学ぶ。 (伏見千悦子/8回)直接体験を重視した学習活動を通して自立への基礎を養うという教科目標は、幼小接続の視点からも重要である。講義においては、学習指導要領に基づいた生活科の内容について学生自身が理解を深められるようグループワークや体験的な活動も取り入れながら進める。	オムニバス
		造形美術概論	幼児期の造形教育に携わる保育者、教育者にとって必要とされる絵画・立体造形・色彩と構成に関する基礎知識と表現技術の学習を行い、幼児・児童の造形活動に対して充実した援助と造形教育を行える能力を養成することを目標とする。本講義では特に美術の入り口となる幅広い知識と基礎技術の習得を、視覚、聴覚、触覚を駆使して五感で捉えることを目指す。	
		音楽科概論	小学校音楽科、幼稚園音楽を教える教員に基礎的知識を身に付け、円滑に児童生徒に指導することを狙いとしている。音符や休符テンポやリズム、さらに詩にによる感性や心情を高められるようにするための知識を学ぶ。また、鑑賞教材や曲の楽譜などの教材研究、さらに導入する方法などにも触れる。児童生徒が音楽に触れて、子どもらしい精神の向上を図る。	

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目 初 等 教 育 ・ 幼 児 教 育 コ ー ス 共 通 科 目	体育科概論	これまで小・中・高校での体育は自分の体力や運動能力そして興味関心を高めるためのものとして行ってきた。体育科概論では、「体育とは何か」「子どもは体育で何を学ぶのか」について、子どもの立場から考える・学ぶことをねらいます。そのために、体育科教育の目標・内容について理解する、発育発達課題に即した運動教材の役割がわかる、学習過程の方法について体験することなどを行う。	
	音楽実習Ⅰ	小学校教員採用試験第2次試験の用意、幼稚園教諭においては、採用試験の演奏のための弾き歌いとバイエル程度の演奏実践科目である。鍵盤楽器を使い、両手により、歌いながら演奏する練習を行う。小学校3年生、4年生を重点に教える。さらに児童生徒に聞こえるように、さらに心情が表現できるように演奏練習を行う。	
	音楽実習Ⅱ	前学期科目Ⅰに続き、小学校教員採用試験第2次試験の用意、幼稚園教諭においては、採用試験の演奏のための弾き歌いとバイエル程度の演奏実践科目である。鍵盤楽器を使い、両手により、歌いながら演奏する練習を行う。ここでは小学校5年生、6年生を中心に弾き歌いを練習指導する。発声方法において、座りながら響く声を出すことを習い、児童生徒が歌いたくなるように導けるような、演奏を練習を行う。	
	教育課程論（幼・小）	教育基本法や学校教育法等の法令に従い編成・実施される教育課程の意義を理解し、学校教育における役割の重要性や編成の実際について、小学校や幼稚園で編成されている教育課程の具体例をもとに、講義や演習を通して理解を深める。また、幼稚園や小学校に求められている今日的課題を理解し、教育課程の編成や実施・評価について、主体的に考えることができるよう、小学校学習指導要領解説総則編や幼稚園教育要領の内容理解を深める。	
	教育方法論(情報機器・教材活用を含む)（幼・小）	本講義では、学校での教育内容を効果的に教授する一般的方法について学ぶ。それらの方法は多様であるが、過去の優れた教育実践を分析・考察し、その手法等を学びこれからの教育実践に生かしていくことは、教職を目指すものにとって最も重要なことである。更に、I C T等のこれからの教育技術についても学習する。 (オムニバス方式／全15回) (高田茂／12回) 我が国及び西洋の教育方法の歴史から、教授法の変遷を理解する。さらに、カリキュラム編成の原理と類型を理解し、学習指導での優れた教育実践について学ぶ。その上で、教育評価の今日的役割と方法にも考察する。 (西田勉／3回) 教育の技術およびI C T等のこれからの教育技術について学ぶ。	オムニバス
	教育相談論(カウンセリングを含む)（幼・小）	現在、学校では多くの教員がいじめ、不登校、薬物乱用など児童生徒の生命・健康に関わる問題に直面し、その対応に苦慮している。そのため、教師は、カウンセリングの意義・理論や技法に関する基礎的知識をもち、児童生徒をより深く理解し、適切に接することやカウンセラーや専門機関と円滑に連携することにより対応することが求められている。本講義では、教師としての教育相談の資質を身につけることと保護者との相談の実際や専門家との連携のあり方についての理解を深めることを目的とする。受講者は①教育相談の基本的な理論の理解、②教育相談の基本的なスキルの習得、③問題発生の基本的なメカニズムの理解を目指す。	
	教育実習事前指導（幼・小）	本学作成の「教育実習の手引き」をもとに、幼稚園や小学校で行う教育実習の意義や目的をしっかりと理解させ、教育実習に向けての心構えや教育実習で学ぶべき事項を整理し、教育実習への意識を高める。また、教育実習日誌の書き方や教育実習で学ぶ事柄について理解を深める。さらに、幼稚園実習指導案、小学校学習指導案（国語・算数）の意味理解と、その書き方について理解を深めるため、演習や模擬授業を通して指導技術の習熟を図る。	
	教育実習事後指導（幼・小）	実習中に作成した教育実習日誌をもとに、幼稚園や小学校で行った教育実習の成果や課題について整理する。また、研究授業等の反省会で明確になった自己の教育方法、技術の課題等についても整理する。さらに、今後大学生活で課題となる学修内容等についての見通しをもてるように発表を通して整理する。なお、幼稚園、小学校相互の実習・教育内容の理解を深めるために合同で行う。	集中
	教育実習Ⅰ（幼・小）	幼稚園・小学校の希望校種ごとに、教育現場で教師の立場に立ち教育実習を体験させ、子どもの発想の素晴らしさと教職への理解を深めるとともに、教員としての資質と能力を身につけさせる。事前には、教育実習激励会を開催し、教育実習への心構えや自己目標の設定などを指導。実習中は実習校を原則2回訪問し、実習状況の確認や個別の指導を行う。さらに、事後はそれぞれの実習の振り返りを交流する報告会を実施し、今後の課題を明確にさせる。	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
初等教育・幼児教育コース共通科目 学科専門科目 養護教諭・音楽コース共通科目	教育実習Ⅱ（幼・小）		幼稚園・小学校の希望校種ごとに、教育現場で教師の立場に立ち教育実習を体験させ、子どもの発想の素晴らしさと教職への理解を深めるとともに、教員としての資質と能力を身につけさせる。事前には、教育実習激励会を開催し、教育実習への心構えや自己目標の設定などを指導。実習中は実習校を原則2回訪問し、実習状況の確認や個別の指導を行う。さらに、事後はそれぞれの実習の振り返りを交流する報告会を実施し、今後の課題を明確にさせる。	集中
	教職実践演習（幼・小）		教員に向けての総仕上げの場として、履修カルテをもとにして、個々の課題を整理し、取り組むべき事柄を明確にするとともに個々の課題を解決させ、学習者としての子どもの自発的な行動を促し、目標達成を支援できる指導技術を身につけさせる。主な授業形態として、質疑形式の対談、現実場面を想定したロールプレイングやグループ討議、実技指導などを取り入れる。また、教育委員会や現職教員の協力を得て、より実務的な実践力を身につけさせる。	
	教育課程論		教育基本法や学校教育法等の法令に従い編成・実施される教育課程の意義を理解し、学校教育における役割の重要性や編成の実際について、中学校・高等学校で編成されている教育課程の具体例をもとに、講義や演習を通して理解を深める。また、学校教育に求められている今日の課題を理解し、教育課程の編成や実施・評価について、主体的に考えることができるよう、学習指導要領解説総則編の内容理解を深める。	
	道徳教育論		学校教育の中での道徳教育の位置づけや中学校教育に「道徳の時間」が置かれている意義について学ぶ。道徳の時間は、教育課程を編成する際の要として、学校教育活動全体を通じて行うものとされている。高等学校での道徳教育の中心となるのは、特別活動のホームルーム活動、公民科における「現代社会」と「倫理」ですが、道徳教育は学校教育活動全体を通じて行うことが基本であることを理解します。事例をもとに、学習指導案も作成する。	
	特別活動論		「特別活動」は創意工夫の余地の広い活動領域であることから、特色ある学級や学校づくりに大きな役割を果たしている。望ましい集団生活をとおして展開される特別活動とはどのような教育活動なのか、特別活動の目標、内容、教育的意義について学ぶとともに、学級、ホームルーム活動、生徒会活動および学校行事についての指導計画、実践・評価について理解する。	
	教育方法論(情報機器・教材活用を含む)		本講義では、学校での教育内容を効果的に教授する一般的方法について学ぶ。それらの方法は多様であるが、過去の優れた教育実践を分析・考察し、その手法等を学びこれからの教育実践に生かしていくことは、教職を目指すものにとって最も重要なことである。更に、ICT等のこれからの教育技術についても学習する。 (オムニバス方式／全15回) (高田茂／12回) 我が国及び西洋の教育方法の歴史から、教授法の変遷を理解する。さらに、カリキュラム編成の原理と類型を理解し、学習指導での優れた教育実践について学ぶ。その上で、教育評価の今日的役割と方法にも考察する。 (西田勉／3回) 教育の技術およびICT等のこれからの教育技術について学ぶ。	オムニバス
	生徒指導論(進路指導を含む)		生徒指導は、子どもの人格の健全な育成を図るため、全ての教育活動において行われ、学校教育においては、教科指導と車の両輪としての意義を有する。本講義では、非行や問題行動への対応ばかりではなく、積極的に教科、学級、学年、学校全体の教育活動に携わる望ましい生徒指導及び進路指導を学習し、開発的、発達援助的な生徒指導や進路指導のありかたについての基本の理解を学習目的とする。	
	教育相談論(カウンセリングを含む)		現在、学校ではいじめ、不登校、薬物乱用など児童生徒の生命・健康に関わる問題に直面し、その対応に苦慮している。そのため、教師は、カウンセリングの意義・理論や技法に関する基礎的知識をもち、児童生徒をより深く理解し、適切に接することやカウンセラーや専門機関と円滑に連携することにより対応することが求められている。本講義では、教師としての教育相談の資質を身につけることと保護者との相談の実際や専門家との連携のあり方についての理解を深めることを目的とする。受講者は①教育相談の基本的な理論の理解、②教育相談の基本的なスキルの習得、③問題発生の基本的なメカニズムの理解を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 初等教育コース専門科目	学習コーチング学概論	コーチングの理論は、日本ではまだ新しい概念である。特に学習コーチングの考えは、大学としても本学がはじめて採用したものである。したがって、新しい学問体系を構築する試みとして授業を構成する。まず、コーチングの考えが生まれてきた背景について考察する。次にコーチングの考えの基本的な理念について考察する。そして、コーチングのスキルについて説明する。最後に学習コーチングのスキルに関する基礎理論について、マイクロティーチングの視点から考察する。受講者は、①コーチングの理論及びスキル、②コーチングと学習指導、学級経営、③コーチングに基づく教師像の理解を深める。	
	社会科概論	小学校教育における社会科の役割や性格を理解するとともに、社会科教育の目標と内容について学ぶ。具体的な授業場面を参考にしながら、社会生活についての理解を図るとともに、国土と歴史に対する愛情を育て、平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うための、社会科の指導原理を学ぶ。	
	理科概論	小学校教育における各学年の理科の目標と内容を理解し、自然体験や日常生活との関連を図った学習および自然環境と人間との関わりなどの学習に重点をおいて、児童の視点で自然や様々な現象に対する疑問を抱き、それを科学的に探究することの楽しさを分かち合える指導原理を学び、基本的な観察や実験の技能向上を図る。	
	家庭科概論	現代の家庭生活は、便利に物質的に豊かになったが、児童の生活実感は希薄であり、家族と一緒に取り組む機会も少なくなっている。児童を取りまく環境は、少子高齢化、食生活の乱れ、消費者問題や環境問題、家庭の教育力の低下など多くの課題がみられる。小学校家庭科では、日常的な衣食住の家庭生活において、基礎的な知識・技能を身につけ、自らの力で課題を解決できる、生活をすることに柔軟に対応できる能力を育む。	
	国語科指導法Ⅰ	国語科の授業の在り方について、実際に小学校の授業で使用する教材を使って具体的な指導を行う。国語科の指導法の基礎を学び、最後に学習指導案を作成する。「話すこと・書くこと」「書くこと」「読むこと」の国語科の指導内容の三領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する指導事項」を駆使しながら、学びを展開していく。	
	社会科指導法Ⅰ	学習指導要領に示されている社会科の目標と学習内容を踏まえ、具体的な指導法や教材研究の在り方について学ぶ。とりわけ小学校では、社会生活に対する総合的な理解や公民的な資質の基礎を培うことを目指すので、問題解決的な学習を中核にした指導法が重要になる。児童生徒の興味関心を生かした教材化の在り方についても、学習指導案づくりを通して具体的な指導を展開する。	
	算数科指導法Ⅰ	学習指導要領解説算数編を活用し、算数科の目標を理解し、各学年の内容の取扱や教材研究の仕方についての理解を深める。また、各学年の子どもの発達の特徴を理解し、学年発達にふさわしい指導についての理解を深める。さらに、子どもたちに基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせるため、算数的活動を充実させ、数学的な思考力・判断力・表現力を育て、学ぶ意欲を高める算数科学習の在り方を講義・演習を通して実践的に理解する。	
	理科指導法Ⅰ	理科教育の理念と今日的な課題を理解し、小学校における授業の組み立てや展開の基本を、実際の授業を想定して学ぶ。特に、子どもの側に立った授業づくりを実際にグループを編成し取り組む。グループごとに指導案の発表を行い、互いに評価することを通して授業づくりの視野を広げる。	
	生活科指導法Ⅰ	学習指導要領における生活科の目標と内容等理解し、新しい方向を見据えた生活科の授業のあり方について実際の展開例を基にしながら学んでいく。本講義の到達目標は、(1)生活科の改善の基本方針と具体的事項について理解すること、(2)学習指導を効果的に進めるためのポイントについて説明できるようになること、(3)年間指導計画の作成と手順や単元構成について説明できるようになること、(4)生活科の評価方法を理解することができるようになること、(5)授業展開例を基に検討し学習指導案を作成することができるようになること、である。	
	音楽科指導法Ⅰ	ここでは音楽科の指導法について概論の基礎力をさらにすすめる科目となる。どのような方法で児童生徒に音楽力を高めるかについて学ぶ。リズムの理解、音程の理解、感性における情操などの導入方法について実践的に学ぶ。総合芸術といわれるオペレッタやミュージカルなどの鑑賞や、実践演習も含まれる。	
	図画工作科指導法Ⅰ	小学校における造形教育に携わる教育者として学ぶべき指導原理や理念、指導方法について、指導計画の立案や模擬授業の実践などを通じ学んでいく。また作品の鑑賞や評価、教材の研究等により指導技術の向上を図る。本講義では「図画工作科」の基礎的理念の理解と指導計画の立案と、子どもが楽しく取り組める図画工作の授業という観点から様々な研究に取り組む。	
	家庭科指導法Ⅰ	小学校家庭科の目標及び内容を分析し、指導要領のねらいにそって指導計画をたてる方法について学ぶ。授業づくりでは、児童の実態や地域性などを考慮し、現状と課題をふまえ、児童に付けさせたい能力を明らかにし授業を構想する。児童が基礎的・基本的な知識および技術を習得できるような創意・工夫した発展的な教材研究と児童の特性に応じた適切な指導が工夫できる教育実践力などの資質や能力を育む。	
	体育科指導法Ⅰ	体育の授業を行うには、運動領域の特性に応じた教材が必要です。初歩的な授業研究によって、学習過程や指導技術についての考察をすすめます。そのために、授業研究の方法を理解し、記録・考察をする、保健領域のねらいと指導について考察する、合理的な指導技術について考察する等を行う。	

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 初等教育コース専門科目	国語科指導法Ⅱ	国語科指導法Ⅰを履修済みであることを前提に、模擬授業を中心に授業を展開する。小学生の言語能力の発達を踏まえ、指導の目的を明確にした授業づくり、児童自らが言葉を学んでいける授業づくりを目指す。先行事例に学びながらも、指導者としての自分自身の創意工夫を求めた授業を展開する。併せて、国語科の指導技術も磨く。	
	社会科指導法Ⅱ	社会科指導法Ⅱでは、社会科指導法Ⅰで身に付けた社会科に関する基礎的な指導技術をふまえ、応用的な指導技術について学習する。具体的には、身近な地域調査のあり方、博物館資料の活用のあり方、図書館資料(新聞を含む)の活用のあり方について体験的に学習する。本講義の到達目標は、(1)身近な地域調査のあり方についての理解、(2)博物館資料の活用のあり方についての理解、(3)図書館資料の活用のあり方についての理解、である。	
	算数科指導法Ⅱ	算数科概論、算数科指導法Ⅰで学んだことを活用し、実際に子どもにどう指導するか、模擬授業を通して指導原理を学ぶ。授業づくりの基本であるねらいの立て方や学習活動の組み立て方、算数的活動をどう取り入れるかなどを実践を通して理解するとともに、学習者である子どもの立場に立った学習を進めるために、ワークシートや提示教材の作成の仕方などを学び、「楽しい」「分かる」授業の展開について、コーチングの視野から理解を深める。	
	理科指導法Ⅱ	理科における目標と内容について、教材研究を深めるとともに指導計画や授業展開を構想し、その展開内容を模擬授業を通して検討する。また、理科のコーチングティーチャーを目指して、子どもたちの主体的な学習活動を支援するための基礎を学ぶ。また、授業づくりに必要な実験器具等を作作することができるよう、自作教材を紹介する。	
	生活科指導法Ⅱ	生活科の目標、内容に即した実践事例をもとに、計画、実践、評価、改善の一連の流れを学ぶとともに、学習材の検討や学習指導案の作成を通して、実践力を高めていく。また、生活科から他教科への接続・発展についても学ぶ。本講義の到達目標は、(1)生活科の教科目標と内容の理解、(2)生活科の評価方法についての理解、(3)学習指導を効果的に進めるためのポイントについて説明できること、(4)学習展開例を検討して学習指導案を作成できること、(5)様々な学習活動に必要な知識・技能を身に付けること、である。	
	音楽科指導法Ⅱ	音楽指導法として、指導計画と予想される実践方法などを文章化する練習をします。音楽は音によるもので、文字では表現することが難しいため、指導案作成において、表現が困難であると言えます。しかし、学校現場では指導案や研究会ではレジュメを作成し、研修などを進めなくてはなりません。それらを模擬授業などを踏まえ研究していきます。	
	図画工作科指導法Ⅱ	小学校における造形教育に携わる教育者として学ぶべき指導原理や理念、指導方法について、指導計画の立案や模擬授業の実践などを通じ学んでいく。また作品の鑑賞や評価、教材の研究等により指導技術のさらなる向上を図る。本講義では「図画工作指導法Ⅰ」で学んだ知識や経験を基礎としてさらに具体的かつ詳細に個別項目を研究し、教育現場での実践を念頭に置いた指導法を学んでいく。	
	家庭科指導法Ⅱ	小学校家庭科教育の意義をおさえ、指導内容・方法について模擬授業等を通して学び、指導力を身に付けます。具体的には、小学校家庭科の指導内容の衣・食・住・家族の生活に関わる題材を取り上げ、実践的・体験的な学習指導方法を現場の先生の実践から学んだり、自ら模擬授業を実践して指導力を磨く。	
	体育科指導法Ⅱ	体育科教育として授業をすすめるための、運動教材の特性と学習内容の構造を理解し、授業研究をとおして合理的な指導技術についての理解をめざす。そのために、グループワークによる指導案の作成・検討、模擬授業をとおして発表・検討・レポート作成をすすめる、授業分析、授業評価の方法を理解する等を行う。	
	道徳教育論 (小)	学校教育の中での道徳教育の位置づけや小学校教育に「道徳の時間」が置かれている意義について学ぶ。道徳の時間は、教育課程を編成する際の要として、学校教育活動全体を通じて行うものとされている。小学校における道徳教育は、人間としてよりよく生きるための基礎・基本となる道徳性を育成するところに大きな意義があることを学ぶ。事例をもとに、学習指導案も作成する。	
	特別活動論 (小)	今日、各学校には、特色ある教育活動や開かれた学校づくりが求められている。「特別活動」は創意工夫の余地の広い活動領域であることから、特色ある学級や学校づくりに大きな役割を果たしている。この講義では、望ましい集団活動を通して展開される特別活動とはどのような教育活動なのか、特別活動の目標、内容、教育的意義について学ぶとともに、学級、ホームルーム活動、生徒会活動及び学校行事についての指導計画、実践・評価の一連の流れを学ぶ。	
	生徒指導論(進路指導を含む) (小)	生徒指導は、子どもの人格の健全な育成を図るため、全ての教育活動において行われ、学校教育においては、教科指導と車の両輪としての意義を有する。本講義では、非行や問題行動への対応ばかりではなく、積極的に教科、学級、学年、学校全体の教育活動に携わる望ましい生徒指導及び進路指導を学習する。小学校、特別支援学校、及び幼稚園・保育園の教員として、開発的、発達援助的な生徒指導や進路指導のありかたについての基本の理解を学習目的とする。	
	小学校英語	小学校の外国語活動の指導要領にある「外国語活動」の目的と内容を理解し、教材・指導法及び指導者の資質等についての基本的な理解を深めることをねらいとしている。また「英語ノート」やNHKの「えいごであそぼ」などの英語教材を用いて英語指導の実践について体験する。	
	特別支援学校論Ⅰ	特別支援教育の理解を深めるために、実際の教育現場を参観し教育活動の理解を深める。各種障害の特別支援学校を訪問し、学校経営の講話及び授業を参観することで、障害の理解や教育内容、指導方法についての理解を図る。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	初等教育コース専門科目		
	特別支援学校論Ⅱ	特別支援教育の理解を深めるために、教育現場での諸課題について理解を深める。そのため各特殊教育に関する学会への参加や各障害ごとの研究大会に参加し、障害の理解や最新の教育内容、指導方法などについての理解を図る。	
	特別支援実践論Ⅰ	特別支援教育に関わる「答申」「通知」「報告」などから、諸課題の把握と福祉施策などとの連携の在り方について学ぶ。特に「障害者の権利に関する条約」障害者の「障害者基本法」「障害者自立支援法」「発達障害者支援法」などについて学び、障害者に関する国や自治体の取り組みの諸課題の理解を図る。	
	特別支援実践論Ⅱ	障害のある児童生徒の理解を図るためのアセスメントについて学ぶ。特に「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法」「津守式乳幼児精神発達検査」「SM社会生活能力検査」「WISC-Ⅳ知能検査」「田中ビネー知能検査Ⅴ」などのスクーリングに用いる検査や知能検査等の理解と習熟に努める。	
	特別支援実践論Ⅲ	特別支援教育の理解を深めるために「学習指導要領」「教育課程の編成」理解に努める。特に「自立活動」の具体的な展開を、盲学校、聾学校に視点を当て理解を図る。さらに「教育課程の編成」に当たっての留意事項等について学ぶ。	
	幼児教育コース専門科目		
	保育原理	乳幼児期は人間形成の基礎を培う上で重要な時期であり、保育に携わる者には人間性と保育の専門性が求められている。また、今日の社会環境、育児環境の変化から保育ニーズへの多様化が進み、保育には質の高い養護と教育の機能を果たすことへの期待が高まっている。授業では児童福祉、家庭福祉について考察し、個々の子どもが現在をより良く生き、望ましい未来を創り出す力の基礎を培うことができるよう、保育の基本となる保育原理を学ぶ。	
	保育内容総論	保育所(園)における保育の目標は、養護と教育が一体となっており、子どもが今をよく生き、健全な成長を遂げられるように援助することである。この授業では保育内容の基礎的理念と体系および5領域について学習し、保育全般の理解を深める。また、乳幼児期の育ちに合わせた遊びや活動スタイルを通して、この時期の子どもの発達特性を理解し、保育者にどのような援助が求められているかを学習する。	
	保育内容指導論	乳幼児の発達を踏まえ、5領域のねらい及び内容の関連について学び、具体的な保育の指導法を理解する。保育者の役割についての理解を深め、指導計画及び保育指導案を作成する力を身につける。さらに事例や実技を通し、理論と実践について結びつける。具体的には指導計画作成後に模擬授業による実技演習を行い、自己・他者評価から実践力を高める。様々な子どもに対応する保育実践と保育者の姿勢について考える。	
	保育内容(健康)	保育において焦点となる5領域の中で、すべての基本である「健康」をいろいろな方面から認識し、子どもを捉える時、発達・成長を援助する時、保護者へ伝えていく時など保育者として実践的な知識と技術の基礎を学ぶ。到達目標として、①仕事の内容がわかる②保育者自身の「健康」に対する理解と心がまえを知る。	
	保育内容(人間関係)	近年、子どものコミュニケーション能力や規範意識の低下などの問題が指摘され、人と豊かな関わりを提供する乳幼児教育の重要性が高まっている。乳幼児期は、人間形成の土台が作られる時期であり、長時間を共に過ごす保育者の役割は大きい。一方で、子育てに悩みを抱える保護者が増えていることから、保育者には適切な相談援助が求められている。倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断力の有無が問われる所以であろう。これらをふまえ、保育所保育指針における領域「人間関係」のねらいと内容について、子どもの対人関係の発達、社会性の発達をふまえながら理解を図り、発達の援助者としての保育者の様々な役割について、事例を通して考察していく。	
	保育内容(環境)	自然の中でのさまざまな営みや季節の移り変わりに触れ、身近な環境の中で、子どもたちが生き生きと過ごし成長していくために保育者は何ができるのかを、学生とともに考えていく。また、いのちの尊さや大切さを感じられるような教材の発見や、遊びの中での人とのかかわりについての学び、好奇心や探究心を育むための取り組みを実践的に行う。 (オムニバス方式／全15回) (西出勉／13回) 領域「環境」について幼稚園指導要領に基づき理解を学んでいく。講義においてはグループディスカッションや実地研修を多く取り入れ経験的に学べるよう進め、子どもにとって必要な環境とは何かを考察する。 (中山雅茂／2回) 領域「環境」について幼稚園指導要領に基づき理解を学んでいく。科学的な視点で環境を捉え、理論や知識を基礎としながらも子どもにあるべき環境について実験やフィールドワークも取り入れながら学んでいく。	オムニバス
	保育内容(言葉)	言葉の機能や役割、子どもの言葉の発達など、言葉に関する基礎的な知識を身につけるとともに、保育内容の領域「言葉」のねらいと内容や、外国の言語教育についても学ぶ。また、保育・教育活動の実際を知るために、ペープサートやパネルシアターの制作と発表を行う。保育・教育の実践の中で幼児の言葉の発達を促すような働きかけについて考え、理解を深めることを到達目標とする。	
	保育内容(表現)	乳幼児の表現活動はどのように行われるのか、豊かな感性や表現力、創造力はどのように育まれるのか、表現に関する基礎的な知識を身につけるとともに、保育内容の領域「表現」のねらいと内容について学ぶ。保育・教育活動の実際を知るために、うた絵本の製作と発表に加え、教多くの音楽遊びを体験する。保育・教育の実践の中で幼児の表現を促すような働きかけについて考え、理解を深めることを到達目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	幼 児 教 育 コ ー ス 専 門 科 目	こども理解	近年“保育臨床”の視点を大切にしたいこども理解が必要とされている。もともと保育には臨床が含まれているが、あえて「保育臨床」とするのは、子どもの問題（もつれ）を、子ども・先生・環境という作用の全体を丁寧にほぐし、紡ぎなおそうとする姿勢を強く求めているものです。この授業では、その基本的な知識や方法を学ぶ内容とする。加えて、外部とのカンファレンス的なネットワークを構築する必要性と具体例を提示したい。
		児童家庭福祉	児童家庭福祉の意義として理念と概念、歴史的変遷について理解する。児童の人権については子どもたちをとりまく環境や諸問題をとらえ問題を分析し、児童家庭福祉の制度や施策の現状を整理し、その課題と展望について理解する。また、諸外国の動向や相談援助技術にも目を向け、子どもの最善の利益を保証する社会をつくるため、児童家庭福祉のこれからをさまざまな事例を交え考察する。
		社会福祉	現代社会における社会福祉の歴史的変遷をとおり、社会福祉が果たしている役割を学ぶとともに社会福祉の基盤となる価値と理念についての理解を深める。現行の社会福祉の法制度と実施体制についての把握を行い、特に児童福祉の理念と家庭支援も含めた児童の健全育成の取組と児童の人権についての理解を深める。福祉サービスの提供組織の多様化と市場におけるサービス調達についての実態を把握し、利用者保護に関わる仕組みについて理解する。現代社会の特徴を把握し、今後の社会福祉のあり方について学ぶ。
		相談援助	本演習では、保育における相談援助の概要について理解を深め、その具体的展開について事例研究をとおして技術の習得を目指す。相談援助の方法と技術、ソーシャルワークの応用と事例分析、関係機関、専門職との連携などについての理解を深める。さらに、虐待の予防と対応策、障害のある子どもとその保護者への支援などを事例研究をもとに考察し、理解を深める。
		社会的養護	・現代社会における社会的養護の意義と歴史的変遷について理解する。 ・社会的養護と児童福祉の関連性及び児童の権利擁護について理解する。 ・社会的養護の制度や実施体系等について理解する。 ・社会的養護における児童の人権擁護及び自立支援等について理解する。 ・社会的養護の現状と課題について理解する。
		保育者論	保育者の役割と倫理や保育士の資格・要件・責務等の制度的位置づけについて理解するとともに、保育士の資質や能力及び保育過程の展開と自己評価等の専門性について考察し、理解を深めていく。更に、保護者支援や保護者及び地域社会との協働、専門職間及び専門機関及び家庭的保育者等との連携について理解していく。また、保育者の専門性の発達や生涯発達とキャリア形成についても理解していく。
		保育の心理学Ⅰ	胎児期から老年期にいたるまでの、人間の一生にわたる成長・発達を「生涯発達」という視点から理解する。また、人間の一生において、乳幼児期とはいったいどのような時期であるのか、子どもの心身の成長・発達の諸側面（身体機能・運動機能、知覚・認知、言語、社会性、感情など）の特徴について理解を深める。その際、子どもの発達が人や環境との相互的にかかわりを通して成し遂げられていくことを強調したい。
		保育の心理学Ⅱ	保育実践において、子どもを取り囲む環境のあり方が重要であることは言うまでもない。いかにして、子どもの心身の成長・発達にとってふさわしい人的環境や物理的環境を構成するのかという点に、保育者の力量が問われると言っても過言ではないだろう。本講義では、保育現場での生活や遊びを通した子ども自身の経験が、または子ども同士、あるいは子どもと保育者との関係性の形成が、子どもの心身の成長・発達にどのような影響を及ぼすのか学習する。
		こどもの保健Ⅰa	こどもの心身の健康を保持することは、保育の原点であると考えられている。そのためには、こどもの心身の特徴について理解することは不可欠である。本講義は、保育士養成のための必修科目として、こどもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解し、こどもの身体発育や生理機能及び運動機能、さらには精神機能の発達と精神保健について理解することを目的としている。
		こどもの保健Ⅰb	現代社会において子どもを取り巻く環境はめまぐるしく変化している。個々のライフスタイルの多様化とともに、こどもの健康問題は単なる医療面の支援だけでなく、文化・社会面での支援も必要となっている。本講義はめまぐるしく変化する環境における保育士養成のための必修科目となっている。子どもを取り囲む環境及び衛生管理並びに安全管理、疾病とその予防、健康及び安全の実施体制について理解することを目的としている。
		こどもの保健Ⅱ	乳幼児の健康や安全に関する知識を習得し、疾病や事故の予防を考えた保育ができることを目標としている。子どもの心身の発育・発達を促す保健活動や環境を考え、子どもの疾病とその予防及び適切な対応について学ぶ。具体的には救急時の対応や事故防止、安全管理について、健康増進や心の健康問題への地域保健活動について理解し演習を通して実践を学ぶ。また、保育職として保育における保健活動の計画及び評価について学ぶ。
		こどもの食と栄養	こどもの健康な食生活のあり方は、生涯にわたるすべての活動の基盤となり、順調な発育・発達を促すものである。近年、こどもの食の実態は栄養摂取のアンバランスにとどまらず、孤食や欠食などの社会とのかかわりの観点から多くの問題が指摘されている。こどもの豊富な食事体験は情緒の安定と発達段階に合った食生活を確立することから、こどもの栄養の基本的理論を体系的に理解するとともに、その知識を現場で実践化できるように学ぶ。
		家庭支援論	家庭、地域などを視野に入れた支援の在り方や支援体制について理解するため、家庭とは何か、子育てにおける家庭の機能にはどのようなものがあるのか、現在の家庭はどのような状況にあるのか、家庭支援が必要になっている背景を学んだ上で、保育士等が行う家庭支援の原理や子育て支援策について学習し、具体的な家庭支援の方法と技術を習得する。

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	幼児教育コース専門科目	保育課程論	保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価について理解する。保育所保育指針や幼稚園教育要領に示された子どもの発達理解や家庭・地域環境にも着目した保育の計画について考察する。具体的には保育課程に基づいた多様なニーズにおける長期・短期保育指導計画の作成方法を学び、作成における工夫や留意点、展開における配慮や評価について学ぶ。
		乳児保育	乳児期の保育は、人生の他の時期と比較しても、諸側面において格段の配慮が求められる時期である。本講義では、乳児保育の理念とその歴史の変遷や、その現状と課題について理解した上で、3歳未満の子どもの成長・発達を支援するために、乳児期における心身の成長・発達の特徴と、生活や遊びの諸相について学ぶ。さらに、現実の子どもの姿に基づいた保育計画の作成、環境の構成、観察・記録の方法など、具体的な保育実践力を身につけることも目的とする。
		障害児保育	障害乳幼児の早期発見・早期療育について、乳幼児の発達検査等を活用して、運動、生活、対人関係、遊び、言語活動などの発達診断と発達予測を行い、生育歴や養育環境等を考慮した個々のよりよい指導実践に役立つ知識を学ぶ。また、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・虚弱、自閉症・情緒障害、言語障害、発達障害の幼児などの指導事例から、障害児保育の指導の実際、指導上の配慮と工夫を中心に理解を深める。
		社会的養護内容	・社会的養護における児童の権利擁護や保育士等の倫理について具体的に学ぶ。 ・施設養護及び他の社会的養護の実際について学ぶ。 ・個々の児童に応じた支援計画を作成し日常生活の支援、治療的支援、自立支援等の内容について具体的に学ぶ。 ・社会的養護にかかわるソーシャルワークの方法と技術について理解する。 ・社会的養護を通して、家庭支援、児童家庭福祉、地域福祉について理解や認識を深める
		保育相談支援	保護者に対する保育相談支援の意義や保育の特性と保育士の専門性を生かした支援について理解するとともに、保育相談支援の基本である、子どもの最善の利益と福祉の重視、保護者の養育力の向上に資する支援、信頼関係を基本とした受容的なかわり、自己決定力、秘密保持の尊重等について理解を深める。更に保育相談支援の実際について学ぶとともに、児童福祉施設における保育相談支援についても理解を深めていく。
		こどもの表現あそび	前学期に履修した保育内容（表現）の応用・発展として位置づけられている。幼児の表現のプロセスを理解し、さまざまな表現あそびや保育教材を活用して、保育を展開できるよう実践力を身につける。身体（からだ）による表現、音楽による表現、造形による表現を大きな柱とし、数多くの遊びを体験しながら幼児の表現遊びについて理解を深めることを到達目標とする。
		こどもの体育あそび	子どもの心身の成長はとても著しく、成長期にふさわしい「楽しい遊び」の中で多くのことを学び、身につけていく。それは身体能力が向上するだけでなく、豊かな感性や社会性・こころの発達にもとても重要である。運動あそび、体育あそびに含まれる保育的要素を理解し、ねらいに応じた遊びを工夫・指導できる力を養う。
		こどもの言葉あそび	前学期に履修した保育内容（言葉）の応用・発展として位置づけられている。幼児の言語発達のみならず理解し、さまざまな児童文化財や保育教材を活用して、保育を展開できるよう実践力を身につける。幼児の言語発達過程についての学びを深め、児童文化財（素話、詩、言葉遊び、絵本、紙芝居、ペープサート、劇遊び）を用いた保育の実際を体験しながら幼児の言葉遊びについて理解を深めることを到達目標とする。
		保育内容指導(健康)	乳幼児期における、5領域の中ですべてに関係する健康領域を指導、実践していくにあたり、援助、指導方法等を様々な角度から学んでいく。到達目標① 保育における指導の仕方を色々考えることができる。② 健康を通して乳幼児保育を幅広く考える。
		保育内容指導(人間関係)	幼児期の身体と精神の特徴をふまえ保育内容人間関係ねらいと内容を理解していくために理論と実技を並行して行う。また、幼稚園に行き、実際に子供を観察しふれ合う事で幼児期に育まれる人間関係の為の環境や教師の役割について学び、理解を深めていく。
		保育内容指導(環境)	子どもを取り巻く環境について、自然と社会の二つの視点を軸に学ぶ。「保育内容(環境)」の内容を踏まえ、子どもの心身の成長発達のための望ましい保育環境についてさらに深く考察し、保育の現場での環境づくりを、指導者として実践できる能力を養う。
		保育内容指導(言葉)	前学年で履修した幼児期の言葉あそびの応用・発展として位置づけられている。さまざまな児童文化財や保育教材を活用して、保育を展開できるよう実践力を身につけるとともに、幼児の言語発達を促すための指導や援助の方法を学ぶ。絵本の読み聞かせや紙芝居の発表、ペープサート・パネルシアター・人形劇の制作と発表を通して、指導のしかたや配慮事項について考察する。
		保育内容指導(表現)	前学年で履修した幼児期の表現あそびの応用・発展として位置づけられている。幼児や障がいのある子どもの表現のプロセスを理解し、さまざまな表現遊びや保育教材を活用して、保育を展開できるよう実践力を身につけるとともに、ダルクローズ、オルフ、コダーイなどの音楽メソッドの中でもダルクローズの教育法を中心にした指導法について学ぶ。身体を楽器と捉え、多様な表現を体験しながら豊かな表現を育む指導について考察する。

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	幼 児 教 育 コー ス 専 門 科 目	保育実習Ⅰ	保育所と児童福祉施設等の機能、役割について、現場での実践を通して具体的に理解する。子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深めるとともに、保育士の業務内容や職業倫理、子どもへの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。子どもの発達過程や個々の状況に基づいた保育の計画、観察、記録、自己評価等について、具体的な体験を通して理解することを到達目標とする。	集中
		保育実習Ⅱ	保育所の機能、役割について、現場での具体的な実践を通して学ぶ。既習科目や保育実習Ⅰでの学びを踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。保育士の業務内容や職業倫理、子どもとのかかわりや援助の方法を学ぶ。子どもの発達過程や個々の状況に基づいた保育の計画、観察、記録、自己評価を行い、自己の課題を明確にすることを到達目標とする。	集中
		保育実習Ⅲ	児童福祉施設（保育所以外）や社会福祉施設の機能、役割について、現場での実践を通して学ぶ。既習科目や保育実習Ⅰでの学びを踏まえ、家庭と地域の生活実態に触れ、児童福祉及び社会的養護に対する理解を深めるとともに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を養う。施設保育士の業務内容や職業倫理、子どもとのかかわりや援助の方法を学ぶ。また、実践を通して保育士としての自己の課題を明確化する。	集中
		保育実習指導Ⅰ	保育実習の意義、目的、内容を理解し、実習生として必要な知識・技術習得する。児童福祉施設及び社会福祉施設の機能や役割について学び、子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。保育士の役割や専門性、職業倫理、職務に対する理解を深め、子どもの発達過程や個々の状況に基づいた保育の計画、観察、記録、自己評価の方法を学ぶ。また、実習後においては実習の振り返りを行い、それぞれの自己課題や目標を明確にし、他教科における学びとの統合を図る。	
		保育実習指導Ⅱ	保育実習の目的、内容、方法を理解し、保育について総合的に学ぶ。保育所の機能や役割を学び、保育士の役割や専門性、職業倫理に対する理解を深める。子どもの人権と最善の利益を考慮し、保育の計画、観察、記録、自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。また、実習後においては実習の振り返りを行い、それぞれの自己課題や目標を明確にし、他教科における学びとの統合を図る。	
		保育実習指導Ⅲ	保育実習の目的、内容、方法を理解し、保育について総合的に学ぶ。児童福祉施設（保育所以外）及び社会福祉施設の機能や役割を学び、保育士の役割や専門性、職業倫理に対する理解を深める。子どもの人権と最善の利益を考慮し、保育の計画、観察、記録、自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。また、実習後においては実習の振り返りを行い、それぞれの自己課題や目標を明確にし、他教科における学びとの統合を図る。	
		保育実践演習	保育に関する科目横断的な学習能力を習得する。保育に関する今日の課題解決の方策について、既習の講義や演習で学んだ知識や保育実習での経験を基に検討し、保育士として必要な知識、技能及び指導力の修得を確認するとともに更なる資質向上を図る。課題追求の計画を立て、現状把握や調査、分析、考察、解決の方策を検討する。課題解決のための対応、判断方法について学び、プレゼンテーションやグループ討論を行う。	
	養 護 教 諭 コー ス 専 門 科 目	衛生学	現代生活において、環境衛生は健康の保持・増進において重要な項目の一つとなっている。本講義では、現在様々な分野で問題となっている環境衛生に関しての基本的な知識を学び、環境衛生の意義について理解を深め、現代的課題とその解決方法を学ぶことを目的としている。特に、学校環境衛生に関する項目については、学校環境衛生の基準を参照しながら学ぶ。	
		公衆衛生学	生活環境は人々の健康の保持・増進に多大な影響を与えている。本講義では、健康の保持・増進に必要な公衆衛生学の意義と基本的知識について学ぶとともに、集団と個人の健康の関連について学ぶことを目的としている。また、それらから、生涯を通した健康づくりについて考察する。特に、各種統計資料から現代の保健・健康課題を考え、その解決方法を考察する。	
		学校保健	学校保健の基礎的理解を目指すとともに、学校保健安全法に基づく保健管理および保健教育両面にわたる専門的事項を学ぶ。さらに、組織活動として展開するための知識・技術について学ぶ。	
		養護実践学Ⅰ	養護教諭の専門性と専門職としての実践について学ぶ。どのような根拠に基づいて養護活動や養護実践が展開されるのか、養護実践の過程とはどのようなものを学ぶ。	
		養護実践学Ⅱ	養護実践学Ⅰで学んだことを基盤に、養護活動について理論と実践を通してまなぶ。養護実践の具体的な活動内容や方法を検討しながら学ぶ。	
		養護活動実習Ⅰ	これまでの学習を統合し、養護教諭の専門性をさらに発展させて、養護教諭としての実践力向上のための科目である。仮想学校を設定し、学校教育における養護教諭の専門性を生かした教育実践の実習を行う。	
		養護活動実習Ⅱ	養護活動実習Ⅰで設けた仮想学校において、養護教諭の専門性および独自性を生かした教育実践の実習を行う。仮想学校での児童への対応、模擬職員会議での提案、学校保健委員会の開催などを実習する。	

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	養護実践学演習	養護実践に関し、法的根拠や効果に基づいた具体的実践内容および方法を学ぶ。共通理解を得られるような養護実践の資料の作成・提示・発表・検討を行う。	
	健康相談活動の理論及び方法	養護教諭の職務の特質と保健室の機能を生かした健康相談活動の理論および方法について学ぶ。健康相談活動の過程を理解し、子どもへの対応および関係者との連携のために必要な知識・技術を学ぶ。	
	健康相談活動演習	健康相談活動の理論および方法での知識・技術を生かし、演習を通して子どもへの支援方法を学ぶ。演習では養護教諭役・子ども役等をロールプレイングを通して学ぶ。子どものさまざまな訴えに対し、心的要因を念頭において対応できるようにする。	
	栄養学(食品学を含む)	量・質ともに栄養の過不足なく、しかもおいしく食生活を営めるよう、食物の持つ栄養学的特徴や、体内における働きを知り、毎日の活動に合った食物摂取が生かせるような知識をもつことを目的とする。	
	解剖生理学	科学と医学の進歩により、たとえばヒトの遺伝情報の全貌が明らかにされつつある現代において、人間の体の仕組みを理解することは極めて重要である。現代医学の進歩を踏まえ、教職として従事するために、人間の構造と生理機能を理解し生命現象のメカニズムを学ぶ。	
	薬理概論	養護教諭は、医薬品に対する生体側の応答を治療効果に限らず、その延長線上にある有害作用などに関する知識が必要である。また、保健室で使用する医薬品の働きに対し、副作用等の予知・発見を行い、児童生徒を十分ケアできる知識を身につけることを目的とする。	
	微生物学(免疫学を含む)	学校保健に関わるものにとつて、世界規模の感染症から日常に見られる感染症まで多岐にわたる感染症の知識と対策が求められる。特に微生物学は感染防御に欠かせない知識である。この基本となる知識と免疫防御に重要な役割を果たす免疫反応について学ぶ。	
	精神保健	精神保健とは心の健康のことをいう。精神保健に関する歴史的経緯とその意義を概観しつつ、ライフサイクルや具体的生活の場面を通じて精神保健全般の役割について学ぶ。精神障害の概略や基礎知識等に加え、保健センターなどの機関や地域社会における活動についても学ぶ。	
	看護学概論	現代社会の中で人が生活する中に健康はどのようにとらえられており、人間の生活の中でどのように意識され行動化されているのかを自らの生活や健康行動を振り返りながら理解する。その上で養護活動を行なう視点から、必要な健康観を育成するとともに、ライフサイクルの視点から発達と健康にかかわる生活、環境、対策について学ぶ。さらに、健康にかかわる保健・医療・福祉の連携やその他の社会的資源の活用について学ぶ。	
	看護技術演習(救急処置を含む)Ⅰ	養護実践学の基礎科目として、看護援助の科学的根拠を理解し具体的な技術を学ぶ。対象の情報から援助の必要をアセスメントし、日常生活の援助を提供することを目標とする。看護学臨床実習における病院実習の準備としても位置付けられる。	
	看護技術演習(救急処置を含む)Ⅱ	養護実践学の基礎科目として、看護技術演習Ⅰを基礎とした看護援助の科学的根拠を理解し具体的な技術を学ぶ。対象の情報から援助の必要をアセスメントし、日常生活の援助を提供することを目標とする。看護学臨床実習における病院実習の準備としても位置付けられる。	
	看護学各論	子どもの健康は社会の問題点が表面化したものとも言われている。健康上の問題は、心身の発育・発達を脅かすものであることから現代の疾患の現状や問題について理解を深める。この科目ではこれまでに学んでいる養護実践の対象である子どもの健康なからだの成り立ちやしぐみを基礎知識にし、疾患の予防の視点から病因、症状、治療などの現状を理解し、子どもの発育・発達への影響や日常生活行動への配慮とその看護について学ぶ。	
	看護学臨床実習	養護実践学の基礎として、疾病や障害発生時の初期対応や、障害のある児童生徒の臨床での看護実践場面を見学し、学内での学びをより確実なものとすると共に、関連他職種との機能や役割を理解し、養護教諭として学校保健活動遂行時連携の仕方を学習する機会とする。	集中
	養護実習事前指導	養護実習を意義あるものとするため教育実習の意義や心構えや観察実習、参加実習、授業実習の要点、及び学習指導案作成の基礎・基本などを学習する。特に、実習校の受入れに感謝の気持ちを深め実習生としての資質・態度や心得を確実に身に付けることをねらいとしている。	
	養護実習事後指導	実習中に作成した養護実習日誌をもとに、養護実習の成果や課題について整理する。また、集団保健指導等の反省会で明確になった自己の指導方法や指導技術の課題等、救急処置や健康診断、保健室対応に関する知識技術についても整理する。さらに、今後大学生活で課題となる学修内容等についての見通しをもてるように発表を通して整理する。	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	養護教諭コース専門科目	養護実習	学校教育において養護教諭が果たすべき役割について実習校での実習を通して、体験的に学ぶ。特に、養護教諭の保健室経営等、養護実践について体験を通し学習し、養護教諭としての資質能力の向上および実践力向上を目指す。実習校の校長先生はじめ指導教員、教職員の指導のもとに、教員として必要なさまざまな事項について具体的に学ぶ。その中から、教師としての使命感・責任感、かつ実践的指導力、また学校・教師の問題・課題を見つめ、教師を目指す資質・能力を高めることを目的とする。	集中
		教職実践演習(養護教諭)	教員に向けての総仕上げの場として、履修カルテをもとにして、個々の課題を整理し、取り組むべき事柄を明確にするとともに、大学4年間での学習知および経験知と、養護実習等で培われた実践力や指導力の教育実践知とのさらなる統合を図り、使命感や責任感に裏打ちされた実践的指導力を有する教員としての資質向上を図る。学校保健の中核的役割としての実践力をつけるため、授業の形態は、ロールプレイング(役扮演技)やグループ討論、ディベートを展開する。	
	音楽コース専門科目	ソルフェージュ	ソルフェージュは音楽科目すべての基本となる譜読み作業である。「新曲」とも呼ばれるとおり、新しい旋律をスムーズに読み込む練習である。音を歌うことで、それぞれの与えられた楽曲を演奏できるようになるための基礎力をここで養う。どのような曲なのか、わからない状況で歌う実践は、冒険的で楽しいことを指導し、音楽力へのステップアップの科目である。	
		楽典	音楽の伝達手段である「楽譜」を読み書きするために必要な基礎知識や理論を身につける。楽譜を読むのが苦手な人は最初の一步から、音楽が得意な人は初心に立ち戻り、感情を伝えるためのデジタルな記号「楽譜」の約束事を理解し、音楽の3要素や音楽用語の理解を深める。また音符を通じて音の高さやリズムなどを的確に伝えるために楽譜を書けるように学ぶ。	
		音楽概論	人間にとって感情表現手段の一つである「音楽」はどのように生まれ、どのように表現され、伝わるのか・・・。「音楽」の素材である「音」そのものや、音の組合せによって生まれる「旋律」「和声」「リズム」といった音楽の構成要素、さらには表現手段としての声や楽器の種類、構造と発音原理など、歴史的変遷を踏まえながら様々な角度から「音楽」を概観する。	
		音楽鑑賞法	音楽は記憶の芸術である。音楽の記憶は日常生活の場面と結びつく視覚につながることで、音楽によって様々なシーンを連想させることもある。劇音楽やバレエ音楽は、まさにその効果を期待したものである。すべての音楽が直接情景を思い浮かべられる事を意図したものではないが、何らかの現象や情景を漠然と思い描かせるものである。名曲を鑑賞するとき、より深い理解と楽しみ方を得るために必要な知識と手段を作品の解説や作品の生まれた背景、演奏楽器の興味深い話を交えながら研究する。	
		音楽史	西洋音楽史の10講義は、現代の音楽にいたる道のりをバロック、古典派、ロマン派、近代等の時代を認識し、各時代の音楽的特徴と音楽が生まれた背景を踏まえてその時代の作曲家の作品にふれながら、その人となりに関するエピソードを交えて進めていく。さらに日本音楽史5講義においては、伝統音楽及びアジア民族の音楽を鑑賞しながら雅楽、三味線、尺八、箏などの音楽を中心に歌舞伎、能狂言、浄瑠璃などの舞台芸術を検証し、日本独自の音楽の歴史を認識する。 (オムニバス方式/全15回) (菅原/6回) 西洋音楽の起源、ルネッサンス～バロック、20世紀の音楽 (鈴木/4回) ピアノ音楽を中心に古典派、ロマン派～印象派、日本の音楽 (岡元/2回) 歌曲を中心にロマン派と日本の音楽 (千葉/3回) 管弦楽を中心にロマン派と日本の現代音楽、楽器の歴史	オムニバス
		和声学	音楽の三要素の一つ「和声」の基礎知識を身につける。音楽の調性(12種の音をそれぞれ主音とする長調と短調)を確認しながら、基本となる主要三和音、その他いくつかの和音について、それぞれの基本形や転回形を把握することで、初歩的な和音の構造を学ぶ。また簡単な旋律に和声法にのっとり基本的な和音をつけられるようになることで、楽曲構造の理解をさらに深める。	
		作曲法	音楽の理論面について学習することは、演奏や指導に根拠を与えるためにも不可欠であることを理解し、曲づくりのための基礎的な理論を学ぶ。調性や音階など初歩知識をふまえた上で、音楽構成の要である和声法をもとに和音の性質や機能、効果について、譜例の分析を交えて学習する。また、簡単なメロディに対する伴奏付けや和声進行から曲づくりなどの演習によって、音楽現場での実践につながる即応力を養うことを目的とする。	
		指揮法	合唱や合奏にとって欠かせない「指揮」について、歴史的背景を踏まえながら指揮者と指導者、支援者の違いについて学ぶ。「指揮」ができるための要素(スコアを読む、リズムを打つ、演奏者の気持ちをつかむなど)を一つ一つ確認しながら「指揮の意味」を理解し、具体的な「指揮の技術」についても実技を取り入れ指揮の基本動作や各拍子の振り分け方を学ぶ。ビデオ撮影し自分を見ることにより、客観的な表現ができるよう挑戦する。	
		合唱 I	合唱の発祥について歴史的考察に加え、精神的な協調性、同調性などを学ぶ。また、和声の充実、曲による心情など学ぶ。ソルフェージュ力、和声学を声により身につける科目でもある。また、個々が自ら合唱する喜びを見出し、音楽力を高め、楽しむことができる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	音 楽 コ ー ス 専 門 科 目	合唱Ⅱ	ここでは合唱Ⅰに続き、現代までの合唱の発展について、学ぶ。大合唱曲の醍醐味なども学ぶ。その時代の背景、作曲者、詩人の意図する精神など、また歌詞における原語の意味について学ぶ。これらのことにより、歴史的な曲目を通じて、人間の生きる力を模索することができる。また社会的情勢・変化も曲目に現れていることが多いため、さらに生きることについても、声を基に演奏体験を行う。
		合奏Ⅰ	吹奏楽形態による「合奏」である。チューニングや音階、ハーモニーなど合奏としての基本トレーニングの方法について学ぶと共に、パートでのアンサンブル力向上を目指す。同時に技術的に平易な楽曲の練習を通じ、楽曲演奏に必要な基本トレーニングの効果的な方法について学ぶことにより、練習のポイントを理解した具体的な練習方法が身につく、演奏力が向上することを目指す。
		合奏Ⅱ	「合奏Ⅰ」で学んだ合奏としての基礎技術を踏まえ、楽曲の練習を中心に音程やリズムなど基本的な合奏技術の習得を目指す。また、演奏発表に向けてパートや役割グループとしてのまとまりある表現ができるよう取り組むことにより演奏の質的向上を図ると同時に、学習成果を発表する本番に向けての準備や後片付けといった演奏会運営の実際を体験し、本番を見据えた合奏練習のあり方を学ぶ。
		生涯学習音楽指導論	音楽を聴く喜びは、音楽を語り合う喜びに比例する。芸術音楽の特異性は、単に「聴く」喜びを提供するだけではなく、それについて「考え」「語り」「知る」ことを、言い換えれば「趣味を洗練させ、知識を深める」ための土壌を提供することにある。生涯にわたり何らかの形で音楽に携わる人生を送ろうとする時、音楽のもつ共同体形成力の基である「型（聴く型）」の存在やあり方について、言語性、歴史性、社会性の視点から学習する。
		声楽基礎演習Ⅰ	人間の本来の声（肉声）をもとに、歌う喜びを見出すことを学ぶ。そのために発声法を学び、身体的に健康に関与する吸気・呼気について基本的な筋肉運動を学ぶ。さらに発声法が少し理解できるようになった段階で、実際に声を出し、歌曲に入る。最初は母音の多いイタリア語の歌から学ぶ。さらにクラシック音楽において、古典的な歌曲の曲想について、精神的、プレッシングなど基本を学ぶ。
		声楽基礎演習Ⅱ	発声練習を念入りに行い生涯歌える喜びが得れるように学ぶ。母音発声、子音発声をBel Canto唱法により、ダンノーゼルやパノフカなどの教則本から抜粋した曲目などで練習訓練していく。さらに、音声学からの練習方法を指導し、練習がはかどるように導く。また、どのようなパッセージにも屈しない精神力をここで付ける。
		声楽表現演習Ⅰ	ここでは、イタリア歌曲からさらに個々の力や達成基礎力に従い選曲する。ヘンデル、ロッシーニ、トスチ、ベッリーニなど組曲などの挑戦や、ベートーヴェン、シューベルト、ドビシーなどへ進む。さらに日本歌曲も声楽基礎演習科目に続き、ある程度長い曲を選択し、日本語の美しさを探る。アーティキレーションを深く学び、詩文の理解を深める。
		声楽表現演習Ⅱ	声楽表現演習はこれまでの演習科目に続き、オペラ・アリアも学ぶことができる。それぞれの進捗状況に合わせ、魅力的、趣味趣向に合わせて、基礎力を踏まえ学ぶことができる。生涯に残る歌声を構築し、自己達成による肯定感を得るように指導するものである。今後の人生に音楽的生活が送れ潤いを得る習慣が保てるように、音楽の根底にある精神性を学ぶことになる。
		器楽基礎演習Ⅰ	各自選択した管打楽器の構造を理解し、楽器の取り扱い方及び日常の手入れの仕方を習得し、楽器演奏の基本的奏法を学び、身につけます。楽器の基本奏法を身につけ、音階や簡易な楽曲を演奏できることと 日常の手入れを行い、楽器を良好な状態に保つことができる知識と技術を身につける。
		器楽基礎演習Ⅱ	各自選択した管打楽器の構造を理解し、楽器の取り扱い方及び日常の手入れの仕方を習得し、楽器演奏の基本的奏法を学び、身につけます。楽器の基本奏法を身につけ、器楽基礎演習Ⅰでの学習をさらに深め音階や簡易な楽曲を演奏できることと、日常の手入れを行い、楽器を良好な状態に保つことができる
		器楽表現演習Ⅰ	「器楽基礎Ⅰ・Ⅱ」で修得した基本的奏法と読譜力に基づき、楽曲演奏を通じ基礎技術の向上に重点を置いた演習を行います。教則本及び練習曲を用いたレッスンにより各自がそれぞれ奏法上の課題を的確に把握し、各自それぞれの技量に合わせた選曲を行い、その楽曲の演奏表現に必要とされるより高度な演奏技術や呼吸法、読譜力を習得します。良い状態で演奏できるように必要な楽器の維持管理をします。和楽器(箏)の基本奏法及び楽曲演奏を行うことにより和楽器への知識と体験を深めます。
		器楽表現演習Ⅱ	「器楽基礎Ⅰ・Ⅱ」で修得した基本的奏法と読譜力、更には「器楽表現Ⅰ」で修得したより高度な演奏技術と呼吸法を駆使し、各楽器の基本的レパートリーをマスターすべく楽曲演奏に重点を置いた実習を行います。各曲の演奏表現に必要とされるより高度な演奏技術や呼吸法の習熟に併せ、フレージングを中心とする楽譜の理解と表現方法を習得します。更に人前での演奏表現を考えた練習方法及び表現方法についても学びます。
		ピアノ応用	1年次、2年次の「ピアノ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「ピアノ表現演習Ⅰ・Ⅱ」で培った移調奏や伴奏付けを基に、童謡、ポピュラー曲や中高歌唱教材の日本歌曲など、幅広いジャンルの曲に的確な伴奏を付け、音楽的に演奏する事を学ぶ。また、これらを生かして、簡単な作曲や編曲にも挑戦し、学校教育や生涯音楽の支援者・指導者の力を養成する事や、音楽の深みを味わう事を目的とする。

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部教育学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 音楽コース専門科目	ピアノ基礎演習Ⅰ	グランドピアノで教員と学生のマンツーマンの個人レッスン（15～20分間）を実施する。課題は①スケール・カデンツ（C、a、G、e、F、d）、②古典（3部形式、ソナタ形式）、③パフォーマンス（ソロでの自由発表）があり、それぞれ個人の進度に合わせてテキストを決める。②は教員から課題を出す、③は学生自らが選曲（編曲・作曲を含む）することを建前としている。また、音楽鑑賞学習で生のピアノ演奏に触れさせている。	
	ピアノ基礎演習Ⅱ	グランドピアノで教員と学生のマンツーマンの個人レッスン（15～20分間）を実施する。課題は①スケール・カデンツ（D、h、B、g）、②古典（3部形式、ソナタ形式）、③パフォーマンス（ソロでの自由発表）があり、それぞれ個人の進度に合わせてテキストを決める。②は教員から課題を出す、③は学生自らが選曲することを建前としている。中間発表を設け、学生自らがピアノで音楽メッセージを発信することを促している。	
	ピアノ表現演習Ⅰ	グランドピアノで教員と学生のマンツーマンの個人レッスン（15～20分間）を実施する。課題は①スケール・カデンツ（A、fis、Es、c）、②古典（形式は自由）、またはバロック、③パフォーマンス（ソロでの自由発表）があり、それぞれ個人の進度に合わせてテキストを決める。②は教員から課題を出し、楽譜を正確に読み取る力を目指す。③は、オリジナル、クラシック、ジャズ、ポピュラー等、学生自らが自由に選曲し、独自のピアノ表現を目指す。	
	ピアノ表現演習Ⅱ	グランドピアノで教員と学生のマンツーマンの個人レッスン（15～20分間）を実施する。課題は①スケール・カデンツ（E、cis、As、f）、②古典（形式は自由）、またはバロック、③パフォーマンス（ソロでの自由発表）があり、それぞれ個人の進度に合わせてテキストを決める。②は教員から課題を出す、③は学生自らが選曲することを建前としている。視聴覚教材を使用して、ピアノ音楽の聴取能力の向上をはかる。	
	ピアノ総合演習Ⅰ	「ピアノ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「ピアノ表現演習Ⅰ・Ⅱ」「ピアノ応用」「コードと即興」で、実践を通して学んだ知識・技術や、「生涯学習音楽指導論」他の科目で学んだ成果を、ピアノにおける総合的基盤づくりとして統合し、更に発展させる。マンツーマンの個人レッスン、ML教室における集団授業、電子オルガンによるサポート、視聴覚教材の鑑賞学習、ライブの鑑賞学習、学生自らの中間発表、学内外における発表、地域での音楽貢献など、多様な場面で応用の利くピアノ演奏を目指す。ジャズと電子オルガンの学習希望者がある場合は、それぞれ6週間（6コマ）ずつ授業を設ける。 【授業展開の種類】※以下の4種の授業展開から、学生が選択する。 ①クラシック・ピアノ：15週間（15コマ）担当教員：鈴木しおり ②クラシックピアノ9週間（9コマ）担当教員：鈴木しおり、ジャズピアノ6週間（6コマ）担当教員：南山雅樹 ③クラシックピアノ9週間（9コマ）担当教員：鈴木しおり、電子オルガン6週間（6コマ）担当教員：加藤久美子 ④ジャズピアノ6週間（6コマ）担当教員：南山雅樹、電子オルガン6週間（6コマ）担当教員：加藤久美子、クラシックピアノ3週間（3コマ）担当教員：鈴木しおり	
	ピアノ総合演習Ⅱ	「ピアノ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「ピアノ表現演習Ⅰ・Ⅱ」「ピアノ応用」「コードと即興」で、実践を通して学んだ知識・技術や、「生涯学習音楽指導論」他の科目で学んだ成果を、ピアノにおける総合的基盤づくりとして統合し、更に発展させる。マンツーマンの個人レッスン、ML教室における集団授業、電子オルガンによるサポート、視聴覚教材の鑑賞学習、ライブの鑑賞学習、学生自らの中間発表、学内外における発表、地域での音楽貢献など、多様な場面で応用の利くピアノ演奏を目指す。ジャズと電子オルガンの学習希望者がある場合は、それぞれ6週間（6コマ）ずつ授業を設ける。 【授業展開の種類】※以下の4種の授業展開から、学生が選択する。 ①クラシック・ピアノ：15週間（15コマ）担当教員：鈴木しおり ②クラシックピアノ9週間（9コマ）担当教員：鈴木しおり、ジャズピアノ6週間（6コマ）担当教員：南山雅樹 ③クラシックピアノ9週間（9コマ）担当教員：鈴木しおり、電子オルガン6週間（6コマ）担当教員：加藤久美子 ④ジャズピアノ6週間（6コマ）担当教員：南山雅樹、電子オルガン6週間（6コマ）担当教員：加藤久美子、クラシックピアノ3週間（3コマ）担当教員：鈴木しおり	
	コードと即興	ポピュラー音楽の基本的な構造を解析し、和声（コード）や音階（スケール）の機能について学ぶ。コードの構成と進行について楽典を確認しながら学び、コードに適切なスケールを当てはめて実際に演奏するなど、簡単な即興演奏（アドリブ）の実践に繋げる。古今のポピュラー・ジャズ、クラシックの視聴覚教材で鑑賞し、その特徴をつかみ取ることで、自らの音楽づくりの参考にする。	
	音楽教育フィールド演習Ⅰ	声楽、ピアノ、管打楽器のそれぞれの分野を通じて個人だけでの演奏表現だけでなくグループ演奏を中心とした技術、表現方法の実践。創造力を生かし音楽を社会に役立て、地域の活性化に貢献することができるような人材を育成すると共に自ら学ぶ芸術分野と自らが居住する地域との関係に関心を持ち、どのような貢献ができるかを考察してもらう。	
	音楽教育フィールド演習Ⅱ	声楽、ピアノ、管打楽器のそれぞれの分野を通じて個人だけでの演奏表現だけでなくグループ演奏を中心とした技術、表現方法の実践。創造力を生かし音楽を社会に役立て、地域の活性化に貢献することができるような人材を育成すると共に自ら学ぶ芸術分野と自らが居住する地域との関係に関心を持ち、どのような貢献ができるかを考察してもらう。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部教育学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 専 門 科 目	音 楽 コー ス 専 門 科 目	音楽教育フィールド演習Ⅲ	声楽、ピアノ、管打楽器のそれぞれの分野を通じて個人だけでの演奏表現だけでなくグループ演奏を中心とした技術、表現方法の実践。創造力を生かし音楽を社会に役立て、地域の活性化に貢献することができるような人材を育成すると共に自ら学ぶ芸術分野と自らが居住する地域との関係に関心を持ち、どのような貢献ができるかを考察してもらう。	
		音楽教育フィールド演習Ⅳ	声楽、ピアノ、管打楽器のそれぞれの分野を通じて個人だけでの演奏表現だけでなくグループ演奏を中心とした技術、表現方法の実践。創造力を生かし音楽を社会に役立て、地域の活性化に貢献することができるような人材を育成すると共に自ら学ぶ芸術分野と自らが居住する地域との関係に関心を持ち、どのような貢献ができるかを考察してもらう。	
		音楽科教育法Ⅰ	社会で要求される音楽教育の在り方や、各学校の教育目標を達成するために音楽の授業が果たす役割について考察するとともに、現代を生きる中高生の音楽行動を視野に入れながら、魅力ある授業づくりについて理解する。具体的には、①中学校・高等学校における音楽科教育の歴史の変遷や法的背景を理解する、②授業構成の諸原理を理解し、授業を展開するための基礎的能力を身につける、③学習指導案を作成し、模擬授業を行うなどを目標としている。	
		音楽科教育法Ⅱ	人々は身体の楽器として声を音楽の表現とする。声以外の音での表現法として楽器を使う表現がある。声以外の音を求め、想像し音にすることでもう一つの表現の世界を創造することができる。創造された音の美的感性を高めることで、豊かな感情を養う指導法を学ぶ。本講義では音楽教育基礎を踏まえた上で、音楽教育の中の器楽指導法と器楽教育法を学ぶ。また、歌唱及び鑑賞との関連性についても学習する。	
		音楽科教育法Ⅲ	中学校、高等学校の教育活動における「音楽」の位置付けについて理解し、その授業実践に必要な理論的背景を踏まえながら、教授行為や教材作成などの基礎的能力を習得する。本講義の到達目標は、(1)学習指導要領における「音楽」の位置付けの理解、(2)音楽の授業の構成要素の理解、(3)教授行為や教材作成の基礎的技術を身につけること、である。	
		音楽科教育法Ⅳ	音楽科教育全般の理論と実践についての授業が中心となる。本授業では、中学校音楽の授業の記録ビデオ(DVD)を通して実践的な指導法について学ぶ。特に教育実習など直面する授業に備え、学習指導案を作成する能力を身につけると共に、模擬授業を通して実際の授業づくりに必要な実践的な指導力を養う。	
		教育実習事前指導	教育実習を意義あるものとするため教育実習の意義や心構えや観察実習、参加実習、授業実習の要点、及び学習指導案作成の基礎・基本などを学習する。特に、実習校の受入れに感謝の気持ちを深め実習生としての資質・態度や心得を確実に身に付けることをねらいとしている。	
		教育実習事後指導	実習中に作成した教育実習日誌をもとに、中・高等学校で行った教育実習の成果や課題について整理する。また、研究授業等の反省会で明確になった自己の教育方法、技術の課題等についても整理する。さらに、今後大学生活で課題となる学修内容等についての見通しをもてるように発表を通して整理する。	集中
		教育実習Ⅰ	これまで教職科目で培われた知識・技能・態度等をもとに、中学校または高等学校において、実習校の校長先生はじめ指導教員、教職員の指導のもとに、教員として必要なさまざまな事項について具体的に学ぶ。その中から、教師としての使命感・責任感、かつ実践的指導力、また学校・教師の問題・課題を見つめ、教師を目指す資質・能力を高めることを目的とする。	集中
		教育実習Ⅱ	これまで教職科目で培われた知識・技能・態度等をもとに、中学校または高等学校において、実習校の校長先生はじめ指導教員、教職員の指導のもとに、教員として必要なさまざまな事項について具体的に学ぶ。その中から、教師としての使命感・責任感、かつ実践的指導力、また学校・教師の問題・課題を見つめ、教師を目指す資質・能力を高めることを目的とする。	集中
		教職実践演習	教員に向けての総仕上げの場として、履修カルテをもとにして、個々の課題を整理し、取り組むべき事柄を明確にするとともに個々の課題を解決させ、学習者としての子どもの自発的な行動を促し、目標達成を支援できる指導技術を身につけさせる。主な授業形態として、質疑形式の対談、現実場面を想定したロールプレイングやグループ討議、実技指導などを取り入れる。また、教育委員会や現職教員の協力を得て、より実務的な実践力を身につけさせる。	

授 業 科 目 の 概 要				
（教育文化学部芸術学科）				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
全 学 共 通 科 目	導 入 科 目	基礎教育セミナーⅠ	大学で「学生」として「学ぶ」ということを理解する。専門的学習の場において、読み書き調べることに関する基礎能力の習得が重要となる。そのため、情報検索、ノートテイキング、リーディング、ライティングの各種能力を向上させる。さらには、情報を整理しまとめ伝えることができる力を獲得する。加えて学生生活全般にわたっての心の健康（メンタルヘルス）について学ぶ。大学で学ぶということは学長、メンタルヘルスはカウンセラーが担当し、他は学科専任教員全員で担当する。	
		基礎教育セミナーⅡ	基礎教育セミナーⅠで習得した大学で学ぶために必要不可欠な知識、技術、情報をさらに自分のものとして身につけていくために、多分野にわたる学びを深める。現代社会における様々なトピックスを題材にして、レジュメの作成やディスカッションを行いながら、社会に関わるためのコミュニケーション・スキルの向上をめざす。自分の将来への意識を確かなものにしながら、専門の学びへの準備を整えていく。自ら調べ、整理し、まとめ、伝えるといった能力をスキルアップさせる。そして、大学生活に必要なマナーや態度を身につける。学科専任教員全員で担当する。	
	基 礎 科 目	日本語表現	日本語による表現能力の向上と、基本的知識の修得を目的とする。その表記方法（文字・語彙・文法・文体・仮名遣い・送り仮名・文章表現に際して用いる符号類等）を学習し、文章の種類・形態と文章を書くときの要領や修辭法について学習する。伝えることの大切さを意識すると同時に、日本語の各分野における能力を向上させることを目的としている。各自が持つ日本語表現能力を向上させ、効果的で円滑なコミュニケーションを図ることができるように、基礎的な力をつけることを目的としている。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○話し言葉と書き言葉：山本（麻） ○漢字（成り立ち、同音意義語等）：福田 ○四字熟語、慣用句など：小坂 ○二語の関係：村松 ○敬語：小杉 ○文章をつくる：石原 ○文と文の関係（文の並べ替え、文法）：小原 ○情報を読み取る：前川	オムニバス
		数学入門	私たちが便利で快適な生活を送ることができるのは、ベースに数学がある。普段、数学の存在を気にすることなく、生活をおくることは可能である。しかし、いざ世の中の仕組みを知りたいと思うと数学が得意とする論理的思考力が必要になる。本学では、生活における数学という切り口で身近にある数学を学び、各専門分野で必要な、ものを考えるための基礎力を身に付けることを目的としている。2年後期に開講される（履修する）就業力特別講義Ⅰに向けた基礎力を培うことをも目的としている。 8回の講義内容は、以下の通りである。 ○携帯端末と数（数の仕組み）：松澤 ○点と線と面（図形の基本）：佐藤（克） ○速さと時間：菊池 ○美と比率（黄金比等）：水野 ○行き先と道順（樹木図等）：松村 ○借りたお金はいくら返せばいいの？（金利等）：澤田 ○集合：西村 ○資料の数値化（統計の基礎、そもそもなぜ数にするのか？）：佐々木（雅）	オムニバス/複数担当
		情報機器操作Ⅰ	コンピュータハードウェアの基本と情報処理の基本を理解するとともに、コンピュータを活用して、データ管理、ネットワーク処理等を行う。インターネットの利用を通して、情報社会における情報モラルの必要性や情報発信に対する責任等について考える態度を養う。パソコンの日本語文書処理、プレゼンテーション、表計算のソフトウェアを使い、日本語文書処理の基本とデータ処理の基本、プレゼンテーション用資料作成の基本的な知識と技能を習得し、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力の育成をねらいとしている。	
		情報機器操作Ⅱ	情報処理の基本を踏まえて、コンピュータを用い、実際にアプリケーションソフトを使って、情報処理におけるコンピュータの基本的・応用的な活用と初歩的な画像処理の方法を学ぶ。また、文書の作成、データの活用、プレゼンテーション等の活用について知識を深め、情報モラルについても考察を深める。いずれの活用においても、基本的な知識・技能について確実に高い習得を行なうとともに、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力を育成することを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
基礎 科 目		健康体育(実技を含む)	【教育文化学部】 自分の身体に責任を持ち、健康な身体をつくります。また、そのための基礎知識と基礎体力を向上させる。さらに、「身体と頭がSmartに(賢く)なる体育」を目標に、自分自身の身体を通して健康について考えます。また、いろいろなスポーツのもつ面白さとトレーニングの喜び・難しさを理解します。そのために、健康の保持・増進に関する知識を深め、運動の体験をとおして、自分自身とのコミュニケーション、自分と他者とのコミュニケーション能力を高めるなどの活動を行います。 (教育学科学習コーチングコース) オムニバス ○講義：体育理論の学習 1～5 (浅尾秀樹) ○実技：身体を知り、動きの質を高める 6～12 (山崎あずさ) ○講義：トレーニングの方法について学ぶ 13～15 (浅尾秀樹) ○実技：表現する、伝えることを中心に、身体を動かし、創造する力を身に付け、グループに分かれて作品をつくり発表する 16～23 (山崎あずさ) (教育学科養護コース、音楽コース、芸術学科、心理学科) オムニバス ○講義：(花井) ○実技：(畠山、花井、千葉) 3クラス展開	※実技/オムニバス
		英語コミュニケーションⅠ	本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行います。受講するにあたり、英語力の前提条件はない。 最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。 この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。	
全 学 共 通 科 目	外 国 語 科 目	英語コミュニケーションⅡ	この講座を受講するにあたり、英語コミュニケーションⅠを修了していることが必須である。 本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行い、レベルアップを図ります。最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。	
		英語(中級)	社会に出て仕事や研究のツールとして使うに足る、英語力を養うために、英語を多角的に学び、教養のある「英語」に向上させていく。「読む」「聴く」の受信面と「書く」「話す」の発信面の4つの技能を大学レベルまで高める。アカデミックライティング(エッセイの構成の基礎的理解)とオーラル・プレゼンテーションを中心に学習する。適切な文を書き、ライティングの過程を踏まえて、論理的に構成されたパラグラフを書くことを学ぶ。習熟度別クラス展開を行なう。	
		英語(上級)	各自の専門分野に関連させたかたちで、より高度な英語運用能力が身につくように勉強する。論文作成を行なうことを目的にして、英語文献を読みこなし、国際会議等で発表や議論するための基礎能力開発を行う。学術論文の構成を理解した上での読み方、効果的なプレゼンテーションの仕方、ディベートの訓練等を行う。習熟度別クラス展開を行なう。	
		韓国語	韓国語は、日本語とほぼ同じ語順で、日本人にとって最も習得しやすい言語と言える。文字と発音に習熟すると同時に、簡単な会話文やあいさつなど実用性に重点をおいて、韓国語に慣れ親しみ学んでいく。また視聴覚教材を通して、韓国の文化や風習に触れる。	
		中国語	中国語の基本的な文法事項を確実に習得して、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。また、ビデオやDVDを用いて中国の文化遺産や歌などを紹介して、中国の文化や社会事情を通して理解を深める。	
		ドイツ語	ドイツ語では、初歩的な文法の一部を取り上げて、学習する。また、文法事項を通じて、ドイツ語圏(ドイツ・スイス・オーストリアなど)の生活・文化についても触れながら、理解を深めていく。	
		フランス語	フランス語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。フランス語を学ぶことを通して、フランス語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、フランスの文化や社会事情への理解を深める。	
		スペイン語	スペイン語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。スペイン語を学ぶことを通して、スペイン語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、スペインの文化や社会事情への理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
全 学 共 通 科 目	教 養 科 目	現代生活と政治・経済	「現代生活と政治経済」は、政治と経済を中心に社会の動く仕組みを理解する。政治と経済は不可分の関係にあり、その相互作用を理解することが、社会の動きを読み解くためのリテラシーを高めることにつながる。社会的格差が広がりつつあると指摘される現代だが、政治学と経済学の基礎理論を通して、競争や公平の概念を理解し、議論できる学びの深化を目指す。まず、経済学から説き起こし、提起された課題を政治学が引き取り、最後に二つの学の重なりを双方向的授業展開の中で確認し、現代生活への理解を深める。 経済学については、基礎理論として基礎概念を学び、さらに市場メカニズムについて考察する。身近な生活と経済とのかかわりを考察するとともに今日的課題を理解する。(澤田一義 1回～8回、15回) 政治学については、基礎理論として政治学、公共経済学について学び、生活と政治の関連を探る。社会における公平や世界の中の日本について考察を深める。(相内眞子 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と法律	現代生活において、社会の秩序を維持するためには、「法律」という客観的な価値の基準が必要である。人々の生活を強制できる唯一のものでもある。この根本には「人間の尊重」があり、これは現在、日本国憲法のもとで定められているあらゆる法律に共通する普遍的な原理である。高度に進化した現代社会では、個人においても組織体においても、コンプライアンスという言葉により、いっそう法の遵守の意義が求められている。私たちの日常生活において、様々な場面で関わりのある法律の存在を改めて意識し、理解を深めていく。	
		現代生活と福祉	現代社会においては、私たちの暮らしは、個人的な力だけでは営むことができなく、社会全体で助け合う仕組みにより成立している。授業では、現代生活の特徴を明らかにし、福祉制度がどのように私たちの暮らしに結びついているかを学び、生活全般にわたる福祉についての理解を深める。	
		現代生活と芸術	現代社会における芸術をどのように位置づけ、考え、学び、実践していくのかを、音楽、美術の両面から考察し検証する。芸術が社会とどのように関連し、何が創造され、生活や社会活動を豊かにするのかを、過去と現在を比較しながら学んでいく。音楽では、現代生活に大きく影響を与えた音楽史での発明とこれまでの経緯をたどり、現代における音楽のあり方を検証する。また美術では表現の歴史と社会背景について知り、それらが現代にまで与える影響や生かされている点について、現代の美術作家の視点をもとに検証を進め学びにつなげていくと同時に社会活動としてのアートという観点から様々な実践例をもとに学んでいく。 ○原始時代の痕跡、ルネッサンス、印象派、葛飾北斎、コンテンポラリーアート、アウトサイダーアート、アートプロジェクトといった視点を通して、現代の生活や価値観を通して、芸術を比較し検証する。(末次弘明 1回～8回) ○楽譜、オペラ、歌舞伎、平均律、ピアノ、録音技術、音楽鑑賞プロジェクトといった切り口から現代生活における音楽のあり様を比較し検証する。(鈴木しおり 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と教育	教育を成長の過程と併せてとらえ、現代生活を有意義に過ごす上で必要となる基礎的リテラシーを磨く。教育とは何かを考えることから始め、第Ⅰ部では、人間の成長段階に合わせ、貝原益軒の「和俗童子論」、世阿弥「花伝書」、宮本武蔵「五輪の書」、鴨長明「方丈記」、高田好胤「好胤のことば」等と比較しながら教育の意味や意義を考える。第Ⅱ部は、企業の新人教育、新製品開発にかかわるエピソード、一流スポーツ選手へのインタビュー等をもとに、教育と成長との関わりについて考える。	
		現代生活と心と体	現代生活は、経済の発展、技術革新、人・物・情報などが自由に移動する等により、豊かで便利な生活となり、人間の健康水準は向上している。しかし、その一方で、感染症、生活習慣病、心の病といった新たな健康問題も出現している。本講義では、人間を取り巻く現代生活の特徴、心や体の基本的知識、代表的な心や体に関わる問題について理解を深める。また、自らの心と体に目を向け、現代生活で心や体を守るために必要なことについて考える力を養う。	
		現代生活と物理	物理は自然科学の基礎と言われている。普段私たちは物理ということ意識して過ごすことはあまりない。実は、自然現象や日常生活においておこる様々な現象は、物理に密接に関係している。物理は身近なものなのである。「なぜ飛行機はとぶのか」「空はどうして色が変わるのか」「そもそも色とは何か」「超伝導とは何か」「音や音程のしくみは」「なぜ時には速さがあるのか」「なぜ摩擦がおきるのか」など、疑問はつきない。物理の基本的概念の助けを借りて理解できることがたくさんある。この講義では、物理の知識を学び、日常生活においておきる現象を客観的に見る力を養い、専門分野の学びを深めることにつなげる。 ○光(空の色、物体の色、色) 松澤衛/3回 ○音(音程、音色、ドップラー効果) 松澤衛/3回 ○運動(時速、衝突) 小田研/3回 ○熱と摩擦 小田研/3回 ○電気と磁気(磁気と記憶) 小田研/3回	オムニバス
		現代生活と宇宙	身近なところにある現代生活と宇宙のつながりについて、3つの視点で講義を展開する。まず、宇宙誕生から現代までの時間を様々な時間スケールに置き換えて考える。137億年の歴史を1年に縮め、宇宙の歴史における人類について考える。次に、宇宙に飛び出した人類の視点から、宇宙開発や宇宙から見た地球、宇宙飛行士などをテーマに宇宙から見た地球を考える。最後に、人類が宇宙へ進出する中で生まれた様々な技術が、私たちの生活の中にも役立てられている。この技術移転(スピノフ)について紹介する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
全学共通科目	教養科目	現代生活と環境科学	現代の私たちの生活は、科学の発展とともに物質的に豊かで便利なものになってきた。しかしその反面、自然環境の汚染による生活環境の悪化、資源エネルギーの不足、地球温暖化など様々な問題が生じている。本講義では、人間をとりまく自然のおよび社会的環境とその中で生じている今期的問題について理解し、環境と人間の関わりについて考え、問題解決の方向を探ることを目的とする。はじめに、環境とは何かについて考える。地域環境と生命とのかかわりや、快適環境への人間の適応、現代生活における生活リズム・大気・水・化学物質等について考察を深め、地球を取り巻く環境の諸問題について考える。	
		北海道の文化	北海道はアイヌ民族が先住民族として居住する地域に、明治以降に各地から200万人以上の人々が移り住んだ地域である。移住地で庶民はどのような生活文化を築いたのだろうか。庶民が営々と築きあげてきた日本の生活文化について、民俗学視点から講義する。本講義では昔から伝承された生活文化が、現在はどういうに変化しているのか。昔と今の文化を比較しながら、具体的な事例をもとに自文化について考察する。また人の移動と文化形成の視点から、北海道が新しい文化を受け入れやすいという道民性についても考える。	
		日本国憲法	日本国憲法は、我が国の最高法規・国づくりの基本となるものである。したがって、私たちの住む国家・社会をどのように発展させていくかの指標ともいえる。その意味では、日本国憲法の内容、役割、機能を真摯に学習することは、主権者である私たち国民にとって極めて大事なことである。中学・高校と学んできた日本国憲法の知識をもとに、憲法の基本理念やしぐみについて理解を深めていく。さらに、憲法が制定されて60年以上が経過する間に、多くの憲法問題、裁判例が蓄積されてきたことを踏まえ、現代的な諸課題についても主権者としてどうあるべきかを学んでいく。	
		情報社会及び情報倫理	インターネットの普及により、情報や情報技術、ネットワーク技術に関わる様々な事柄が、当然のこととして扱われている。それらを正しく理解、利用することで、社会生活により良い効果が生まれる。しかし、間違った理解や、利用方法を誤ると、個人においても社会に対しての悪影響を防ぐことはできない。情報や情報技術、ネットワーク技術がめまぐるしく発達する中で、その利用方法や役割、影響等について、正しく理解し、考察し、情報倫理の必要性や、情報を扱う責任について考え、望ましい情報社会の構築に積極的に参加する態度を身につけることを目的としている。	
		情報処理(中級)	どのような社会分野でも情報処理の技術が、求められる時代になってきた。本学でも情報処理の基礎としての科目を用意しており、社会人生活で最低限必要な知識と技術を身につけることができる。情報処理中級では、基礎技術をベースとして、より高い社会の要求に対応できる人材育成を目的とし、アプリケーションを自在に操るマクロ、情報の整理整頓を行うデータベースを中心に、コンピュータでのデータ処理の知識、技術を学習する。	
		情報処理(上級)	どのよう分野でも仕事を行う上での必須アイテムがコンピュータである。本学では、情報処理の基礎、中級という科目を用意しており、社会で必要な情報処理技術を学ぶことができる。この科目では、更にコンピュータ、スマートフォンに代表される携帯端末、ネットワークの仕組みを理解し、より高度な情報処理技術を学ぶ。情報端末やネットワークをプログラミングにより制御をして、コンピュータを自由自在に制御する方法を習得することを目的とする。	
	就業力養成科目	キャリアデザインⅠ	本講義は、体系的に開講される本学キャリア教育科目のスタート地点に位置する基礎科目である。自己の進路を見据えて望ましい職業観の醸成を主なねらいとし、学び、働くことの意味を考えることから始める。いずれ、己の足で立つ労働市場の現状を早い時点で知ること、次の段階への意欲づけにつなげたい。講義を通じ、大学で学ぶことや社会で働くことの意義について、若年労働市場の現状を経済情勢や雇用環境の変化などと関連づけて理解し、自らのキャリアについての展望を持てるように促す。	
		キャリアデザインⅡ	本講義は、キャリアデザインⅠに続く基礎科目として、キャリア意識の醸成を目指す。様々なキャリアを経験してきた教員や各種の仕事で活躍している卒業生のお話を聞き、多様な生き方や考えがあることを学ぶ。これにより自己の興味範囲外の世界があり、一見関係のない分野も全てが繋がって社会が成り立っていることを理解し、キャリアの広がりや認識する。また、社会に出ていくために必要なワークルールや敬語など社会人としてのコミュニケーションのルールについて学ぶ。	
		キャリアデザインⅢ	本講義は、自らのキャリアを構築させるための対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の醸成を目指す。様々なコミュニケーションワークを体験し、自己の意見を伝え、他者の意見に耳を傾けることができる「発信力」「傾聴力」の習得を図る。また、自己の考えを文書化し、グループの中で主張できる「表現力」「企画力」の習得を図る。小グループでの企画書づくりを通して、他のメンバーと協力して物事を作り上げる「課題解決力」の習得を目指す。	
		キャリア演習Ⅰ	本演習は、自らのキャリア構築のための実践的な対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の向上を目指す。対自己基礎力では、就職活動の自己アピール文を作るための自己分析を行い、自分の強みを正しく理解する。対人基礎力では、他者へ訴求できることを目指し、実践的な自己PR演習を行う。また、就職活動には欠かせない履歴書の作成を通して言語的コミュニケーション基礎力の向上を目指す。まとめとして、就職活動で成功するために自らの目標を設定し、実現のための具体的な行程表を作成する。	
		キャリア演習Ⅱ	本演習では、進路決定のための実践的な就職活動の基本についてを学ぶ。模擬面接、模擬グループディスカッション等の実践的な演習を通じて、自己のコミュニケーション力を正しく把握し、さらなる自主努力の必要性を理解し、自発的行動への意識を喚起する。民間企業、福祉施設、教職、公務員など志望分野は異なっているとしても、社会・職業への移行に必要な力・本質は同じであるという大原則を正しく理解する。また、ビジネスマナーを通じて社会人としての立ち居振る舞いの習得を目指す。	※講義

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
全 学 共 通 科 目	就 業 力 養 成 科 目	キャリア演習Ⅲ	本演習は、本学のキャリア教育の中で実践教育に位置づけされる。就職活動中の民間企業希望者や福祉施設希望者、面接試験を控えた教員や公務員志望者を対象に開講する。演習では、模擬グループディスカッションや模擬面接を通して「面接力」の向上を目指す。模擬面接では、受験者役、面接官役、評価者の3役全てを体験することで、それぞれの視点を理解し、柔軟性と状況把握力を養う。また、「面接力」の基本となるコミュニケーション能力の向上を目指す。	
		キャリア演習Ⅳ	本演習は、本学のキャリア教育科目の総括科目にあたる。将来の進路決定の有無に関わらず、今後一生続く自らのキャリアを見つめる社会人としての視点を学ぶ。社会で活躍している人の講演や、ビジネスマナー、働く人の法制度等を学ぶことにより、物事に対する俯瞰的視点の習得を図る。社会のルール、社会的行動への理解を深め、応用力を養成することで、社会人1年目から活躍できる「+αの社会人力」を身につけることを目指す。	※講義
		就業力特別講義Ⅰ	本講義は、民間企業の就職試験において90%以上実施されている筆記試験対策の実践教育である。対策分野はSPIの非言語分野に絞り、展開方法は全8回のオムニバス方式で実施する。各分野の担当講師から解法のポイントを学び、論理的思考の醸成を目指す。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○確率 : (松澤) ○グラフの領域 : (佐藤(克)) ○速度算(速度・距離・時間) : (菊池) ○割合、比率、濃度 : (水野) ○仕事算、水槽算 : (松村) ○損益算 : (澤田) ○集合、順列・組み合わせ : (西村) ○表の読み取り : (佐々木(雅))	オムニバス
		就業力特別講義Ⅱ	本講義は、就業力特別講義Ⅰで学んだSPIの解法を正しく理解し、自らの実践力を確認し、論理的思考の深度を図ることを目指す。講義では「就業力になぜSPIの勉強が必要か」を問い、相互確認することから始める。社会人基礎力における論理的思考の重要性を再認識することでSPI対策に自主的に取り組む姿勢を醸成する。SPI対策の実践では、就業力特別講義Ⅰの復習と応用問題に取り組み、正確でより速い解法力を育む。 (オムニバス方式/全8回) (小室晴陽/1回) SPI非言語対策と論理的思考の必要性 (菊池隆夫/7回) SPI非言語応用問題対策	オムニバス
		インターンシップ	本演習は、企業・団体等での就業体験を通じて就業力を育成することを目的としている。インターンシップは、①日々学んでいる専門性を実践の場で発揮する機会として、②自ら選択した職種の適性を判断する機会として、③進路とは異なる業種、職種を経験する機会として等、各自の目的に応じて活用することが可能である。インターンシップにより、将来の進路選択の際に必要なさまざまな知識を吸収すると共に、社会に通用する価値観や労働を通した社会貢献の重要性に気づき、社会人としての基礎力を培うことを目指す。	
	外 国 人 留 学 生 科 目	日本語	外国人留学生対象科目である。本学における学習場面でのコミュニケーション・学習・発表がスムーズに行えるように、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの技能の向上を目標とする。また、日本の文化、事情、風習、マナーなどを読み物や視聴覚教材を通して理解することで、日本での留学生活がより有意義なものになるようにする。例えば、読解を目的に小説を読むことや、語彙と文法事項、漢字などの学びに加えて、日本の事情や文化等を扱ったニュースに触れ、日本の演劇鑑賞などを教材として学ぶ。日本語能力検定1級を必ず取得しよう。	
		現代日本の文化	外国人留学生対象科目である。現代日本の文化では、留学生の出身国(地域)における自国の文化認識を確認し、それらと比較しながら、日本文化や地域文化(北海道)の内容について理解を深める。出身国(地域)の文化認識の確認することから始めて、日本の伝統文化である「食文化」「文化遺産」「スポーツ」「芸術」「マンガ・アニメ」「生活習慣」等を学ぶ。また、北海道の地域文化を理解することを目的にして、「博物館体験授業」を通した学びを行なう。	
発 展 科 目	心 身 ・ 健 康 に 関 する 科 目 群	食生活と健康	日本の食事や日本人が培ってきた食事文化は世界一の長寿国をもたらした。しかしながら、現在の日本人の食事のあり方にはさまざまな問題点が指摘されている。私たちの現状の食生活を直視し、健康的な食生活を営むための基礎的な知識を学ぶ。さらには自ら食事を実践するための基本的知識を養う。	
		スポーツ施設管理論	体育などのスポーツ関連施設だけでなく、集会場を含む一般的な公共施設を良好な状態で使用し続けるための各種知識を伝授する。生涯スポーツを含む生涯学習時代を迎えて益々、これらの多様な活動を支える公的施設の重要性が高まっている。そのような現代日本において、健全な社会生活を保障するために各種の施設が保つべき環境条件を講義する。具体的には各種の施設、建築物、設備、器具、屋内環境、運営面、専門家の資格ほかを学ぶ。	
		心理学概論	人間の心のはたらきについての科学的・客観的な理解を得るために、心理学の基礎的な理論や知見を学ぶことを目的とする。人間の「見る」「考える」「学ぶ」「覚える」といった基礎的な過程についての知見を解説を行う。また、「欲する」「感じる」といった心理的活動の背景にある生理的・身体的な基盤について解説する。それらを基に、心の個人差や、健康や病理についても考える。個人の自己理解や他者理解を深め、実生活や実践の場にも活用できる知恵へとつながることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
心身・健康に関する科目群 発展科目	心理統計法	基礎統計学で学んだ知識をもとにして、心理学領域で必要となるデータ処理の方法を学ぶ。実際のデータおよび研究事例をもとに、データ処理をフローチャート化し、どのようなデータに対してどのような処理を行うのかについて、解説する。特に統計処理の結果をどのように理解するかに焦点をあてる。具体的には、毎回、演習課題を実際に行い、考察することを通して、データの表示、平均の差の分析、実験計画と分散分析、相関・予測の分析、度数の分析、因子分析、回帰分析について、理解を深める。到達目標：(1)データの種類によって、適切な統計処理の方法を選択できる、(2)基本的な統計処理を行うことができる、(3)多変量解析の結果を理解できる。		
	生涯発達心理学	従来の発達心理学は、誕生から成人に至る段階までを対象に、それぞれの発達段階で何ができるのか、どのような行動を示すのかを明らかにするものであった。近年、人の寿命が延び、胎児期からの心理学的研究がなされるようになったことから、これまでの傾向が見直され、全生涯を扱う縦断的な観点から発達過程を捉え直すようになってきている。人間は一生をかけて発達する可能性があるという視点に立ち、誕生から死に至る人間の心理的発達過程について、これまでに明らかにされてきた研究成果を中心に概説する。		
	人間関係の心理学	人間関係は二者関係が基本となるが、それにとどまらず、より複雑な人間関係の中で様々な心の動きが生じ、その事が個々人の認知や感情、そして行動面に影響を及ぼす。人間関係はその存在が心の支えになることもあれば、ストレスになることもある。他者の心理状態を知り、適切なコミュニケーションが取れることは、家庭、学校、職場、近隣を問わず、あらゆる場面において重要である。本講義では、人間関係を心理学の視点から包括的に理解することを目的とする。		
	育児支援の心理学	現代社会では少子化が進む一方で、育児ノイローゼや児童虐待問題が益々深刻化している。子育て支援についてもさまざまな見解がある。本講義では、現代社会の実情をふまえたうえで、子育て・家族支援の現場からの具体的な事例を適宜提示しつつ、子育て支援の必要性和重要性について改めて確認し、実際に求められる子育て支援と、その実践について考える。さらには、母子世帯、父子世帯他、さまざまな家族形態における生活事象をみずえた子育て支援のあり方についても具体的に検討する。		
	福祉心理学	今日の福祉問題に関する心理学的研究は始まったばかりであり、いまだに未開拓な面が多い。社会福祉学と心理学の学際的研究領域である福祉心理学とはどのような学問なのか、福祉的対応がどのような心理的影響を与えるのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、福祉的対応を必要とする人々の心理的特性ならびに福祉的対応に役立つ心理的技法、そして福祉施設における心理的問題などについて、いくつかの事例をもとに学ぶ。到達目標：(1)福祉心理学とは何かを理解する、(2)対人援助における心理的支援について、基本的な理解を得る、(3)対人援助における心理的援助の方法について、基本的な理解を得る。		
	犯罪心理学	犯罪（非行）という行為を通して、社会や人間のあり方を考えることを目的とする。過去や現在の犯罪（非行）の情勢、その特徴、対策や対応などについて、心理学的視点をもとに考えていく。 具体的には、犯罪（非行）の発生する生物・心理・社会的要因について考えることや、暴力犯罪や窃盗、性犯罪などの罪種についての概要、警察におけるプロファイリングなどの犯罪対応、矯正の現場など多岐にわたって取り上げていく。		
	社会学	家族、企業、地域等々、現代社会は様々な領域において深刻な社会問題を抱えている。本科目では、これら生活上の諸問題が生み出された背景について、近代の主要な社会変動とのかかわりから理解しつつ、社会学者がどのような理論構築をしてきたのかについて講義する。さらに、いくつかの話題を例示しつつ、様々な問題解決に必要な福祉のあり方を考える機会を設け、学びを深める。		
	社会保障論Ⅰ	社会保障の理念や経済的な機能について解説するとともに、社会保障を構成する諸制度（公的年金、医療保険、介護保険、労災保険、雇用保険、生活保護など）の仕組みについて解説を行う。これにより各制度により保障される生活の水準を理解することを目的とする。また、社会保障の財政事情を解説して、その規模と課題を理解することも合わせて目指す。 講義形式で展開し、現代社会とのつながりを理解するため適宜、新聞や専門誌の記事およびVTRを紹介する。		
	地域福祉論Ⅰ	これからの地域福祉において、社会福祉士は地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成を図る等、地域福祉の増進に働きかける役割等を適切に果たすことが求められるようになった。そこで地域福祉論Ⅰはまず地域福祉の基本的な考え方、新しい社会福祉システムとしての地域福祉の考え方や地域福祉の理念、地域福祉を担う主体の形成および公私協働の実践を学習する。		
	生活の中の介護福祉	介護を必要とする人の増加を背景に、介護および介護福祉に関連する様々な課題が問われている。それらの課題と関連させながら介護とは何かを考える。その上で介護援助の要素について学んでいく。介護および介護福祉の概念・理念から授業をスタートし、それらを踏まえて介護福祉サービスを提供するための基本的な考え方と技法を学ぶ。 本講義は、受講する学生が介護および介護福祉について、身近な事柄として関心をもって考えられることを目標とする。		
	高齢社会の街づくり	今日の人にやさしい福祉の街づくりについての国及び自治体の制度・政策について学ぶ。特に重要な公共的建築物の福祉環境整備調査項目については、大学のキャンパス内での事例の検証とバリアフリー・ユニバーサルデザインについての企業の考え方をグループで協同して調査・研究を行い、その成果をポスターにまとめて合同で発表する。また、住宅の福祉環境整備項目についてはホームワークとして各自がレポートを作成し提出する。		
社会と生活に関する科目群				

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
発展科目	社会と生活に関する科目群	社会教育概論	本講義は、社会教育の本質を学び社会教育主事として必要な知識を習得する。生涯学習社会における社会教育の立場と役割を学び、将来、教育委員会の社会教育行政や社会教育施設などへ就職していくための知識と技能を習得する。さらに、社会教育主事資格を取得するための必修科目であり、専門職としての知識を修得する。	
		社会教育計画	生涯学習社会の構築を目指し、地域の振興策を考える上で社会教育が重要な役割を担っている。社会教育を進める際の指針となるものが社会教育計画であり、その社会教育計画策定の基本的なことについて学ぶ。具体的な事例などを踏まえた講義と演習を取り入れながら学ぶ。	
		社会教育課題研究	生涯学習時代といわれる今日、多くの学びに取り組んでいるが、生涯学習と社会教育の立場や違いを整理し両者の役割と内容について具体的な事例などを交えながら学ぶ。さらに、生涯学習社会の実現のために社会教育が果たす役割について講義、演習を通じて学ぶ。	
		社会教育課題演習	教育行政における社会教育行政は、生涯学習を推進するためには欠かすことのできない重要な行政分野である。社会教育行政の専門的職員である社会教育主事は、社会教育を行う者に対する助言と指導が求められるため、その専門的な知識を学ぶ。講義と実践的な演習を行う。	
		社会教育施設論	社会教育施設が教育機関としての役割を果たすためには、「人」「物」「事業」等の機能の充実が求められている。本授業は、社会教育施設の目的や役割を学習するとともに、これからの施設の方向性と単なる場所としての施設ではなく、新しい学習空間としてのあり方を学ぶ。	
	文化と芸術に関する科目群	音楽概論	人間にとって感情表現手段の一つである「音楽」はどのように生まれ、どのように表現され、伝わるのか・・・。「音楽」の素材である「音」そのものや、音の組合せによって生まれる「旋律」「和声」「リズム」といった音楽の構成要素、さらには表現手段としての声や楽器の種類、構造と発音原理など、歴史の変遷を踏まえながら様々な角度から「音楽」を概観する。	
		音楽鑑賞法	音楽は記憶の芸術である。音楽の記憶は日常生活の場面と結びつく視覚につながるものが多く、音楽によって様々なシーンを連想させることもある。劇音楽やバレエ音楽は、まさにその効果を期待したものである。すべての音楽が直接情景を思い浮かべられる事を意図したものではないが、何らかの現象や情景を漠然と思い描かせるものである。名曲を鑑賞するとき、より深い理解と楽しみ方を得るために必要な知識と手段を作品の解説や作品の生まれた背景、演奏楽器の興味深い話を交えながら研究する。	
		音楽史	西洋音楽史の10講義は、現代の音楽にいたる道のりをバロック、古典派、ロマン派、近代等の時代を認識し、各時代の音楽の特徴と音楽が生まれた背景を踏まえてその時代の作曲家の作品にふれながら、その人となりに関するエピソードを交えて進めていく。さらに日本音楽史5講義においては、伝統音楽及びアジア民族の音楽を鑑賞しながら雅楽、三味線、尺八、箏などの音楽を中心に歌舞伎、能狂言、浄瑠璃などの舞台芸術を検証し、日本独自の音楽の歴史を認識する。 (オムニバス方式／全15回) (菅原／6回) 西洋音楽の起源、ルネッサンス～バロック、20世紀の音楽 (鈴木／4回) ピアノ音楽を中心に古典派、ロマン派～印象派、日本の音楽 (岡元／2回) 歌曲を中心にロマン派と日本の音楽 (千葉／3回) 管弦楽を中心にロマン派と日本の現代音楽、楽器の歴史	オムニバス
学部共通科目	学部共通科目	教育文化学	グローバル化と情報化が進み変動がすさまじい現代社会において、乳幼児から高齢者に至るあらゆる年齢層の人々が生き生きと豊かな生活を送るには何が求められるのであろうか。本講義では、教育学、芸術学、心理学の各専門領域から、人間生活の真の豊かさとは何かを考えつつ、人間の幸福につながる教育的な取り組みや、幅広く奥深い芸術の力、および、人間の幸福感につながる心理的理解について検討していく。 (浅尾秀樹／講義4回) 教育学の観点から、未来を担う子どもたちへの教育的かかわりや、地域生活における文化の継承について学ぶ。 (林 亨／講義4回) 芸術学の観点から、人間の精神生活を豊かにするアートの力について多面的に検討していく。 (風間雅江／講義4回) 人間の幸福感とは何か、どのような要因が幸福感に影響をおよぼすのか等について、心理学の観点から異文化を比較しながら検討していく。 (武邑光裕／講義3回) 文化芸術の多様な表現に代表される創造性を活かし、産業振興や地域の活性化などのまちづくりを進める創造都市について考える。	オムニバス
		芸術と心理学	本講義は心理学の視点から芸術全般について考えていくことを目的とする。特に「造形芸術」「言語芸術(文芸)」「音響芸術(音楽)」「総合芸術(舞台芸術、映像芸術)」など広い視点で芸術と心理学の関連を考えることを目的とする。担当教員はこれまでカウンセリングの技法として描画や箱庭などの表現療法を行ってきた。そのような悩みを抱えた人間の回復過程における「芸術・表現」の意味についても取り上げたい。	
		生涯学習論	当講義は、生涯学習の初心者を対象としている。生涯学習という言葉で提唱されたのは、1965年パリにおいて、ユネスコの成人部会長であったポール・ラングランによる。その背景、学習理念、目的、成り立ち、我が国への導入について基本的な理解をし、それが我が国の社会でどのように進展したのかを学習するのがこの講義の目標である。	

授業科目の概要				
(教育文化学部芸術学科)				
区科分目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目		生涯学習展開論	生涯学習とは人々が自由に自主的に学習活動を行うことである。その学習活動を支援するためには、人間の発達課題を理解することも必要である。乳幼児期から高齢期までの発達課題や学習課題を踏まえて、学習活動の展開・方法を教育行政の役割を通して学習する。 本講義における到達目標は、(1)人間の発達課題についての理解、(2)人々の発達課題に対応するための学習の展開・方法の理解、(3)様々な学習活動を展開するための行政の役割の理解、である。	
		メディアデザイン概論	さまざまな芸術分野で活用されているデジタル技術について、分野ごとに学習する。本科目では、メディアデザイン分野を学習する上での第一歩として、メディアとは何か、デザインとは何かについて学ぶ。メディアデザインの根底にある情報通信技術(ICT)とは何かを理解し、ICTの発展が今後デザインの世界にどのような影響を与えるのか考えられるようになることを目標とする。 (オムニバス方式 / 全15回) (浅井 貴也 / 8回) アート、デザインの視点からICTとメディアデザインの関係性について過去、現在、将来について事例をもとに学習する。 (松澤 衛 / 7回) 映像、3DCG、プログラミング等のメディアデザインの視点から、最先端技術がどのようにして社会において活用されているかを学習する。	オムニバス
		カウンセリング心理学	個人の心理的問題を解決するために、カウンセリングは主要な支援方法の1つとなっている。本講義では、カウンセリングとはどのようなことをするものか、カウンセラーとはどのようなことをする人なのか、カウンセラーと来談者(クライアント)とはどのようなコミュニケーションを行っているのか、また、その中でカウンセラーはどのような観点でクライアントの話を聴き、応答しているのか、など、臨床心理学におけるカウンセリングについて、基本的な知識を学ぶことを目的とする。	
		青少年学習コーチング論	青少年の学習活動は、学校教育が中心であるが、生涯学習が進んだ今日では、地域における生涯学習活動の一環であると捉えることも重要な視点である。特に昨今、青少年の健全な育成のために学校教育と地域社会の連携に注目が集まっている。本講義では、青少年心理学に通ずる学習を先に行い、その後、青少年を取り巻く環境の変化を知り、青少年に対する理解や支援のありかたを探ることを目的とする。	
		リカレント教育論	リカレント教育とは、成人が学習の場に戻りその後再び職業へ回帰することをいう。生涯学習の範疇であり、成人が学習する場合の重要な要素として位置づけられている。特に、ヨーロッパ諸国では、生涯学習が職業的な向上を目的として実施されてきたが、今日では、学習をしたことの満足感、達成感など精神的な面での効果も明らかになっている。本講義では、OECD、ILO、ユネスコなどの見解や条約なども勘案しながら、諸外国と日本におけるリカレント教育の類似点や相違点を探る。	
学科専門科目	基本科目	芸術理解		
		美術概論	「美術とは何か?」という根本的問いを主題として、現代の多様な美術・デザイン表現について、素材や手法・様式の面と主題や理念の面の両面から考察する。表現者としての自己の内面を掘り下げ、創作の思考を深め、表現力を養うための基盤を構築することを目標とする。また、様々な造形要素の今日的有り様を探りながら、映像のよる作品鑑賞を通して、鑑賞力の深化を図り、自己の表現活動へ反映させる方法を模索する。 (オムニバス方式/全15回) (林 亨/8回) 美術の種類やその概念、そして社会的役割などについて、主に近代から現代に至る美術の流れを概観しながら学ぶ。 (森井 綾/8回) 美術領域における素材や表現手法や様式の変化の歴史を踏まえ、デザイン分野から見た新しい表現方法の進化や、芸術全般の中での美術の位置づけや価値の変化について考察する。	オムニバス
		美術史	西洋と日本の美術史の流れを学びながら、当時の宗教や政治、経済など社会との関係の中で理解するとともに、美術作品を鑑賞する際の基本的な視点についても学ぶ。西洋美術は、ルネサンスから20世紀まで、日本美術は飛鳥時代から現代までの美術史を通してそれぞれの変遷を理解し、現代美術の多岐にわたる様相を考える手がかりを得ることが本講義の目的である。さらに、日本の伝統美術とアジアの美術の潮流を眺めながら、こうした展開を具体的な作品を取り上げて鑑賞しながら検証する。	
		美学	西洋におけるプラトン、アリストテレス、カント、シラー、バルト、リクール等、また中国と日本における画論、詩歌論、芸道論などを紹介を通じて、美と芸術に対する体系的な知識を講述する。またそうした思索力、記述力、鑑賞力が応用が可能かどうか、大学キャンパス内や札幌市内の美術館、ギャラリーに展示されている実作品を対象にして、検証する。	
		色彩計画	色々なジャンルのデザインや芸術作品を制作するにあたり、視覚的な要素の中で最も重要とされる「色彩」に関する基本的な知識を習得すると共に実践的な応用力の習得を目指す。各自の感性を正確に捉え、今後の造形センスに役立つ手法を学ぶ。色彩基礎の理解力向上と、各自の感性の確認共通尺度、共通言語の修得が目的である。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	芸術理解	ファッションデザイン概論	ファッションデザインは、形、色彩、素材、さらには作り方と着こなしがあり完成する。そして、そのデザインが歴史を作り変わり続ける。ファッションの持つ社会的役割が、どのように変化していったのかを検証し、ファッションをどのように生活の中で役立てていけば良いのかを考える。衣服とは何か？ファッションとは何か？デザインとは何か？おしゃれとは何か？自分らしさとは何か？を一緒に考える。 (オムニバス方式/全15回) (大信田静子/7回) 日常生活の中での衣服・ファッションとは何か？を考え、基礎的要素のデザインから入り、造形・色彩のセオリーを通して内面的・外面的な美しさを学ぶ。 (富田玲子/8回) 基礎デザインを踏まえ、情報と視覚、聴覚、臭覚、触角などから入る外部情報とを組み合わせ、新しいデザインの発想と展開を学ぶ。	オムニバス
		舞台芸術概論	最初に「演劇」とは何かについて、「俳優(役者)」、「戯曲」、「劇場」、「観客」の四つの視点から深く学ぶ。またそれを通して演劇に関わる専門用語を習得する。その上で、西洋及び日本の演劇史を学び、それを通して舞台芸術(演劇、オペラ、バレエ、能、歌舞伎、人形浄瑠璃等)とはどういうものかの基礎的知識を身につけるとともに、舞台芸術とはどういうものかについて考察していく。 (オムニバス方式/全15回) (村松幹男 7回) 演劇の4要素について学ぶ (飯塚優子 4回) 日本の演劇史を学ぶ (平井伸之 4回) 西洋の演劇史を学ぶ	オムニバス
		空間デザイン史	本講義は、日本建築史と西洋建築史さらに近代建築史について、各時代の主要な様式や技術を学ぶ。日本建築史では、海外からの様式や技術を取り入れながら独自の発展を遂げてきたことを述べる。また西洋建築史においては、各時代の宗教などさまざまな文化との関連性に触れつつ構法と造形の発展過程や表現などについて講義する。そして近代建築史では、著名な建築家と作品、くわえて作家活動の流れに関しても講ずる。まとめとして、世界の現代建築と近未来を展望する。	
	基本科目	ドローイングⅠ	「物を観て描く」とは、どういう意味を持つのか。様々な見方ができようが、単に「上手に再現する」という事だけでなく、言葉や会話と同じように自らの視覚や触覚(「表現」に至っては五感全て。)や様々な道具、素材を駆使した自己表現法、コミュニケーション法の1つとして捉えることができる。表現としての美術全般に通じるドローイングの演習を通して描画の重要な要素である明暗、形態、構造、バランス等を的確に把握し、洞察力、造形表現感覚の向上を図り、美的諸感覚を高める。ここでは、小型石膏像、人体モデルを使用し、木炭や鉛筆、コンテ等による描画材による演習からドローイングの基礎知識と基礎表現力の修得を目指す。	
		空間デザイン基礎	小住宅の建築設計・インテリアデザインを通して、建築やインテリアの空間を理解する。特に子どもからお年寄りまで、ライフスタイルの変化に対応できるバリアフリー・ユニバーサルデザインタイプの住宅を設計し、平面・立面・断面の製図を学び、さらに透視図やスタディー模型によりヒューマンスケール(人体寸法)感を身につけさせる。	
		服飾基礎実習	自ら、ファッションを作り出す楽しさや、「もの作り」の教育効果、児童生徒の手指の巧緻性の向上、高齢者の脳の活性化などの視点から、また衣料資源の有効利用としてのリフォームや高齢者や障害者にも着用しやすいユニバーサルファッションまで縫製技術が見直されている。ここでは、ベスト、スカートまたはパンツのいずれかをデザインし、パターンから縫製技術まで、時代に適応した被服製作を学び創造力と美的感性を磨く。	
		クリエイティブシンキング	あらゆる芸術活動の源となる創造的思考(クリエイティブ・シンキング)について学習する。個性あるアイデアの発見から発展までをビジュアルツールやプレゼンテーションを使って相手に伝える方法について考える。自由な発想を基点とした思考にフォーカスし、新たな価値や考え方を生み出すこととはどういうことなのか実践を通じて探求する。	
		インテリアデザイン	インテリアデザインを学習する上で必要な、基本的知識の修得を目的とする。内装材料・家具・建具等のインテリア計画、移動経路を示す動線計画、人体寸法を含む寸法計画、建物の大きさや部屋数を示す規模計画、浴室・キッチン・暖房・照明等の設備計画、換気・シック対策を含む室内環境計画を総合的に理解することを目的とする。	
		ユニバーサルデザイン	ユニバーサルデザインの理念を含む建築計画について学ぶ。具体的な建築事例などを見ながら、ユニバーサルデザインの視点から人間の行動や意識と空間との相互作用に関する建築計画について習得する。特に、国土交通省の取り組んでいるバリアフリー新法(高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律)の視点から建築計画を学ぶ。	
		テクニカルスケッチ	工芸・アート・グラフィック・ファッション・家具・インテリア・都市や住まいなど、我々の生活を豊かにするモノや製品、家具や空間など立体物の紙面による表現技法を学ぶ。クリエイティブデザインを行うために必須となる手描きスケッチの基礎を習得する。 (オムニバス方式 / 全15回) (林 亨/5回) ・フリーハンドで幾何学的な線を描く(線と形、四角い立体を描く、だ円を使った丸い立体)、線の種類と文字、幾何学的な装飾文様を描く (勝田信吾/5回) ・立体の表現(立体のスケッチとテクスチャ表現) ・分割を理解しモノを描く、プロダクツの表現 (小室晴陽/5回) ・描画図法テクニック(投影図法、三面図、アクソメ、アイソメ、パースペクティブ) ・インテリア空間の表現 ・製図のルール(JIS基礎の紹介)、三面図を読み空間をイメージする	オムニバス

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
基本 科目	情報 技術	デジタルイメージⅠ	コンピュータグラフィックスを学習するための第一歩として、画像処理・合成ソフトのスタンダードである「Photoshop（フォトショップ）」を用いて、画像処理や加工の基礎的な知識・技術を修得する。画像処理の技術を他メディアへの活用方法についても学習することで、様々な用途に対応できる基礎を築くことを目標とする。	
		デジタルデザインⅠ	主にAdobe Illustratorの使い方の基礎を学ぶ。ドローイング系のグラフィックアプリケーションを使用した作品制作を通じ、パソコンを使ったデザイン・画像制作の知識や技術習得を目指し、後期に学ぶデジタルデザインⅡやグラフィックデザインⅡ、その他の制作に繋がる第一段階となる。コンピュータグラフィックス制作の基礎を学ぶ事を通じ自らの創作活動に対する考察を広げるのが目標となる授業である。	
		ウェブデザインⅠ	インターネットやウェブデザインの基礎概念を通して、実際にウェブ用プログラミング言語であるHTMLとCSSを使ってウェブサイトを構築する。また、マルチメディアによるコンテンツ制作をコンセプト設計から開発に至るまでのプロセスを体験することで、ウェブデザインの持つインタラクティブ性とデジタルコンテンツ制作の基礎を学ぶ。	
		CAD設計	CAD（コンピュータによる支援設計）は、デザインの質と設計の効率を高める道具として幅広く使われている。本授業では、CADシステムの概要と基礎知識を理解し、CADによる設計製図の方法及び立体データの作成（モデリング）方法を演習課題を通じて習得していく。 (1) CADの目的とシステム構成について理解する。 (2) AutoCADまたはJwCADによる2次元CADの基本操作を習得する。 (3) SketchUpによる3次元空間のモデリング方法を習得する。	
		プログラミングによるCG	プログラミングの基礎となる各種アルゴリズムとデータ構造について説明する。また、プログラム言語を利用して基本的なアルゴリズムのコーディングをCGを作成することでグラフィカルに目で確認しながら学ぶ。アルゴリズムを考えたり、実際にプログラムを組んだりする事を通して、物事を論理的に思考する能力を養うことができる。「わからない」、「できない」とすぐ諦める事無く、粘り強く問題解決の道を探る能力も養う事を目的とする。	
	学 科 専 門 科 目	生涯学習と芸術	生涯学習の成り立ちや理念を復習した後、芸術学科に所属する者として芸術が生涯学習にどのように寄与するかを考察する。美術館、博物館、音楽ホール、劇場、文学館等の公共施設やNPO法人等における企画、立案、運営等のアートマネジメント、地域活動について学び、地域社会において生涯学習と芸術との関わりの現状について、理解を深める。 (オムニバス方式 / 全15回) (浅川泰 / 8回) 芸術のうち主に美術やデザインなどの分野について、生涯学習社会の中での有意な繋がり方を考察し、さらには、表現者のプロとして自立するための方法を学ぶ。 (大井恭 / 7回) 芸術のうち主に演劇やアートイベント関連などの分野について、生涯学習社会の中での有意な繋がり方を考察し、さらには、表現者のプロとして自立するための方法を学ぶ。	オムニバス
		学校教育と芸術	学校教育において芸術を通していかにかかわっていくことができるかかを考察する。教育機関である小学校、中学校に出向き、小学生、中学生を対象に芸術についての講義や講座をおこないコミュニケーションをはかり芸術に関する啓蒙活動を実践する方法を学ぶ。ここでは講座のひとつの題材としてクラフト制作によるシュミレーションを考察する。金属素材をモチーフに、小・中学生などにクラフトを教えるプロセスや、児童の発想力・創造性を伸ばす方法を考える。	
		博物館概論	近年、わが国では急速に情報化、国際化、高齢化が進み、それに伴って生涯学習が重視されるようになってきている。博物館はその生涯学習推進拠点の一つとして、多様化、高度化する人々の学習ニーズの高まりに応える必要があるとともに、学校教育を支援する役割がこれまで以上に求められている。博物館の専門職員である学芸員は、このような社会要請に応える力が必要とされている。学芸員任用資格取得のための必修科目の一つである本科目では、博物館の役割や学芸員の仕事について広く基本的な事柄について学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (中山 雅茂 / 8回) 主に博物館の歴史や今日的在り方と役割、さらに博物館における学芸員の仕事の具体的な内容について学ぶ。 (柴 勤 / 7回) 主に美術館の歴史や今日的在り方と役割、さらに美術館における学芸員の仕事の具体的な内容について学ぶ。	オムニバス
		博物館経営論	博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営（ミュージアムマネジメント）に関する基礎的能力を養うことを目的とする。到達目標 1)博物館の経営基盤を理解する 2)博物館の経営方法を理解する 3)博物館における連携について理解する (オムニバス方式 / 全15回) (柴 勤 / 7回) 主に美術館の管理・運営について理解し、さらに美術館における学芸員が館の経営にどのように関わっているかについて学ぶ。 (中山 雅茂 / 8回) 主に博物館の管理・運営について理解し、さらに博物館における学芸員が館の経営にどのように関わっているかについて学ぶ。	オムニバス

授業科目の概要					
(教育文化学部芸術学科)					
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 専 門 科 目	専 門 科 目	ア ー ト 教 育 ・ 文 化	博物館資料論	博物館・美術館などで扱う資料は、その施設の顔とも言える。「モノ」から「資料」へ醸成させるには、そのものが有する貴重な情報をいかにキャッチするか、そしてその情報をいかに地域へ還元するかが施設の使命である。受入れから活用までの一連の作業がなされて初めて「資料を活かす」と言える。「資料を活かす」とは、どのような専門的知見と技術、学芸員としてのスタンスが必要なのかを、博物館資料の概論から始まり収集、整理保管、公開などの一連の流れを押さえ、資料を通じた地域還元のありようについて学ぶ。	
			博物館資料保存論	博物館には、その博物館の性格にもよるが、多種多様な資料が収蔵されている。博物館に勤務する学芸員は、これらの資料の特性を把握した上で的確に取り扱わなくてはならない。この授業では、資料をいかに保存するかを実践を交えて学習する。また、資料は展示や生涯学習、調査研究などに活用するものであるから、だた保管庫に入れておくものではない。これらをどのように保管するのかも、あわせて学習する。	
			博物館展示論	博物館とはどのような施設を言うのであろうか。博物館展示はどのような役割を持ち、どの様に機能しているのであろうか。この授業では、展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する知識・技術を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う。博物館展示の意義を理解し博物館展示の実践について知り、展示メッセージを伝えるポイントを理解する。色んな展示解説活動の方法を知り、それぞれの展開目的のポイントを理解する。また簡単な製作実習を通して、参加型実習活動と展示活動との関わりを理解する。」 (オムニバス全15回) (細川正直／7回) 主に博物館と科学館などの展示内容について担当する。 (柴 勤／8回) 主に美術館等の展示内容について扱う担当する。	オムニバス
			博物館情報・メディア論	生涯学習社会ならびに高度情報化社会における博物館の役割について、博物館情報を焦点にして学ぶ。急速に進む情報化は、博物館の役割を拡大した。博物館は生涯学習推進拠点の一つとして、多様化、高度化する人々の学習ニーズの高まりに応える必要があるとともに、学校教育を支援する役割がこれまで以上に求められている。博物館が扱うべき情報について、その種類、管理方法等について学び、革新的に進歩する情報技術を駆使した、あるべき博物館の将来像について、考察することを目的とする。	
			博物館教育論	博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能をに関する基礎的能力を養う。博物館の歴史を概観し、その教育的意義を理解する。テーマ別の博物館の利用実態を把握し、その教育機能の意義を理解する。博物館の教育機能のあり方の実際についての技術を身につける。人々にとつての学びの意義と博物館の役割について理解すること、博物館教育の意義と理念について理解すること、博物館の利用とその学びの特性について理解すること、博物館教育の実践について理解する、博物館と学校教育の関係について理解することが目的である。	
			博物館実習	「博物館概論」、「博物館資料論」、「博物館経営と情報管理」といったいわゆる座学の講義において学んだ博物館に関する知識を実際に博物館へ出向き実務の体験・実習を通じて定着させる。また、実際に博物館・美術館に出向くいわゆる館務実習に先立って、学内において実習に必要な事柄と学芸員としての心構えなどを学ぶ。各講義で学んだ内容を実習を通して理解する、館務実習を通して博物館施設の役割を理解する、館務実習を通して学芸員の役割を理解することが目標である。	
			デザイン概論	デザインとは具体的にどのような意味・行為を指すか。この講義では現代社会でのデザインの意味をさまざまなジャンルの参考事例をもとに把握し、その概況と世界のデザイン史・工芸史を通して幅広くデザインに対する理解を深めることを目的とする。さらに現在のデザインをとりまく社会環境を考察し、デザインの役割とその可能性について学ぶ。	
			美術表現演習	これまで学んできた美術分野の絵画、グラフィックデザイン、彫刻についてのさらなる知識と技術の向上を目指す。絵画では表現方法を工夫して構想画に取り組み、自分の表現世界を本格的な大作として制作するための基盤を作る。グラフィックデザインにおいては、『私が見たい映画』や『北海道の自然や文化、特産品』をテーマとした訴求力のあるイラストやデザインを制作する。彫刻では制作の上での大切な要素のひとつの自然に対する理解力を高める。自然物である人体をモチーフとして塑造をおこない立体表現の力と感性の深化を図る。 (オムニバス方式 / 全15回) (林 亨／4回) 表現方法を工夫して構想画に取り組み、自分の表現世界を本格的な大作として制作するための基盤を作る。絵画制作実習の総まとめとする。 (森井 綾／4回) 全てオリジナルの素材を使ってイラストやデザインをB1サイズの大きさに構成する。 (永野 光一／7回) 人体塑造制作において、芯棒制作の方法、粘土、道具の使用方法、立体のものの見方、人体の構築等の修得を担当する。	オムニバス
			映像論	最近、インターネットを中心に映像を見る機会が多くなってきている。しかし、インターネット上の映像は、映像を学んだことがない人が作成していることも多くコミュニケーションツールとしての映像になっていないものも多い、映像を作成するものとして、まず、映画を通して作り手の意志を汲み取り映像を理解する方法を学ぶ。映像について、写真、映画を通して、分析し映像を読む力を身につけると同時に自ら映像で発信する時の表現方法の多様性について考えることを目的とする。	
			写真	デジタル一眼レフカメラを使用して、フィルムカメラとデジタルカメラを使用した写真についての違いや写真についての共通の基礎知識を学ぶ。普段、何気なく使っているデジタルカメラ、しかし、構造や仕組みを理解して使っている人は少ない。カメラの構造や、写真の仕組みを知ることで、よりイメージに合った写真を撮影が出来るようになることを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 専 門 科 目	ア ー ト 教 育 ・ 文 化 専 門 科 目	ファッションコーディネート	たえず変化するファッションは、その変化に対応しながら、それぞれの個性を尊重した着こなしが求められる。そのためには、すべての人々にとって、数あるアイテムをいかに組合せ、どのように演出するかが重要である。色、形、素材、アクセサリーの組合せや、体型や年齢に合わせたコーディネート知識、技術の基本を学び、さらにイメージ・ライフステージという視点から着こなし全体の総合美を追究することを目的とする。	
		ファッション文化論	日本の伝統衣装である和装(着物)と日本に定着した洋装について学びます。過去の歴史を正しく認識することが現状把握に繋がり、それが未来への創造と展望を可能にする。ここでは、時代の背景や生活意識、ライフスタイルの関連性を明らかにし、古代から現代モードまでの変遷について考える。私たちの現在の服装がどのように作られ、なぜ、私たちの身近にあり私たちが選んで着るようになったのかを念頭において考える。 (オムニバス方式 / 全15回) (大信田 静子/8回) 私達はいつから衣服を着るようになったのか？衣服文化に秘められた変遷を古代から戦前までのモードに学び、古き良き日本の伝統衣装着物についても触れていく。 (富田 玲子/7回) 第2次世界大戦後から現代モードまでの多彩で個性ある服飾の変遷と人々の思想、生き方、文化との関連性をとおして、多様な価値観を学ぶ。	オムニバス
		マンガ表現研究	マンガ独特の表現の解説を中心に、現代のマンガを取り巻く状況、マンガ発達の歴史、他のカルチャー(アニメーション、映画、フィギュア・プラモデルなど)との相互作用、海外での日本のマンガの評価の検証など行なう。学生との対話を軸に図版を多用し解説していく。マンガを廻る社会的な状況が多様である事を理解する、日本人の伝統的なものの見方・捉え方が現代のマンガを形作っている事を理解する、マンガ独特の表現を学び、自分の表現に使用できるようになる、マンガ制作の流れを理解することが授業の目的である。	
		舞台芸術各論	舞台芸術の各論の中から、「演出論」、「舞台美術論」、「コミュニティ・アート論(アートアートマネジメント)」についてオムニバスで学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (村松 幹男/5回) 「演出論」では、劇つくりと演出についての理解を深める。 (福田 恭一/5回) 「舞台美術論」では、上演作品における舞台美術の役割と舞台美術におけるスタッフワークについて学ぶ。 (飯塚 優子/5回) 「コミュニティ・アート論」では、社会の抱える問題の解決に関して、アートの果たすことのできる役割について考察する。	オムニバス
		戯曲研究	まず戦後の日本の劇作家(及び劇団)の系譜を概観する。次に、多くの戯曲を読む。演劇を上演するためにはテキスト読解しなければならず、その能力を養うためには日本や外国の戯曲をたくさん読みこなす必要がある。また、読むことを通して戯曲と上演の関係を学んでいく。その上で小説とは異なる戯曲の特徴を理解し「テーマ」、「ストーリー」、「プロット」、「ムード」などについて考察する。なお、実際に小作品を書くことも行う。	
		生活材料学	建築材料の性質を知り、その材料規格と仕様規定を学ぶ。建築の基本材料としての金属材料、無機質材料及び有機質材料の性質と用途について。特に建築物の骨組の主要材料であるコンクリートについては、製造実習を通して学ぶ。また性能別材料としての防水材料、断熱材料、吸音・遮音材料及び防火材料、部位別材料としての屋根材料、壁材料、天井材料、床材料及び開口部材料についての基本的事項を学ぶ。適宜、参考資料の解説を行い建材標本や関連メーカー資料を提示して授業を進める。	
		都市と空間の法規	建築基準法の基礎を学び、基本的な条文を理解することを目的とします。そのために法令の構成、法令集の読み方、設問の解き方などについて小テストを交えて授業を進めます。	
		住宅と空間の生産	建築基準法の基礎を学び、基本的な条文を理解することを目的とする。そのため法令の構成、法令集の読み方、建築用語の定義、単体規定と集団規定、建築確認申請、一般構造、用途地域、容積率、建ぺい率、面積・高さの算定、居室の採光及び換気、防火地域及び準防火地域、内装制限、バリアフリー新法等について学ぶことを目的とする。	
	平 面 表 現	ドローイングⅡ	住空間を理解するため、建築の施工・積算について基本的な知識を学ぶ。併せてモデルハウスや建築現場の見学を実施し、体験を通して理解を深める。特にハウスメーカーの特徴や価格を事前に調査学習した上で見学を行う。木造建築及び、鉄筋コンクリート造の現場見学では施工に関する基礎知識や積算方法を予習し現場見学を行うことにより深く修得させる。	
		絵画Ⅰ	ドローイングの諸要素の再確認をした上で更に表現要素としての動勢や量感、材質感、空間感等を加え、高次元な平面表現を求めるとともに、自己の表現上の傾向を認識し新たな視点や表現を探り、試行する。対象物としての中型石膏像や人体モデルの積極的な観察から、的確な再現へ、更に本質に迫る表現へと段階を追った考察、工夫、制作を通して、事物の把握・視覚の立体化、触覚の具現化、人体においては内面や精神性の追求と形態の理解を深化させる事をねらいとする。	

授 業 科 目 の 概 要					
(教育文化学部芸術学科)					
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 専 門 科 目	専 門 科 目	平 面 表 現	絵画Ⅱ	この演習は、絵画表現の基本構造を知るために、描画材で最も融通が利き、数多くの表現技法が可能な油彩画(油絵)制作を通して、その基本的な性質を知り、初歩的な使い方の修得を目的とする。グリザイユ技法及びカマイユ技法とグレージングを基本にし、厚塗り技法も体験しながら、油絵の具の独特の発色を理解し、豊かな色彩表現に繋げていくようにする。モチーフは静物画、後半は自画像を制作する。また完成した作品を受講者で鑑賞し合い、講評会も実施する。到達目標は、１．油絵の具の基本的な性質を理解する。２．油彩画の初歩的な技法を習得する。３．絵画表現のおもしろさを感じ、自分なりの表現世界を考えるきっかけをつくる。	
			絵画Ⅲ	この演習では「絵画Ⅰ・Ⅱ」で学んだ知識や技術を駆使にして、自ら表現方法を工夫して人物画および構画画に取り組み、自分の表現世界を本格的な大作として制作するための基盤を作る。絵画制作実習のまとめとして行い、専門的な制作研究をする3年次の専門演習(ゼミ)への足がかりを作るための制作演習を実施する。そのために基本的な事項を学び、それを試しながらじっくりとしたペースで密度の濃い作品を制作する。また、絵画制作に必要な写真などの映像メディア表現も学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (八子 直子／8回) モデルを使った人物画制作を通じて、構成法、パース、基本的な造形要素、さらにそれらをいかに油彩技法の特性と結びつけて表現するか学ぶ。 (井桁 雅臣／8回) 構画画制作を通じて、テーマ設定法やその構成法、そして質感表現や細部と全体のバランスを考慮した表現などを学ぶ。	オムニバス
			版画	「版とは何かを知る」を到達目標とし、比較的新しい表現方法であり、製品化し易い孔版を学ぶことで、版の可能性と表現の可能性を学ぶ。制作作品を具体的に使えるものとする。ことで、版画の身近さを感じ取ると。版というフィルターを通してことによって客観的な目を養い、自身の表現の幅を広げる。凸版、凹版、平版、孔版の四版式を理解し、印刷と版画の基礎を学ぶ。孔版(ステンシル・シルクスクリーン)での作品制作をおこない版画の知識と技術を修得する。	
			グラフィックデザインⅠ	グラフィックデザインを学ぶにあたりそのデザイン制作には平面基礎造形の訓練の反復が不可欠である。ここではデザイン用具の正しい使い方を学び、同時に視覚造形の表現領域の拡大を目指す。デザイン用具が正しい方法で使いこなすことができる、デザイン作業が的確に行える基礎技術が習得できている、目的に応じたイメージを的確に視覚化できることが到達目標である。	
			グラフィックデザインⅡ	グラフィックデザインⅠで学んだ基礎的な造形感覚を更に発展させるための様々な演習を行う。例えば、個性的なグラフィックデザイン表現を確立するため、数理性を基礎とした、デザインの在り方を、考察し作成する。また、豊かな表現力を習得するために自然物の観察を通したオーガニックなデザイン表現など課題の制作を通してより高度な表現力の獲得を目指す。空間を無駄なく合理的に分割・構成する方法を学ぶ、豊かな表現力を習得するために幾何学図形を用いたジオメトリックイリュージョン(錯視・錯覚)をデザインすることが目的である。	
			グラフィックデザインⅢ	この授業では、デザインに必要なコンセプト思考や事前リサーチの大切さについて学習する。また、グラフィックデザインの様々な要素(形、色、模様、フォントなど)の効果的な使い方について、ポスターやパッケージデザインなどを通して実践する。作品制作における創造的思考を習得する事、そして様々な作品制作を通して新しい表現に挑戦することができるようになることが目標である。	
			デジタルイメージⅡ	「デジタルイメージⅠ」において修得したフォトショップの基礎をもとに、デジタル画像の理論や色彩についての知識を学習する。また、イラストレーターと連動した作品制作のプロセスを理解し、実践的な活用方法を学習する。フォトショップを機械的に使用するのではなく、自身のアイデアを表現するための表現方法を模索することを目標とする。	
			デジタルイメージⅢ	「デジタルイメージⅠ・Ⅱ」で学習した内容の発展形として、フォトショップによる画像処理や合成、フィルター機能を中心に、デジタルゆえに可能な様々な表現技法の可能性を探索する。また、素材となる写真画像の準備をはじめとする作品制作に重きを置き、テーマを具現化するための表現手法、自己表現について制作を通して考える。	
			デジタルデザインⅡ	「デジタルデザインⅠ」で修得したイラストレーターの基礎をもとに、CI(コーポレート・アイデンティティ)、パッケージング、書籍のレイアウトデザインなどの商業デザインにおける様々な題材を取り上げて、イラストレーターの応用法を学習する。また、フォトショップとの連携による画像の使用、印刷技術についても学ぶ。	
			デジタルデザインⅢ	アートディレクションを念頭におき、DTP(デスクトップ・パブリッシング)におけるデザインングについて学習する。企画から制作、印刷までの一貫したデザインのプロセスを学ぶことで、デザインリサーチやコンセプト固め、ブランディング、色彩計画などを重視し、DTPにおける総合的な制作手法を修得することを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	平 面 表 現	デジタルビデオ編集	ジャンルを問わず、創作活動を行なう際には必ずどのような作品を作りたいのか自発的に考えなければならないのだが、特に映像作品の制作では共同制作で作られる事、時間や資金などの制限も大きく影響してくることから、作業は積極的かつ計画的に行なわなければならない。よって、映像制作を通し、個人的に身につける技術の習得はもちろん、自発的な創造力・計画性・協調性等の必要性を再認識することを学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (伊藤 隆介／8回) 映画につながる技術は19世紀後半から、多くの人々によって研究されてきたが、それらの映画やアニメーションの歴史を振り返りながら、発達して来た技術とともに映像表現の幅も広がって来た事を学びながら、新しい映像表現の可能性について考える授業である。 (森井 綾／7回) これまでに学んだ映像表現の様々な手法を生かしながら、実際にビデオ撮影を行い、パソコンに取り込んで編集し一つの作品として完成させる事を目指す。	オムニバス
		ウェブデザインⅡ	「ウェブデザインⅠ」において修得したウェブデザインの基礎をもとに、ウェブコンテンツを受容するユーザーの視点に立ったコンテンツ制作をユーザビリティ、ユーザエクスペリエンスを中心に学習する。また、今後もウェブコンテンツクリエイションにおいて注目される技術についても注目し、特にスマートフォンやタブレット端末用コンテンツ開発を中心に制作する。	
		ファッション画	身体や服全体のフォルム、身体の各部位やポーズの取り方による表現の変化、素材表現やカラーコーディネート、柄の描き方を学ぶ。各々から開催されるファッションコンテストに応募するための作品を描けるようになることが目的の一つである。パターンを作る為のデザイン画だけでなく、アパレル企業の活動の中で使えるレベルのハンガーイラスト（平絵型）や、販売促進物やプレゼンテーションのためのイラストを描ける様になる事を目指す。	
		テキスタイルデザイン	テキスタイルとは、織物、染物、編物などの布地のことである。洋服、インテリア、ファッション雑貨など私達の生活には様々な「布」が息づいている。その布地を製作する上で、素材を知り「織り」「染め」「編み」など様々な手法を取り入れデザインしていくことを目的とする。基礎的な手織りから入り、応用作品として服飾やインテリアなどのデザインを考え、織り、染め、編み、フェルトなどの手法から豊かな創造力や感性を育み学ぶ。	
		パターンメイキング	立体である人体を平面上のパターンに作成するため、人体をバランスという側面から考えながら平面作図を学ぶ。洋服を構成する各パーツ（前身頃、後ろ身頃、衿、袖など）の表地パーツの作成、裏地・芯地パーツの作成、縫い代の作成などの設計を学ぶ。同時にコンピュータで作図を行うことができるアパレルCADの操作もマスターすることで、より理解が深まる。	
		インテリア設計Ⅰ	インテリア設計製図の基本的な知識と設計プロセス、設計図面・作成手法について設計課題を通し学ぶ。主に商業施設や住宅等の設計演習を行うことにより、インテリア設計を修得する。特に平面計画のプランニング、立体的なスケッチや模型による空間の把握、配置図、平面図、立面図、断面図、展開図、透視図法、図面着色表現を行う。	
	立 体 表 現	彫刻Ⅰ	彫刻は立体の芸術であり、視点を移動させながら眼で触れることのできる表現であることから「触覚の芸術」ともいわれている。彫刻で主に使用される素材は石、木、土、鉄など長い年月をかけて自然が生成したものである。本学科の彫刻の授業は卒業までに素材に親しみながら徐々に理解が深まるよう展開していく。本科目では石と鉄を用い彫刻の基礎知識と基礎技術を学び、生命感のある作品を制作する。	
		彫刻Ⅱ	本科目では対象物を観察し生命力・内面性を理解し、形態を把握する基礎的な造形能力を高める。多くの彫刻家が原型制作のため用いてきた自然物である土(粘土)を使用し、塑造(模刻)をおこなうことによってモデリングのプロセスを体験する。また粘土原型を彫刻の基本素材である石膏に変換させる石膏取りについて学ぶ。	
		彫刻Ⅲ	立体表現として日本では古くから信仰などと結びつきつづ行われてきた方法として木彫があげられるが、近・現代の美術表現の中で、少しずつ意味や役割を変えながらも、根強く盛んに続けられている表現でもある。ここでは、靴などの身近な物をモチーフに木彫の制作を行い、三次元表現の現在を体験し、そこから今後の様々な表現に応用できる造形感覚を養い高める事をねらいとする。	
		陶芸Ⅰ	陶芸制作の基礎的な知識と技術を修得する。土練り（菊練り）をおこない、初歩の工程として手回しロクロを使用し、手ひねりで形を整え、水びきなどを繰り返しておこなう。中鉢や筒花びんを制作しながら 手ひねり、板作り、化粧掛け、掘り出し法、高台の作り方など、陶芸の基本的な制作方法を修得する。また制作する為の道具の名称、使い方、選び方等を学ぶ。	
		陶芸Ⅱ	電動ロクロによる陶芸の知識および技法を学ぶ。特に基本となる粘土の芯出しを十分に体得することをねらいとする。小鉢などの小さなものからはじめ湯呑、茶碗など徐々に大きな作品を制作していく。後半には、複数作品の大きさを同サイズに揃えられるように技術を高める。釉掛けの応用として、釉薬の濃度を変え、コンプレッサーによるスプレー掛けで濃淡をつけたりすることを学ぶ。	
		木材工芸	木彫制作の基礎的な知識と技術を修得する。木の種類や木材の特性を理解し、木目や木肌の温かみなどを観察して用途に応じた形態を考察し、作品を美しく仕上げることを学ぶ。木彫用のノミ、小刀などの各種手道具や電動工具の安全な使用方法と手入れの仕方を学ぶ。制作を通して木材加工の種類や加工技術についての基礎的な知識を身につける。	

授業科目の概要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	立 体 表 現	舞台衣装Ⅰ	舞台芸術定期公演（５月）に合わせて舞台衣装を製作する。台本を読み、ストーリーを理解し、時代背景および衣装についての特徴をとらえる。また、実践的な授業として衣装デザイン画を描き、ステージや映像の効果を最大限引き出すことを念頭に入れて、色彩、形、素材を決める。その過程の中で、幅広い感性と感覚を磨く。	
		舞台衣装Ⅱ	舞台芸術定期公演（１月）に合わせて舞台衣装を製作する。台本を読み、ストーリーを理解し、時代背景および衣装についての特徴をとらえる。また、実践的な授業として衣装デザイン画を描き、ステージや映像の効果を最大限引き出すことを念頭に入れて、色彩、形、素材を決める。その過程の中で、幅広い感性と感覚を磨く。	
		服飾造形実習	服飾基礎実習で学んできた基礎的な事にプラス・アルファしながら、ドレス製作をしていく。広義では体を覆う衣服、服装の総称をいい男女両方に使われる。イブニング・ドレス（燕尾服）、フル・ドレス（正装）、モーニング・ドレス（モーニング）などドレスの種類は多く、目的、形、素材、時間、季節などによって区別される。ドレスと言うと華やかさ、豪華さをイメージするが、そこには各個性や体型を考慮したシルエットなど、人としていかに美しく装うのかを追求した作品作りをしていく。	
		建築空間のしくみ	人々が生活していく上で生涯にわたって建築空間は、安全かつ快適なシェルターでなければならない。本授業は、建築の様々な構造システムについて、その基本的特徴と骨組を構成する主要な建築材料についての特徴を学ぶ。特に建築構造模型により、生活空間の最も身近な住宅建築の木質系構法として普及している「在来軸組構法」と「桢組壁構法」、鉄筋コンクリート造、鉄骨造について学び、建築物を構成する部材の名称と役割等を模型制作を通じて理解を深める。	
		空間模型演習	インテリア・建築模型は、その視覚的な分かりやすさから設計過程のさまざまな段階で活用され、それぞれの目的に合わせた模型表現の方法や製作手法がある。空間造形や発想を手助けするためのエスキス模型、大きさを比較検討するためのボリューム模型、設計の考え方を伝えるコンセプト模型、縮尺の大きなインテリア模型、完成イメージを伝えるフィニッシュ模型、納まりや質感を捉えるためのモックアップ（実物大模型）など種々ある。本授業を通じてそれらの特徴を理解し製作技術を身につける。 （１）建築模型の目的と種類、表現手法を知る。 （２）インテリア・建築模型製作の基本技術を習得する。 （３）インテリア・建築模型の制作を通じて、空間造形のおもしろさを感じるとともに、寸法感覚や機能評価の基礎を身につける。	
		創作テキスタイル	テキスタイルデザインの表現には伝統工芸的な一品生産から、工業デザインの大量生産まで幅広い世界である。その幅広い視野を持ちつつ、テキスタイルデザインで学んだ基礎的な事も踏まえて、創作的な作品作りを目的とする。。化学繊維の素材と天然素材を組み合わせたり、着物地や羊毛、色々な糸などを使い造形的な作品（ファイバー・アート）や創作的なファッション（アート・ウェア）など自由な発想から作品を通して自分を表現することを学ぶ。	
		３Ｄモーショングラフィックス	コンピュータを使用したアニメーションの基礎から、文字、写真、映像、３次元CGを使ったアニメーションの一連の作業を通してモーショングラフィックスの基礎を学ぶ。企画を考え、シナリオを作り、絵コンテを描き、映像作成する上で必要な要素を自分で作成し、コンピュータに取り入れ、構成し映像を自由に作成することを目的とする。	
		３ＤグラフィックスⅠ	3Dグラフィックスの基礎からモデリング、テクスチャー、ライティング、カメラワーク、レンダリングという一連の作業を通して、3Dグラフィックスの基礎を学ぶ。3Dグラフィックスは、難しいというイメージを持たれている、逆に言えば、頑張れば将来の夢につながる可能性を秘めている。自分で作りたいものを自由に作るための基礎を習得することを目的とする。	
	３ＤグラフィックスⅡ	キーフレームアニメーション、キャラクターアニメーションを始めとした3次元CGにおけるアニメーションの方法について学ぶ。物体、カメラ、ライト等のアニメーションの方法から、キャラクターの動作付け、モーションキャプチャーを使用したアニメーションの方法を習得し、3次元CGアニメーションを自在に作成出来ることを目的とする。		
	空 間 ・ 身 体 表 現	サウンドデザイン	コンピューターを使用し実際に音を創り上げることで、どのような編成の楽曲編作においても直接的な効果と結果を理解することができ、音作りを通して、想像力の育成と表現探求の幅を広げる。基礎的な音楽知識（作曲を含む）やスコア・ライティングについて習得し、電子音楽の知識や音楽ソフトウェアの操作技術の向上を目標とする。	
		トータルビューティ	美に関する技術や知識をトータルに高めていくことにより感性が磨かれる。ここでは、トータルビューティに関する基礎知識と技術のテクニックを学び、カラーコーディネートによって、自分の似合う色、似合うイメージ、さらには、見せたいイメージをメイクにより表現することを学ぶ。また就職活動などTPOに合わせた、ヘアメイク、服装、マナーについても学ぶ。	
		バックステージ研究Ⅰ	照明・音響を中心に、舞台美術・メイクも含めて演劇におけるバックステージ分野の知識・技能を深める。前半は、春の3年目公演と連動させ、プラン図やキューシートの作成などを行い、実際の公演との比較を通して学ぶ。後半は、春の3年目公演の反省を踏まえ、別の作品の具体的なプランニングを通して、照明・音響を中心に、舞台美術・メイク等に関する実践力を高めていく。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	空 間 ・ 身 体 表 現	バックステージ研究Ⅱ	バックステージ研究Ⅱを受けて、照明・音響を中心に、舞台美術・メイクも含めて演劇におけるバックステージ分野の知識・技能をより深めていく。前半は、秋の3年目公演と連動させ、Ⅰと同様にプラン図やキューシートの作成などを行い、実際の公演との比較を通して学ぶ。後半は、春の3年目公演の反省を踏まえ、2年目定期公演などの作品の具体的なプランニングを通して、実践力を高めていく。	
		俳優論	講義の最初の7・8回目までは様々な俳優論について文献を通して調べ、俳優論に関する知識を深めると同時に、演じるとはどういうことなのかを考えていく。残りの後半では、既成の台本の一部を覚え、実際に演じてみる。その演技のダメ出しを通して、演じると言うことはどういうことかを学んでいく。なお、授業の30分ぐらいを利用してリラクゼーションやインプロヴィゼーションも行う。	
		舞踊専門研究	舞踊の基本動作を学びながら、自分の体の動きを理解して行く。そのうえで、身体を使ったコミュニケーションについて考察する。舞台発表を考慮した場合の空間・明かり・音・衣装・メイクとの関連性や有効性を学ぶ。最後のまとめとして、実際に舞踊(広い意味での動きや表現を含む)を照明・音響・衣装・メイクを取り入れた形で総合的な舞台発表として行い、発表を通してコミュニケーション能力も養う。	
		リビングデザイン論	建築作品やインテリア作品は、単なる住まい手のニーズだけではなく、技術・経済性・気候・風土・習慣など、さまざまな条件の結果として造りだされる。本授業では、建築空間・形態デザインと各種条件との関わりについて実際の作品を通じて学ぶ。また、寸法・規模計画の基本と住居空間の計画手法について、独立住宅を中心に解説する。 (1) 建築作品の特質の読み取り方の一端を身につける。 (2) 独立住宅の寸法・規模計画の基本及び住宅の平面計画手法を学ぶ。	
		住宅設計演習	建築専門科目を総合化し、建築構想・計画・設計のプロセスを踏まえて、人間生活で最も基本となる住環境の設計を行う。主として動線計画・内部空間構成に焦点をあてながら、気候風土条件に対応した、戸建て住宅、集合住宅住戸の計画・設計を行うための能力を演習を通じて習得する。 (1) 建築設計の流れを知り、読図と作図に関する基礎技術を習得する。 (2) 各種演習を通じて、空間デザインのおもしろさ・楽しさを体感し、建築設計が技術的要素と美的・芸術的要素の統合であることを学ぶ。	
		構造のかたちと力	本講義は、建築構造および力学との関連を基礎的知識として、建築物がかたちとして成立する基本理論について学ぶ。具体的には構造と外力を受けた部材の力の伝達、変形、応力などの考え方について、具体的事例の提示と解説を通して理解を目指す。特に合成・分解・釣合、構造物に作用する外力と応力、静定構造物、不静定構造物等について修得する。	
		空間設備	本講義は建築環境工学の科目として、建築設備について学ぶ。建築物内部において人間が安全且つ快適に生活し、機能的に行動する際に求められる建築環境に関する諸条件を整理し、それらに対応するための各種設備機器の種類、設備計画、設定手法を学ぶ。特に空気調和設備、電気設備、照明設備、消火・防災設備、給水設備等について修得する。	
		生活環境	快適な住空間を形づくるために必要な環境工学の基本について学ぶ。自然環境を利用・制御して安全で快適な居住空間を得るための知識と技術の基本を習得する。建築分野における光、音、熱、空気などの環境要素との関係について学ぶ。光・熱・空気・音の記述方法・計測方法、及び算出方法等についても修得し、建築空間におけるそれら要素について理解を深める。	
	発 想 ・ 企 画 ・ プ レ ゼ ン テ ー シ ョ ン	3次元造形演習	石膏や木を使用して実際に立体物を自分で作り、作成した立体物を3次元CGを使ってコンピュータ上で表現する。さらに身近になりつつある立体プリンタを使用することで、コンピュータでの造形と実際自分で作成することの違いを学ぶ。また同一のテーマを異なる媒体で表現することにより立体把握、空間の認識、テクスチャー表現等の能力の伸展を図る。この授業では手作業とコンピュータでの作業の違いを理解し、自分のアイディアの表現を広げることを目的とする。 (オムニバス方式 / 全15回) (永野 光一/5回) ドローイングにより構想した形体を塑造し石膏に変換方法や木彫での立体物制作を担当する。 (松澤衛 10回) コンピュータを通した立体表現と立体プリンタを使つての方法を担当する。	オムニバス
		デジタルコンテンツ制作	メディアデザイン分野における平面、立体、映像、写真、プログラミング、ウェブの知識・技術を総合的に活用し、プロジェクト形式の制作を共同でおこなう。(テーマは年度によって異なります)複数の媒体を融合したメディアデザインの強みを活かして、それぞれの視点からデザインのアプローチを考えることにより、総合的な作品をプロデュースするまでの工程を体験、修得する。	
		ブランディングデザイン論	現在の大量消費社会では、至るところで商業デザインが重視されている。全ての物には、他とは違う価値や考え方がブランディングにより生み出されている。この科目では、ブランドとは何か、ブランド創出までのプロセスを通して、完成されたモノに新たな価値を生み出すことはどういうことなのかを探索する。また、マーケティングを通してブランドがどのような戦略を持って我々の社会で展開しているのかを事例をもとに読み解く。	
		プレゼンテーションデザイン	あらゆる場面において、自分のアイデアやストーリーを不特定多数の人へ伝えるためのプレゼンテーションが重用視されている。本科目は、プレゼンテーションを対話の手段として、話術、ディレクション、スライドのデザイン等の知識・技能について学習する。実際に様々なスタイルのプレゼンテーションを経験しながら修得する。	

授業科目の概要					
(教育文化学部芸術学科)					
区科分目		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目	専門科目	発想・企画・プレゼンテーション	ディスプレイデザイン	ファッションアドバイザーの業務の一つに商品ディスプレイがある。ディスプレイ計画を立てるにあたっては、人々の関心事なども考慮し、広い視野に立つて検討する必要がある。そのために、商品のセールスポイントを強調したり、販売促進を図るため、魅力的に視覚的にアピールするための表現方法を学ぶ。ここでは季節や行事、トレンド等からプレゼンテーションしたいテーマを想定し、マネキンやトルソー、テーブルなどを用い、本学のウィンドウに構成する。	
			インテリア設計Ⅱ	インテリア設計演習を通して、インテリア・建築の構想・計画・設計のプロセスを踏まえて、人間生活で最も基本となる住居空間の計画・設計を行う。内部空間の機能性・快適性はもとより、外部空間・景観計画・空間造形についても焦点をあてながら、気候風土条件に対応した、戸建て住宅、集合住宅、さらにコミュニティ施設などの計画・設計を行う。	
			店舗デザイン	飲食店、販売店などの業務を行うオフィスやショッピングセンター等の商業施設について、建築計画の基本的な考え方、手法にもとづき、具体的に計画・設計する方法を、設計演習を通じて習得する。具体的には設計条件の整理、コンセプト、機能図・規模計画、エスキス、平面図、展開図、インテリア模型の制作又は透視図、発表・講評を行う。	
			舞台制作論	舞台制作について学ぶ。舞台装置や照明、音響、衣装、特殊効果等々の舞台上演にかかる費用とチケット販売や広告収入、補助金などの収入についての知識を学ぶ。そのうえで、マーケティングと台本の選定、会場の手配、人（スタッフ・キャスト）の手配、チケットの発売、宣伝の仕方（フライヤー、WEB・SNS・マスメディアの利用）などを具体的に学んでいく。また、著作権についての最低限の知識も身に付ける。	
			演劇と映画	演劇と映画の単純な違い（ライブ、記録）、物理的な制約、脚本の違い、演劇、映画それぞれの表現上の優位性などを学びます。似て非なるものである演劇と映画を一つの題材（十二人の怒れる男等）を通して、演劇と映画両方が存在する作品を分解しながら両者の違いを理解し、実際に短い演劇と映画を作成することを目的とする。 （オムニバス方式 / 全15回） （村松 幹男／7回） 演劇についての解説をおこなう。また演劇制作についての指導をおこなう。 （松澤 衛／8回） 映画についての解説をおこなう。また映画制作についての指導をおこなう。	オムニバス
			ステージ総合実習	造形実習で制作した作品の総まとめとしての研究発表をショー形式で実施する。自作自演によるファッションショーの企画、構成、振付、音楽、照明などをプランニングし、創ること、着こなすこと、表現することを持続させるパワフル感を育成する。このように、ショーを作り上げるまでのプロセスを学びながら、コミュニケーション能力を身につける。	
	応用実践科目	総合・統合	地域と芸術	芸術を学ぶことによって得る創造力とコミュニケーション能力が、より豊かな人生を送る“力”となると考える。その“力”を生涯学習社会に役立て、幅広い世代の人々が豊かな人生を送ることをサポートし、地域の活性化に貢献することができることについて学習する。自ら学ぶ芸術分野と自らが居住する地域との関係に関心を持ち、どのような貢献ができるかを考察する。	
			ポートフォリオ制作Ⅰ	これまで1年次から現在に至るまでに制作してきた数々の作品や、これまでに参加した学内外の活動をポートフォリオ（作品集）制作によって記録する。本科目では、このポートフォリオの制作に焦点を当て、これまでの学びを振り返り、今後の学習に対する総括をおこない、今後の制作活動や就職活動において活用できるツールの制作を目標とする。	
			ポートフォリオ制作Ⅱ	「ポートフォリオ制作Ⅰ」をもとに、これまでの芸術制作活動における自身の個性（哲学や表現手法など）をポートフォリオを使って体現化させることを目標とする。コンセプト、デザイン、製本までを手作業でおこない、世界に1冊しかないポートフォリオの完成を目指す。特にクリエイティブ業界志向の学生を対象とし、専門とする分野におけるポートフォリオとして相応しい1冊を制作する。	
			就業力実践演習	残り半年で内定を得るための実践演習講座である。まずは、どのようなキャリアで自分の人生を歩みたいかをまとめ（目標の設定）、次に就業力に関する自己分析・自己評価を行ったうえで、残り半年のアクションプランを設定する。プランを実行に移しつつ、毎時間ごとに実行結果の評価をおこない（フィードバック）、プランを修正し、再び実行していくことを繰り返す。SPI・面接対策、先輩の体験談やコンサルタントの講話なども行う。	
			専門演習Ⅰ	1年次、2年次で学習した基礎知識をもとに、美術、メディアデザイン、インテリア建築、服飾美術、舞台芸術に関連する専門分野を、それぞれのゼミナールで教員と学生とが協力して運営し、実践を交えながら学習を深める。 （林 亨） 2年次までに学習した美術表現の基礎的な知識や技能を基礎として、絵画表現演習を通して、美術表現をより深く学習し、独自性のある作品制作力を向上させることを目標とする。 （森井 綾） 1年次から磨いてきたグラフィックデザインの基礎知識、ならびにドローイングや絵画・彫刻などの授業で身に付けた色彩、平面、立体の構成能力、さらに様々なメディアにおける視覚効果以外のものを含めた表現方法をもとに、ゼミナール形式で教員と学生とが相談し合いながら具体的なテーマを決め、その設定された目的に向かって制作を行う。	

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部芸術学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称		講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	応 用 実 践 科 目	総 合 ・ 統 合	専門演習Ⅰ (永野 光一、藤本 和彦) 現代彫刻についての考察と研究をおこなう。彫刻作品の制作を通して豊かな表現能力を身につけ、高度な技術を修得し彫刻の新しい可能性を探る。(永野光一／5回) 人体塑造制作を担当する。(藤本和彦／10回) アルミやブロンズの鑄造作品制作を担当する。 (浅井 貴也) 1、2年次で学習したデジタルデザインの基礎を発展させ、特にDTP(デスクトップ・パブリック)とウェブコンテンツ制作等の平面デザインの分野における作品制作を学習する。アイデアからコンセプト決定、制作、完成までの一連の工程を経験することで、デザイナーとして実社会で活動するために必要となる知識や技術の修得する。 (松澤 衛) コンピュータを使った様々は表現技術を学ぶ。3Dグラフィックス、モーショングラフィックス、写真、Web、プログラムなど、コンピュータで表現可能な様々な技術を習得することを目的とする。 (千里 政文) インテリアデザイン、建築の専門を学ぶ。特にユニバーサルデザインの視点に立ち、多くの人が使いやすい「すまいづくり」「ものづくり」「まちづくり」の視点から、学生各々に合わせた内容で、照明器具・家具・インテリア小物制作・インテリアコーディネート・建築設計・CAD・CGなどの作品を制作する。 (小室 晴陽) 住宅空間の設計デザイン力を身につける。自分自身あるいは具体的な住ニーズ・生活スタイルを持つ施主を想定し、その要望に応えうる魅力的な独立住宅の設計提案を行う。「都市型」や「地方・郊外型」あるいは「週末住居」、「別荘」の別は自由とする。図面のほか外観模型やインテリア模型の制作も行う。 (富田 玲子) 平面と立体における応用パターンの技術を磨く。インスピレーションで形になった服、偶然できたフォルム、ディテールを平面に写し、パターンとしての仕組みを理解することをねらいとしている。 (大信田 静子) 「専門演習Ⅰ」では織物を主に素材・色彩・技術・発想を多角的に捉え、個性を活かしたオリジナルな布地を製作する。身体を包む・保護する布の性質を把握して素材作りをしていく。 (村松 幹男) 演劇をコアとした舞台芸術を実践するために、役者・照明・音響・装置美術、メイク(ヘアメイク)、特殊効果、演出、舞台監督、制作、戯曲そして舞踊の中から自らの専門を選択し、文献や実線を通して専門性を深める。舞台発表及びラジオドラマ制作を行う。	
			専門演習Ⅱ 専門演習Ⅰにおいて学習した知識や表現方法をもとに、美術、メディアデザイン、インテリア建築、服飾美術、舞台芸術)に関連する専門分野を、それぞれのゼミナールで教員と学生とが協力して運営し、実践を交えながら学習を深める。 (林 亨) 専門演習Ⅰで学習した内容を基に、さらに絵画作品制作力を伸展させることを目標とする。大作制作や連作制作を中心とした表現活動を通して、発展的な素材・技法の研究に努め、各自の制作コンセプトの進化を図る。 (森井 綾) 専門演習Ⅰで取り組んだ課題をより深め、実践的なデザインングを行いながらデザインワークに対する理解を深める。ドローイングや絵画・彫刻などグラフィックデザイン以外の授業で身に付けた色彩、平面、立体の構成能力、様々なメディアにおいての視覚効果以外のものを含めた表現方法を生かした構成を考えるのは専門演習Ⅰと同様である。 (永野 光一) この演習では彫刻の素材に対し、より深い理解が得られるよう展開していく。金属彫刻の演習では、鉄材の持つ特性を生かした作品を制作し、知識と技術を高めていく。人体制作の演習では、立体表現のより高度な能力と諸感覚の伸展を図る。木彫の演習では、彫り進め方を学び、木材の特性を知り素材を生かした表現力を養う。 (浅井 貴也) 専門演習Ⅰで学習した内容の発展として、学内外で実際のデザイン業務を請け負い、デザインの知識や技術以外にも、依頼者との打合せや資料作成、コンセプト提案、プレゼンテーション等、ビジネスシーン意識したプロジェクトに取り組む。(プロジェクトの内容は年度により変化する) また、ポートフォリオに入れられる作品を精査し、就職活動の準備をおこなう。 (松澤 衛) 前期に学んだ表現技術で、作品を作り上げる方法を学ぶ。コンピュータで表現可能な様々な技術を前期で学び、後期はそれを深めて更に自分の技術になるように作品作りを通して完成度を上げることを目的とする。 (千里 政文) インテリアデザイン、建築について、前期に学んだ知識を生かし、作品制作を行う。学生各々に合わせた内容で、照明器具・家具・インテリア小物制作・インテリアコーディネート・建築設計・CAD・CG作品を制作する。進路希望先を意識した作品制作、各種競技設計、地域・企業連携、現場見学等を予定している。	

授 業 科 目 の 概 要					
(教育文化学部芸術学科)					
区 科 分 目			授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	応 用 実 践 科 目	総 合 ・ 統 合	専門演習Ⅱ	(小室 晴陽) 商業施設・一般建築など不特定の人が利用する建築空間を対象として、個別にテーマを設定し課題制作を通して個別指導を行う。あわせて、学外のインテリア・建築作品見学を積極的に行い、また学外プロジェクトにも積極的に参画する。 (富田 玲子) 布の様々な変化する表情をとおして、さらに自由なデザイン発想の応用作品を製作する。そのプロセスをとおして、デザイン発想の可能性は無限大に広がり、デザイン能力、パターン設計能力、造形能力を高め、創造する力を養うことをねらいとしている。 (大信田 静子) 「専門演習Ⅰ」で作り上げた素材を基に「専門演習Ⅱ」では、材質や柄などを考慮して、型にとらわれず、柔軟な発想と豊かな個性を活かしたデザインで洋服を製作していく。 (村松 幹男) 前学期で学んだことを深化させる。実践を通して自分の弱点を知り、弱点の克服に努めるとともに、実践を通して自分の強みをより高いレベルにまで引き上げる努力をすることが望まれる。	
			卒業研究	専門演習Ⅰ・Ⅱで学習した知識や表現方法をもとに、関連する専門分野を、それぞれのゼミナールで教員と学生とが協力して運営し、実践を交えながら研究を深める。また、自らの生涯学習としての芸術活動の基盤づくりをおこなう。専門領域に関する自らの課題を見つけ、独自の課題に取り組む学習方法や研究方法を学ぶ学習。また研究・実践によって、専門性を深め、学外での表現活動によりコミュニケーションとしての芸術の意義を学習し、地域における芸術活動の意義を研究する。卒業発表会（制作展、公演、発表会）において学外発表し、社会から評価を受ける。	

授 業 科 目 の 概 要				
（教育文化学部心理カウンセリング学科）				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
全学共通科目	導入科目	基礎教育セミナーⅠ	大学で「学生」として「学ぶ」ということを理解する。専門的学習の場において、読み書き調べることに関する基礎能力の習得が重要となる。そのため、情報検索、ノートテイキング、リーディング、ライティングの各種能力を向上させる。さらには、情報を整理しまとめ伝えることが出来る力を獲得する。加えて学生生活全般にわたっての心の健康（メンタルヘルス）について学ぶ。大学で学ぶということは学長、メンタルヘルスはカウンセラーが担当し、他は学科専任教員全員で担当する。	
		基礎教育セミナーⅡ	基礎教育セミナーⅠで習得した大学で学ぶために必要不可欠な知識、技術、情報をさらに自分のものとして身につけていくために、多分野にわたる学びを深める。現代社会における様々なトピックスを題材にして、レジュメの作成やディスカッションを行いながら、社会に関わるためのコミュニケーション・スキルの向上をめざす。自分の将来への意識を確かなものにしながら、専門の学びへの準備を整えていく。自ら調べ、整理し、まとめ、伝えるといった能力をスキルアップさせる。そして、大学生活に必要なマナーや態度を身につける。学科専任教員全員で担当する。	
	基礎科目	日本語表現	日本語による表現能力の向上と、基本的知識の修得を目的とする。その表記方法（文字・語彙・文法・文体・仮名遣い・送り仮名・文章表現に際して用いる符号類等）を学習し、文章の種類・形態と文章を書くときの要領や修辭法について学習する。伝えることの大切さを意識すると同時に、日本語の各分野における能力を向上させることを目的としている。各自が持つ日本語表現能力を向上させ、効果的で円滑なコミュニケーションを図ることができるよう、基礎的な力をつけることを目的としている。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○話し言葉と書き言葉：山本（麻） ○漢字（成り立ち、同音意義語等）：福田 ○四字熟語、慣用句など：小坂 ○二語の関係：村松 ○敬語：小杉 ○文章をつくる：石原 ○文と文の関係（文の並べ替え、文法）：小原 ○情報を読み取る：前川	オムニバス
		数学入門	私たちが便利で快適な生活を送ることができるのは、ベースに数学がある。普段、数学の存在を気にすることなく、生活をおくることは可能である。しかし、いざ世の中の仕組みを知りたいと思うと数学が得意とする論理的思考力が必要になる。本学では、生活における数学という切り口で身近にある数学を学び、各専門分野で必要な、ものを考えるための基礎力を身に付けることを目的としている。2年後期に開講される（履修する）就業力特別講義Ⅰに向けた基礎力を培うことをも目的としている。 8回の講義内容は、以下の通りである。 ○携帯端末と数（数の仕組み）：松澤 ○点と線と面（図形の基本）：佐藤（克） ○速さと時間：菊池（非常勤） ○美と比率（黄金比等）：水野 ○行き先と道順（樹木図等）：松村 ○借りたお金はいくら返せばいいの？（金利等）：澤田 ○集合：西村 ○資料の数値化（統計の基礎、そもそもなぜ数にするのか？）：佐々木（雅）	オムニバス
		情報機器操作Ⅰ	コンピュータハードウェアの基本と情報処理の基本を理解するとともに、コンピュータを活用して、データ管理、ネットワーク処理等を行う。インターネットの利用を通して、情報社会における情報モラルの必要性や情報発信に対する責任等について考える態度を養う。パソコンの日本語文書処理、プレゼンテーション、表計算のソフトウェアを使い、日本語文書処理の基本とデータ処理の基本、プレゼンテーション用資料作成の基本的な知識と技能を習得し、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力の育成をねらいとしている。	
		情報機器操作Ⅱ	情報処理の基本を踏まえて、コンピュータを用い、実際にアプリケーションソフトを使って、情報処理におけるコンピュータの基本的・応用的な活用と初歩的な画像処理の方法を学ぶ。また、文書の作成、データの活用、プレゼンテーション等の活用について知識を深め、情報モラルについても考察を深める。いずれの活用においても、基本的な知識・技能について確実に高い習得を行なうとともに、学習や生活の場面で活用できる情報活用能力を育成することを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部心理カウンセリング学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基礎 科 目	健康体育(実技を含む)	自分の身体に責任を持ち、健康な身体をつくります。また、そのための基礎知識と基礎体力を向上させる。さらに、「身体と頭がSmartに(賢く)なる体育」を目標に、自分自身の身体を通して健康について考えます。また、いろいろなスポーツのもつ面白さとトレーニングの喜び・難しさを理解します。そのために、健康の保持・増進に関する知識を深め、運動の体験をとおして、自分自身とのコミュニケーション、自分と他者とのコミュニケーション能力を高めるなどの活動を行います。 (教育学科学習コーチングコース) オムニバス ○講義：体育理論の学習 1～5 (浅尾秀樹) ○実技：身体を知り、動きの質を高める 6～12 (山崎あずさ) ○講義：トレーニングの方法について学ぶ 13～15 (浅尾秀樹) ○実技：表現する、伝えることを中心に、身体を動かし、創造する力を身に付け、グループに分かれて作品をつくり発表する 16～23 (山崎あずさ) (教育学科養護コース、音楽コース、芸術学科、心理学科) オムニバス ○講義：(花井) ○実技：(畠山、花井、千葉) 3クラス展開	※実技/オムニバス	
	英語コミュニケーションⅠ	本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行います。受講するにあたり、英語力の前提条件はない。 最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。 この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。		
全学 共 通 科 目	英語コミュニケーションⅡ	この講座を受講するにあたり、英語コミュニケーションⅠを修了していることが必須である。 本講座では、コミュニケーションで使われる基礎的な文法を確実に身に付け、語彙力を伸ばし、自信を持って流暢に会話ができるよう、いろいろな場面を想定し、リスニング、ペアワーク、反復練習を行い、レベルアップを図ります。最終評価は、試験、小テスト、プレゼンテーション、そして、学校方針に従い授業に積極的に参加することなどを総合的に考慮して行う。この講座の長期目標は、英語を学習する動機付けとモチベーションの維持をはかり、グローバル社会において、英語を使えるようにすることを目指す。		
	英語(中級)	社会に出て仕事や研究のツールとして使うに足る、英語力を養うために、英語を多角的に学び、教養のある「英語」に向上させていく。「読む」「聴く」の受信面と「書く」「話す」の発信面の4つの技能を大学レベルまで高める。アカデミックライティング(エッセイの構成の基礎的理解)とオーラル・プレゼンテーションを中心に学習する。適切な文を書き、ライティングの過程を踏まえて、論理的に構成されたパラグラフを書くことを学ぶ。習熟度別クラス展開を行なう。		
	英語(上級)	各自の専門分野に関連させたかたちで、より高度な英語運用能力が身につくように勉強する。論文作成を行なうことを目的にして、英語文献を読みこなし、国際会議等で発表や議論をするための基礎能力開発を行う。学術論文の構成を理解した上での読み方、効果的なプレゼンテーションの仕方、ディベートの訓練等を行う。習熟度別クラス展開を行なう。		
	韓国語	韓国語は、日本語とほぼ同じ語順で、日本人にとって最も習得しやすい言語と言える。文字と発音に習熟すると同時に、簡単な会話文やあいさつなど実用性に重点をおいて、韓国語に慣れ親しみ学んでいく。また視聴覚教材を通して、韓国の文化や風習に触れる。		
	中国語	中国語の基本的な文法事項を確実に習得して、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。また、ビデオやDVDを用いて中国の文化遺産や歌などを紹介して、中国の文化や社会事情を通して理解を深める。		
	ドイツ語	ドイツ語では、初歩的な文法の一部を取り上げて、学習する。また、文法事項を通じて、ドイツ語圏(ドイツ・スイス・オーストリアなど)の生活・文化についても触れながら、理解を深めていく。		
	フランス語	フランス語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。フランス語を学ぶことを通して、フランス語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、フランスの文化や社会事情への理解を深める。		
	スペイン語	スペイン語の基本的な文法事項を確実に習得し、文法の進度に合わせて簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。スペイン語を学ぶことを通して、スペイン語を母語とする社会についての知識と関心を深めて、スペインの文化や社会事情への理解を深める。		

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	教養科目	現代生活と政治・経済 「現代生活と政治経済」は、政治と経済を中心に社会の動く仕組みを理解する。政治と経済は不可分の関係にあり、その相互作用を理解することが、社会の動きを読み解くためのリテラシーを高めることにつながる。社会的格差が広がりつつあると指摘される現代だが、政治学と経済学の基礎理論を通して、競争や公平の概念を理解し、議論できる学びの深化を目指す。まず、経済学から説き起こし、提起された課題を政治学が引き取り、最後に二つの学の重なりを双方向的授業展開の中で確認し、現代生活への理解を深める。 経済学については、基礎理論として基礎概念を学び、さらに市場メカニズムについて考察する。身近な生活と経済とのかかわりを考察するとともに今日的課題を理解する。(澤田一義 1回～8回、15回) 政治学については、基礎理論として政治学、公共経済学について学び、生活と政治の関連を探索。社会における公平や世界の中の日本について考察を深める。(相内眞子 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と法律 現代生活において、社会の秩序を維持するためには、「法律」という客観的な価値の基準が必要である。人々の生活を強制できる唯一のものである。この根本には「人間の尊重」があり、これは現在、日本国憲法のもとで定められているあらゆる法律に共通する普遍的な原理である。高度に進化した現代社会では、個人においても組織体においても、コンプライアンスという言葉により、いっそう法の遵守の意義が求められている。私たちの日常生活において、様々な場面で関わりのある法律の存在を改めて意識し、理解を深めていく。	
		現代生活と福祉 現代社会においては、私たちの暮らしは、個人的な力だけでは営むことができなく、社会全体で助け合う仕組みにより成立している。授業では、現代生活の特徴を明らかにし、福祉制度がどのように私たちの暮らしに結びついているかを学び、生活全般にわたる福祉についての理解を深める。	
		現代生活と芸術 現代社会における芸術をどのように位置づけ、考え、学び、実践していくのかを、音楽、美術の両面から考察し検証する。芸術が社会とどのように関連し、何が創造され、生活や社会活動を豊かにするのかを、過去と現在を比較しながら学んでいく。音楽では、現代生活に大きく影響を与えた音楽史での発明とこれまでの経緯をたどり、現代における音楽のあり方を検証する。また美術では表現の歴史と社会背景について知り、それらが現代にまで与える影響や生かされている点について、現代の美術作家の視点をもとに検証を進め学びにつなげていくと同時に社会活動としてのアートという観点から様々な実践例をもとに学んでいく。 ○原始時代の痕跡、ルネッサンス、印象派、葛飾北斎、コンテンポラリーアート、アウトサイダーアート、アートプロジェクトといった視点を通して、現代の生活や価値観を通して、芸術を比較し検証する。(末次弘明 1回～8回) ○楽譜、オペラ、歌舞伎、平均律、ピアノ、録音技術、音楽鑑賞プロジェクトといった切り口から現代生活における音楽のあり様を比較し検証する。(鈴木しおり 1回、9回～15回)	オムニバス
		現代生活と教育 教育を成長の過程と併せてとらえ、現代生活を有意義に過ごす上で必要となる基礎的リテラシーを磨く。教育とは何かを考えることから始め、第Ⅰ部では、人間の成長段階に合わせ、貝原益軒の「和俗童子論」、世阿弥「花伝書」、宮本武蔵「五輪の書」、鴨長明「方丈記」、高田好胤「好胤のことば」等と比較しながら教育の意味や意義を考える。第Ⅱ部は、企業の新人教育、新製品開発にかかわるエピソード、一流スポーツ選手へのインタビュー等をもとに、教育と成長との関わりについて考える。	
		現代生活と心と体 現代生活は、経済の発展、技術革新、人・物・情報などが自由に移動する等により、豊かで便利な生活となり、人間の健康水準は向上している。しかし、その一方で、感染症、生活習慣病、心の病といった新たな健康問題も出現している。本講義では、人間を取り巻く現代生活の特徴、心や体の基本的知識、代表的な心や体に関わる問題について理解を深める。また、自らの心と体に目を向け、現代生活で心や体を守るために必要なことについて考える力を養う。	
		現代生活と物理 物理は自然科学の基礎と言われている。普段私たちは物理ということ意識して過ごすことはあまりない。実は、自然現象や日常生活においておこる様々な現象は、物理に密接に関係している。物理は身近なものなのである。「なぜ飛行機はとぶのか」「空はどうして色が変わるのか」「そもそも色とは何か」「超伝導とは何か」「音や音程のしくみは」「なぜ時には速さがあるのか」「なぜ摩擦がおきるのか」など、疑問はつきない。物理の基本的概念の助けを借りて理解できることがたくさんある。この講義では、物理の知識を学び、日常生活においておきる現象を客観的に見る力を養い、専門分野の学びを深めることにつなげる。 ○光(空の色、物体の色、色) 松澤衛/3回 ○音(音程、音色、ドップラー効果) 松澤衛/3回 ○運動(時速、衝突) 小田研/3回 ○熱と摩擦 小田研/3回 ○電気と磁気(磁気と記憶) 小田研/3回	オムニバス
		現代生活と宇宙 身近なところにある現代生活と宇宙のつながりについて、3つの視点で講義を展開する。まず、宇宙誕生から現代までの時間を様々な時間スケールに置き換えて考える。137億年の歴史を1年に縮め、宇宙の歴史における人類について考える。次に、宇宙に飛び出した人類の視点から、宇宙開発や宇宙から見た地球、宇宙飛行士などをテーマに宇宙から見た地球を考える。最後に、人類が宇宙へ進出する中で生まれた様々な技術が、私たちの生活の中にも役立てられている。この技術移転(スピノフ)について紹介する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部心理カウンセリング学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
全学 共通科目	教養科目	現代生活と環境科学	現代の私たちの生活は、科学の発展とともに物質的に豊かで便利なものになってきた。しかしその反面、自然環境の汚染による生活環境の悪化、資源エネルギーの不足、地球温暖化など様々な問題が生じている。本講義では、人間をとりまく自然のおよび社会的環境とその中で生じている今日の問題について理解し、環境と人間の関わりについて考え、問題解決の方向を探ることを目的とする。 はじめに、環境とは何かについて考える。地域環境と生命とのかかわりや、快適環境への人間の適応、現代生活における生活リズム・大気・水・化学物質等について考察を深め、地球を取り巻く環境の諸問題について考える。	
		北海道の文化	北海道はアイヌ民族が先住民族として居住する地域に、明治以降に各地から200万人以上の人々が移り住んだ地域である。移住地で庶民はどのような生活文化を築いたのだろうか。庶民が営々と築きあげてきた日本の生活文化について、民俗学視点から講義する。本講義では昔から伝承された生活文化が、現在はどういうように変化しているのか。昔と今の文化を比較しながら、具体的な事例をもとに自文化について考察する。また人の移動と文化形成の視点から、北海道が新しい文化を受け入れやすいという道民性についても考える。	
		日本国憲法	日本国憲法は、我が国の最高法規・国づくりの基本となるものである。したがって、私たちの住む国家・社会をどのように発展させていくかの指標ともいえる。その意味では、日本国憲法の内容、役割、機能を真摯に学習することは、主権者である私たち国民にとって極めて大切なことである。中学・高校と学んできた日本国憲法の知識をもとに、憲法の基本理念やしきみについて理解を深めていく。さらに、憲法が制定されて60年以上が経過する間に、多くの憲法問題、裁判例が蓄積されてきたことを踏まえ、現代的な諸課題についても主権者としてどうあるべきかを学んでいく。	
		情報社会及び情報倫理	インターネットの普及により、情報や情報技術、ネットワーク技術に関わる様々な事柄が、当然のこととして扱われている。それらを正しく理解、利用することで、社会生活により良い効果が生まれる。しかし、間違った理解や、利用方法を誤ると、個人においても社会に対しての悪影響を防ぐことはできない。情報や情報技術、ネットワーク技術がめまぐるしく発達する中で、その利用方法や役割、影響等について、正しく理解し、考察し、情報倫理の必要性や、情報を扱う責任について考え、望ましい情報社会の構築に積極的に参加する態度を身につけることを目的としている。	
		情報処理(中級)	どのような社会分野でも情報処理の技術が、求められる時代になってきた。本学でも情報処理の基礎としての科目を用意しており、社会人生活で最低限必要な知識と技術を身につけることができる。情報処理中級では、基礎技術をベースとして、より高い社会の要求に対応できる人材育成を目的とし、アプリケーションを自在に操るマクロ、情報の整理整頓を行うデータベースを中心に、コンピュータでのデータ処理の知識、技術を学習する。	
		情報処理(上級)	どのような分野でも仕事を行う上での必須アイテムがコンピュータである。本学では、情報処理の基礎、中級という科目を用意しており、社会に必要な情報処理技術を学ぶことができる。この科目では、更にコンピュータ、スマートフォンに代表される携帯端末、ネットワークの仕組みを理解し、より高度な情報処理技術を学ぶ。 情報端末やネットワークをプログラミングにより制御をして、コンピュータを自由自在に制御する方法を習得することを目的とする。	
	就業力養成科目	キャリアデザインⅠ	本講義は、体系的に開講される本学キャリア教育科目のスタート地点に位置する基礎科目である。自己の進路を見据えて望ましい職業観の醸成を主なねらいとし、学び、働くことの意味を考えることから始める。いずれ、己の足で立つ労働市場の現状を早い時点で知ること、次の段階への意欲づけにつなげたい。講義を通じ、大学で学ぶことや社会で働くことの意義について、若年労働市場の現状を経済情勢や雇用環境の変化などと関連づけて理解し、自らのキャリアについての展望を持てるように促す。	
		キャリアデザインⅡ	本講義は、キャリアデザインⅠに続く基礎科目として、キャリア意識の醸成を目指す。様々なキャリアを経験してきた教員や各種の仕事で活躍している卒業生の話を聞き、多様な生き方や考えがあることを学ぶ。これにより自己の興味範囲外の世界があり、一見関係のない分野も全てが繋がって社会が成り立っていることを理解し、キャリアの広がりや認識する。また、社会に出ていくために必要なワケルールや敬語など社会人としてのコミュニケーションのルールについて学ぶ。	
		キャリアデザインⅢ	本講義は、自らのキャリアを構築させるための対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の醸成を目指す。様々なコミュニケーションワークを体験し、自己の意見を伝え、他者の意見に耳を傾けることができる「発信力」「傾聴力」の習得を図る。また、自己の考えを文書化し、グループの中で主張できる「表現力」「企画力」の習得を図る。小グループでの企画書づくりを通して、他のメンバーと協力して物事を作り上げる「課題解決力」の習得を目指す。	
		キャリア演習Ⅰ	本演習は、自らのキャリア構築のための実践的な対人基礎力、対自己基礎力、コミュニケーション基礎力の向上を目指す。対自己基礎力では、就職活動の自己アピール文を作るための自己分析を行い、自分の強みを正しく理解する。対人基礎力では、他者へ訴求できることを目指し、実践的な自己PR演習を行う。また、就職活動には欠かせない履歴書の作成を通して言語的コミュニケーション基礎力の向上を目指す。まとめとして、就職活動で成功するために自らの目標を設定し、実現のための具体的な行程表を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部心理カウンセリング学科)				
区科 分目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
全学 共通科目	就業力 養成科目	キャリア演習Ⅱ	本演習では、進路決定のための実践的な就職活動の基本についてを学ぶ。模擬面接、模擬グループディスカッション等の実践的な演習を通じて、自己のコミュニケーション力を正しく把握し、さらなる自主努力の必要性を理解し、自発的行動への意識を喚起する。民間企業、福祉施設、教職、公務員など志望分野は異なっているが、社会・職業への移行に必要な力・本質は同じであるという大原則を正しく理解する。また、ビジネスマナーを通じて社会人としての立ち居振る舞いの習得を目指す。	※講義
		キャリア演習Ⅲ	本演習は、本学のキャリア教育の中で実践教育に位置づけされる。就職活動中の民間企業希望者や福祉施設希望者、面接試験を控えた教員や公務員志望者を対象に開講する。演習では、模擬グループディスカッションや模擬面接を通して「面接力」の向上を目指す。模擬面接では、受験者役、面接官役、評価者の3役全てを体験することで、それぞれの視点を理解し、柔軟性と状況把握力を養う。また、「面接力」の基本となるコミュニケーション能力の向上を目指す。	
		キャリア演習Ⅳ	本演習は、本学のキャリア教育科目の総括科目にあたる。将来の進路決定の有無に関わらず、今後一生続く自らのキャリアを見つめる社会人としての視点を学ぶ。社会で活躍している人の講演や、ビジネスマナー、働く人の法制度等を学ぶことにより、物事に対する俯瞰的視点の習得を図る。社会のルール、社会的行動への理解を深め、応用力を養成することで、社会人1年目から活躍できる「+αの社会人力」を身につけることを目指す。	※講義
		就業力特別講義Ⅰ	本講義は、民間企業の就職試験において90%以上実施されている筆記試験対策の実践教育である。対策分野はSPIの非言語分野に絞り、展開方法は全8回のオムニバス方式で実施する。各分野の担当講師から解法のポイントを学び、論理的思考の醸成を目指す。 8回の講義内容は以下の通りである。 ○確率 : (松澤) ○グラフの領域 : (佐藤(克)) ○速度算(速度・距離・時間) : (菊池) ○割合、比率、濃度 : (水野) ○仕事算、水槽算 : (松村) ○損益算 : (澤田) ○集合、順列・組み合わせ : (西村) ○表の読み取り : (佐々木(雅))	オムニバス
		就業力特別講義Ⅱ	本講義は、就業力特別講義Ⅰで学んだSPIの解法を正しく理解し、自らの実践力を確認し、論理的思考の深度を図ることを目指す。講義では「就業力になぜSPIの勉強が必要か」を問い、相互確認することから始める。社会人基礎力における論理的思考の重要性を再認識することでSPI対策に自主的に取り組む姿勢を醸成する。SPI対策の実践では、就業力特別講義Ⅰの復習と応用問題に取り組み、正確でより速い解法力を育む。 (オムニバス方式/全8回) (小室晴陽/1回) SPI非言語対策と論理的思考の必要性 (菊池隆夫/7回) SPI非言語応用問題対策	オムニバス
		インターンシップ	本演習は、企業・団体等での就業体験を通じて就業力を育成することを目的としている。インターンシップは、①日々学んでいる専門性を実践の場で発揮する機会として、②自ら選択した職種の適性を判断する機会として、③進路とは異なる業種、職種を経験する機会として等、各自の目的に応じて活用することが可能である。インターンシップにより、将来の進路選択の際に必要なさまざまな知識を吸収すると共に、社会に通用する価値観や労働を通じた社会貢献の重要性に気づき、社会人としての基礎力を培うことを目指す。	
外国人 留学生 科目	日本語	外国人留学生対象科目である。本学における学習場面でのコミュニケーション・学習・発表がスムーズに行えるように、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの技能の向上を目標とする。また、日本の文化、事情、風習、マナーなどを読み物や視聴覚教材を通して理解することで、日本での留学生生活がより有意義なものになるようにする。例えば、読解を目的に小説を読むことや、語彙と文法事項、漢字などの学びに加えて、日本の事情や文化等を扱ったニュースに触れ、日本の演劇鑑賞などを教材として学ぶ。日本語能力検定1級を必ず取得しよう。		
	現代日本の文化	外国人留学生対象科目である。現代日本の文化では、留学生の出身国(地域)における自国の文化認識を確認し、それらと比較しながら、日本文化や地域文化(北海道)の内容について理解を深める。出身国(地域)の文化認識の確認することから始めて、日本の伝統文化である「食文化」「文化遺産」「スポーツ」「芸術」「マンガ・アニメ」「生活習慣」等を学ぶ。また、北海道の地域文化を理解することを目的にして、「博物館体験授業」を通じた学びを行なう。		

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部心理カウンセリング学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
関 心 す 身 る ・ 科 健 目 康 群 に 社 会 と 生 活 に 関 する 科 目 群 発 展 科 目	食生活と健康	日本の食事や日本人が培ってきた食事文化は世界一の長寿国をもたらした。しかしながら、現在の日本人の食事のあり方にはさまざまな問題点が指摘されている。私たちの現状の食生活を直視し、健康的な食生活を営むための基礎的な知識を学ぶ。さらには自ら食事を実践するための基本的知識を養う。		
	スポーツ施設管理論	体育などのスポーツ関連施設だけでなく、集会場を含む一般的な公共施設を良好な状態で使用し続けるための各種知識を伝授する。生涯スポーツを含む生涯学習時代を迎えて益々、これらの多様な活動を支える公的施設の重要性が高まっている。そのような現代日本において、健全な社会生活を保障するために各種の施設が保つべき環境条件を講義する。具体的には各種の施設、建築物、設備、器具、屋内環境、運営面、専門家の資格ほかを学ぶ。		
	地域福祉論Ⅰ	これからの地域福祉において、社会福祉士は地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成を図る等、地域福祉の増進に働きかける役割等を適切に果たすことが求められるようになった。そこで地域福祉論Ⅰはまず地域福祉の基本的な考え方、新しい社会福祉システムとしての地域福祉の考え方や地域福祉の理念、地域福祉を担う主体の形成および公私協働の実際を学習する。		
	生活の中の介護福祉	介護を必要とする人の増加を背景に、介護および介護福祉に関連する様々な課題が問われている。それらの課題と関連させながら介護とは何かを考える。その上で介護援助の要素について学んでいく。介護および介護福祉の概念・理念から授業をスタートし、それらを踏まえて介護福祉サービスを提供するための基本的な考え方と技法を学ぶ。 本講義は、受講する学生が介護および介護福祉について、身近な事柄として関心をもって考えられることを目標とする。		
	高齢社会の街づくり	今日の人にやさしい福祉の街づくりについての国及び自治体の制度・政策について学ぶ。特に重要な公共的建築物の福祉環境整備調査項目については、大学のキャンパス内での事例の検証とバリアフリー・ユニバーサルデザインについての企業の考え方をグループで協同して調査・研究を行い、その成果をポスターにまとめて合同で発表する。また、住宅の福祉環境整備項目についてはホームワークとして各自がレポートを作成し提出する。		
	社会教育概論	本講義は、社会教育の本質を学び社会教育主事として必要な知識を習得する。生涯学習社会における社会教育の立場と役割を学び、将来、教育委員会の社会教育行政や社会教育施設などへ就職していくための知識と技能を習得する。さらに、社会教育主事資格を取得するための必修科目であり、専門職としての知識を修得する。		
	社会教育計画	生涯学習社会の構築を目指し、地域の振興策を考える上で社会教育が重要な役割を担っている。社会教育を進める際の指針となるものが社会教育計画であり、その社会教育計画策定の基本的なことについて学ぶ。具体的な事例などを踏まえた講義と演習を取り入れながら学ぶ。		
	社会教育課題研究	生涯学習時代といわれる今日、多くの学びに取り組んでいるが、生涯学習と社会教育の立場や違いを整理し両者の役割と内容について具体的な事例などを交えながら学ぶ。さらに、生涯学習社会の実現のために社会教育が果たす役割について講義、演習を通じて学ぶ。		
	社会教育課題演習	教育行政における社会教育行政は、生涯学習を推進するためには欠かせない重要な行政分野である。社会教育行政の専門的職員である社会教育主事は、社会教育を行う者に対する助言と指導が求められるため、その専門的な知識を学ぶ。講義と実践的な演習を行う。		
	社会教育施設論	社会教育施設が教育機関としての役割を果たすためには、「人」「物」「事業」等の機能の充実が求められている。本授業は、社会教育施設の目的や役割を学習するとともに、これからの施設の方向性と単なる場所としての施設ではなく、新しい学習空間としてのあり方を学ぶ。		
	ファッションデザイン概論	ファッションデザインは、形、色彩、素材、さらには作り方と着こなしがあり完成する。そして、そのデザインが歴史を作り変わり続ける。ファッションの持つ社会的役割が、どのように変化していったのかを検証し、ファッションのどのような生活の中で役立てていけば良いのかを考える。衣服とは何か？ファッションとは何か？デザインとは何か？おしゃれとは何か？自分らしさとは何か？を一緒に考える。 (オムニバス方式/全15回) (大信田静子/7回) 日常生活の中での衣服・ファッションとは何か？を考え、基礎的要素のデザインから入り、造形・色彩のセオリーを通して内面的・外面的な美しさを学ぶ。 (富田玲子/8回) 基礎デザインを踏まえ、情報と視覚、聴覚、臭覚、触角などから入る外部情報とを組み合わせ、新しいデザインの発想と展開を学ぶ。	オムニバス	
	インテリアデザイン	インテリアデザインを学習する上で必要な、基本的知識の修得を目的とする。内装材料・家具・建具等のインテリア計画、移動経路を示す動線計画、人体寸法を含む寸法計画、建物の大きさや部屋数を示す規模計画、浴室・キッチン・暖房・照明等の設備計画、換気・シック対策を含む室内環境計画を総合的に理解することを目的とする。		
	ユニバーサルデザイン	ユニバーサルデザインの理念を含む建築計画について学ぶ。具体的な建築事例などを見ながら、ユニバーサルデザインの視点から人間の行動や意識と空間との相互作用に関する建築計画について習得する。特に、国土交通省の取り組んでいるバリアフリー新法(高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律)の視点から建築計画を学ぶ。		

授 業 科 目 の 概 要				
(教育文化学部心理カウンセリング学科)				
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容		備考
文化と芸術に関する科目群 発展科目	空間デザイン史	本講義は、日本建築および西洋建築ならびに近代建築について、それぞれの時代において人類が生活空間を獲得してきた歩みを振り返る。わが国にあっては、海外からの技術と様式を取り入れながら独自の発展を遂げてきたことを述べる。また海外の諸国では、各時代の文化との関連性にふれつつ構法と造形の発展過程や表現などについて講義する。さらに近代の建築作品では、著名な建築家と代表作、そして作家たちの系譜に関しても論じる。その上で、まとめとして世界の現代建築と近未来を展望する。		
	美術史	西洋と日本の美術史の流れを学びながら、当時の宗教や政治、経済など社会との関係の中で理解するとともに、美術作品を鑑賞する際の基本的な視点についても学ぶ。西洋美術は、ルネサンスから20世紀まで、日本美術は飛鳥時代から現代までの美術史を通してそれぞれの変遷を理解し、現代美術の多岐にわたる様相を考える手がかりを得ることが本講義の目的である。さらに、日本の伝統美術とアジアの美術の潮流を眺めながら、こうした展開を具体的な作品を取り上げて鑑賞しながら検証する。		
	美学	西洋におけるプラトン、アリストテレス、カント、シラー、バルト、リクール等、また中国と日本における画論、詩歌論、芸道論などを紹介を通じて、美と芸術に対する体系的な知識を講述する。またそうした思索力、記述力、鑑賞力が応用が可能かどうか、大学キャンパス内や札幌市内の美術館、ギャラリーに展示されている実作品を対象にして、検証する。		
	音楽概論	人間にとって感情表現手段の一つである「音楽」はどのように生まれ、どのように表現され、伝わるのか・・・。「音楽」の素材である「音」そのものや、音の組合せによって生まれる「旋律」「和声」「リズム」といった音楽の構成要素、さらには表現手段としての声や楽器の種類、構造と発音原理など、歴史的変遷を踏まえながら様々な角度から「音楽」を概観する。		
	音楽鑑賞法	音楽は記憶の芸術である。音楽の記憶は日常生活の場面と結びつく視覚につながるものが多く、音楽によって様々なシーンを連想させることもある。劇音楽やバレエ音楽は、まさにその効果を期待したものである。すべての音楽が直接情景を思い浮かべられる事を意図したものではないが、何らかの現象や情景を漠然と思いつくさせるものである。名曲を鑑賞するとき、より深い理解と楽しみ方を得るために必要な知識と手段を作品の解説や作品の生まれた背景、演奏楽器の興味深い話を交えながら研究する。		
	音楽史	西洋音楽史の10講義は、現代の音楽にいたる道のりをバロック、古典派、ロマン派、近代等の時代を認識し、各時代の音楽的特徴と音楽が生まれた背景を踏まえてその時代の作曲家の作品にふれながら、その人となりに関するエピソードを交えて進めていく。さらに日本音楽史5講義においては、伝統音楽及びアジア民族の音楽を鑑賞しながら雅楽、三味線、尺八、箏などの音楽を中心に歌舞伎、能狂言、浄瑠璃などの舞台芸術を検証し、日本独自の音楽の歴史を認識する。		オムニバス
学部共通科目	教育文化学	グローバル化と情報化が進み変動がすさまじい現代社会において、乳幼児から高齢者に至るあらゆる年齢層の人々が生き生きと豊かな生活を送るには何が求められるのだろうか。本講義では、教育学、芸術学、心理学の各専門領域から、人間生活の真の豊かさとは何かを考えつつ、人間の幸福につながる教育的な取り組みや、幅広く奥深い芸術の力、および、人間の幸福感につながる心理的理解について検討していく。 (浅尾秀樹／講義4回) 教育学の観点から、未来を担うこどもたちへの教育的かかわりや、地域生活における文化の継承について学ぶ。 (林 亨／講義4回) 芸術学の観点から、人間の精神生活を豊かにするアートの力について多面的に検討していく。 (風間雅江／講義4回) 人間の幸福感とは何か、どのような要因が幸福感に影響をおよぼすのか等について、心理学の観点から異文化を比較しながら検討していく。 (武邑光裕／講義3回) 文化芸術の多様な表現に代表される創造性を活かし、産業振興や地域の活性化などのまちづくりを進める創造都市について考える。		オムニバス
	芸術と心理学	本講義は心理学の視点から芸術全般について考えていくことを目的とする。特に「造形芸術」「言語芸術(文芸)」「音響芸術(音楽)」「総合芸術(舞台芸術、映像芸術)」など広い視点で芸術と心理学の関連を考えることを目的とする。担当教員はこれまでカウンセリングの技法として描画や箱庭などの表現療法を行ってきた。そのような悩みを抱えた人間の回復過程における「芸術・表現」の意味についても取り上げたい。		
	生涯学習論	当講義は、生涯学習の初心者を対象としている。生涯学習という言葉で提唱されたのは、1965年パリにおいて、ユネスコの成人部会長であったポール・ラングランによる。その背景、学習理念、目的、成り立ち、我が国への導入について基本的な理解をし、それが我が国の社会でどのように進展したのかを学習するのがこの講義の目標である。		

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 部 共 通 科 目	生涯学習展開論	生涯学習とは人々が自由に自主的に学習活動を行うことである。その学習活動を支援するためには、人間の発達課題を理解することも必要である。乳幼児期から高齢期までの発達課題や学習課題を踏まえて、学習活動の展開・方法を教育行政の役割を通して学習する。 本講義における到達目標は、(1)人間の発達課題についての理解、(2)人々の発達課題に対応するための学習の展開・方法の理解、(3)様々な学習活動を展開するための行政の役割の理解、である。	
	メディアデザイン概論	さまざまな芸術分野で活用されているデジタル技術について、分野ごとに学習する。本科目では、メディアデザイン分野を学習する上での第一歩として、メディアとは何か、デザインとは何かについて学ぶ。メディアデザインの根底にある情報通信技術(ICT)とは何かを理解し、ICTの発展が今後デザインの世界にどのような影響を与えるのか考えられるようになることを目標とする。 (オムニバス方式 / 全15回) (浅井 貴也 / 8回) アート、デザインの視点からICTとメディアデザインの関係性について過去、現在、将来について事例をもとに学習する。 (松澤 衛 / 7回) 映像、3DCG、プログラミング等のメディアデザインの視点から、最先端技術がどのようにして社会において活用されているかを学習する。	オムニバス
	カウンセリング心理学	個人の心理的問題を解決するために、カウンセリングは主要な支援方法の1つとなっている。本講義では、カウンセリングとはどのようなことをするものか、カウンセラーとはどのようなことをする人なのか、カウンセラーと来談者(クライエント)とはどのようなコミュニケーションを行っているのか、また、その中でカウンセラーはどのような観点でクライアントの話を聴き、応答しているのか、など、臨床心理学におけるカウンセリングについて、基本的な知識を学ぶことを目的とする。	
	青少年学習コーチング論	青少年の学習活動は、学校教育が中心であるが、生涯学習が進んだ今日では、地域における生涯学習活動の一環であると捉えることも重要な視点である。特に昨今、青少年の健全な育成のために学校教育と地域社会の連携に注目が集まっている。本講義では、青少年心理学に通ずる学習を先に行い、その後、青少年を取り巻く環境の変化を知り、青少年に対する理解や支援のありかたを探ることを目的とする。	
	リカレント教育論	リカレント教育とは、成人が学習の場に戻りその後再び職業へ回帰することをいう。生涯学習の範疇であり、成人が学習する場合の重要な要素として位置づけられている。特に、ヨーロッパ諸国では、生涯学習が職業的な向上を目的として実施されてきたが、今日では、学習をしたことの満足感、達成感など精神的な面での効果も明らかになっている。本講義では、OECD、ILO、ユネスコなどの見解や条約なども勘案しながら、諸外国と日本におけるリカレント教育の類似点や相違点を探る。	
学 科 専 門 科 目	心理学概論	人間の心のはたらきについての科学的・客観的な理解を得るために、心理学の基礎的な理論や知見を学ぶことを目的とする。人間の「見る」「考える」「学ぶ」「覚える」といった基礎的な過程についての知見を解説を行う。また、「欲する」「感じる」といった心理的活動の背景にある生理的・身体的な基盤について解説する。それらを基に、心の個人差や、健康や病理についても考える。個人の自己理解や他者理解を深め、実生活や実践の場にも活用できる知恵へとつながることを目指す。	
	学習心理学	学習とは何か、学習心理学とは何か、行動変容の方法とは何かをテーマに、学習の基本的原理と方法を概説する。実験心理学の一領域にとどまらない、「こころ」の諸問題にアプローチする実践活動に理論的基礎を与える学習心理学について、行動の科学的な捉え方と適用方法に関する理解を深めることを目的とする。 到達目標：(1)学習の仕組みの原理を理解する。(2)バプロフ型条件づけやオペラント条件づけや観察学習の基礎理論を理解する。(3)現実場面への適用する方法について、理解する。	
	教育心理学	本講義では、教育に関心のある者を対象にして、教育心理学についての基本的な事柄を習得することと、学校教育の現場における諸問題について、心理学的知見から考えていくことを目的とする。具体的に、講義の前半は「発達」「教授・学習」「知能」「測定・評価」などの従来の教育心理学の重点事項を論じていくこととする。後半は、学校教育における諸問題(いじめ、不登校、非行、発達障害等)について、ディスカッションを含めた講義を展開していく。	
	生理心理学	生理心理学とは、脳波や血圧、筋電位、呼吸などの生理学的な方法を用いて、実証的・客観的に心理現象を研究、解明しようとする研究分野である。本講義では、人の心を理解する方法の一つとして、中枢神経系および末梢神経系を中心とする生体反応の測定の諸測度と原理について理解したうえで、人の心との関連について考察を深めることを目的とする。まず、神経系の構造と機能について詳しく説明し、その知識を確実にしたうえで、神経系の働きを測定する諸測度について学び、さらに、さまざまな生理指標を評価する能力を身につけることが可能となるように段階的に概説する。	
	生涯発達心理学	従来の発達心理学は、誕生から成人に至る段階までを対象に、それぞれの発達段階で何ができるのか、どのような行動を示すのかを明らかにするものであった。近年、人の寿命が延び、胎児期からの心理学的研究がなされるようになったことから、これまでの傾向が見直され、全生涯を扱う縦断的な観点から発達過程を捉え直すようになってきている。人間は一生をかけて発達する可能性があるという視点に立ち、誕生から死に至る人間の心理的発達過程について、これまでに明らかにされてきた研究成果を中心に概説する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	社会心理学	社会心理学で取り扱うテーマは、我々が日常経験で誰もが感じたことのある疑問からスタートしている。社会心理学の基本的な理論について、これまで実施されてきた実験や調査の結果を紹介することや、受講者に簡単なアンケートや実験に参加してもらうことで、理解を深めていく。本講義における到達目標は、社会心理学の様々なテーマを知ること、社会心理学の考え方を理解すること、そして、社会心理学の研究方法を理解することである。	
	人間関係の心理学	人間関係は二者関係が基本となるが、それにとどまらず、より複雑な人間関係の中で様々な心の動きが生じ、その事が個々人の認知や感情、そして行動面に影響を及ぼす。人間関係はその存在が心の支えになることもあれば、ストレスになることもある。他者の心理状態を知り、適切なコミュニケーションが取れることは、家庭、学校、職場、近隣を問わず、あらゆる場面において重要である。本講義では、人間関係を心理学の視点から包括的に理解することを目的とする。	
	乳幼児心理学	人生の最初期である乳幼児期には身体面、認知面、言語面、社会性など様々な側面において急速に発達する。さらに近年は新生児期のみならず胎児期からの研究がなされるようになってきている。また、乳幼児の発達が、彼らを取り囲む社会的文脈(対人環境、社会・文化的環境)との接触の中で成し遂げられていくものだという視点も重視されてきている。本講義ではこれらの点について、これまでに明らかにされた研究成果を中心に概説する。	
	福祉心理学	今日の福祉問題に関する心理学的研究は始まったばかりであり、いまだに未開拓な面が多い。社会福祉学と心理学の学際的研究領域である福祉心理学とはどのような学問なのか、福祉の対応がどのような心理的影響を与えるのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、福祉の対応を必要とする人々の心理的特性ならびに福祉の対応に役立つ心理的技法、そして福祉施設における心理的問題などについて、いくつかの事例をもとに学ぶ。到達目標：(1)福祉心理学とは何かを理解する、(2)対人援助における心理的支援について、基本的な理解を得る、(3)対人援助における心理的援助の方法について、基本的な理解を得る。	
	労働法令	就職活動から雇用、労働条件の整備、超過勤務、転勤、配置転換、リストラ、退職など、我々の労働と法律とは様々な場面で関連がある。本講義では労働法に関する基本的な知識を修得することを目的とする。労働法の概要を知り、働く場・人と労働法との関連について理解を深めていくこと、そして雇用の場で生じる様々な問題について、具体的なケース等を交えながら法的に考える視点を養い、様々な形で対応できるような知識を身につけることを目指すものである。	
	育児支援の心理学	現代社会では少子化が進む一方で、育児ノイローゼや児童虐待問題が益々深刻化している。子育て支援についてもさまざまな見解がある。本講義では、現代社会の実情をふまえたうえで、子育て・家族支援の現場からの具体的な事例を適宜提示しつつ、子育て支援の必要性と重要性について改めて確認し、実際に求められる子育て支援と、その実践について考える。さらには、母子世帯、父子世帯他、さまざまな家族形態における生活事象をみすえた子育て支援のあり方についても具体的に検討する。	
	高齢者心理学	加齢についての基礎知識と心理的特性を学び、高齢者の身体と心の理解を深めることを目的とする。加齢によって身体的・精神的・社会的にどのような変化があるのか、心理的にどのような影響を与えるのか、そのためのどのような対応が求められるのかについて、事例をもとに解説する。さらにこれからの高齢社会を生き抜いていく上で何が必要なのかについて、考察する。到達目標：(1)加齢・老化の与える変化と心理的影響について、理解する、(2)老年期のパーソナリティの変化と適応について、理解する、(3)老年期の心理的变化と精神障害に関する知識を習得する、(4)高齢者の死と心理的援助について、理解する。	
	児童心理学	児童期は大きな変化の時である。小学校入学前は幼かった子どもたちが、低学年から中学年、高学年へと年を経るごとに、身長も伸び、運動能力や手先の器用さも増していく。心理面においても、複雑な思考ができるようになり、他者の気持ちや自分自身についての理解も深まっていく。本講義ではこのような児童期の心理について具体的なエピソードなどを通してこれまでの研究成果を中心に概説する。	
	青年心理学	人間の生涯発達の過程の中で、最も心理的・身体的・生理的に変化が大きいとも言われる青年期に焦点を当て、その実情について考察する。児童の心身に何が起こることで青年期が始まるのか、また青年は何を成し遂げることで成人へと成長していくのか、既存の理論を紹介しながらも、現代を青年として生きる受講者らの実情と照らし合わせながら、議論を行う。アイデンティティ、対人関係、親子関係、職業意識、心理的問題などをキーワードとして、講義をすすめる。	
	臨床心理学	臨床心理学は、発達・生理・障害などに関する基礎心理学を基盤に、「人」により直接的、実証的にアプローチするための心理学である。臨床心理的援助に対しては、従来の「治療・治す」という医療的な要請だけではなく、近年では「より良い精神衛生・予防」という視点からの社会的要請が高い。 本講義は臨床心理学の基本的知識を確実に習得することを目的とする。まず研究の歴史的な流れや、現在の主要な療法の根拠となっている諸理論を学ぶ。その上で、心理学の人間理解のための実際的な方法論および援助技法について、その概要を習得する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	臨床教育学	臨床教育学という概念は比較的新しく、日本臨床教育学会の「臨床教育学」の定義として、病いに陥った子ども・人々を意識するのは当然であるが、それだけでなく、今日の社会を生きる一人ひとりの子ども・人々の具体的で個別的な生活史に即し、その生活感情の表現・語りを受けとめつつ、援助や教育のありかたを検討するものと説明している。 本講義では、「教育心理学」や「臨床心理学」を基盤とした人間の心の問題から考えていく視点と、教育学の根底にある人間をどう理解していくかといった「教育人間学」の視点の2つを軸とし、教育について多角的に考えていくものとする。	
	障害者心理学	視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、言語障害、情緒障害、重複障害、自閉症、学習障害、注意欠陥/多動性障害、および高齢期における認知症などの障害に関する基礎的な知識をおさえたうえで、その心理的影響ならびに心理的援助について理解を深めることを目的とする。各障害にかかわる心理学的諸要因についてこれまでに明らかにされてきた研究知見を紹介しつつ、個々の障害特性にかかわる知識、人間として普遍的な心のはたらきの両方をふまえ、一人ひとりの生活事象をみずえた理解と心理的支援について主体的に考える力を養う。	
	心身医学	心と身体の関係を探る医学、すなわち心身医学は心理カウンセリング領域においても近年ますますその重要性がましている。本教科目では、医学の中の心身医学の位置づけ、心身症の概念、心理臨床に役立つ心身症の理解の仕方にもふまえ、心身相関のメカニズムなどの心身医学の基礎理論、代表的な心身症(呼吸器系・循環器系・消化器系など)の症状と診断、さらに心理療法にもとづく心身症の治療についての基礎知識を教授する。	
	心理統計法	基礎統計学で学んだ知識をもとにして、心理学領域で必要となるデータ処理の方法を学ぶ。実際のデータおよび研究事例をもとに、データ処理をフローチャート化し、どのようなデータに対してどのような処理を行うのかについて、解説する。特に統計処理の結果をどのように理解するかに焦点をあてる。具体的には、毎回、演習課題を実際に行い、考察することを通して、データの表示、平均の差の分析、実験計画と分散分析、相関・予測の分析、度数の分析、因子分析、回帰分析について、理解を深める。到達目標：(1)データの種類によって、適切な統計処理の方法を選択できる、(2)基本的な統計処理を行うことができる、(3)多変量解析の結果を理解できる。	
	心理アセスメント法	心理アセスメントとは、病理の診断や個人のもつ異常性の判定にとどまらず、人間がもつ積極的価値をも含めて多面的に分析し、また状態像を発達の、流動的に把握して情報を総合的に記述することにより、クライアント自身の利益のため、適切に情報を活用させていく過程を表す包括的な概念である。本講義では、人間を認知、行動、生理面から客観的、多面的に理解するための心理アセスメントを理解することを目的とし、基本的な諸技法や代表的な心理検査のいくつかについて体験的に学習する。	
	心理学基礎演習Ⅰ	本演習では、心理学および精神保健福祉学に関する研究や実践を基礎から学び、深めていくことを目的とする。 特に、心理学や精神保健福祉学の研究論文や関連書籍を精読し、「要約」「分析」「批判」など考察していく力を涵養することを目指していく。また、心理的・社会的要因が背景にある問題について、どのように考え、対処していくかという力を養っていくためにディスカッションなども積極的に行っていく。	
	心理学基礎演習Ⅱ	基礎演習Ⅰで学び身につけたことを活かすために、各種施設などへの見学や調査などのフィールドワーク活動を行う。 実際の現場に触れ、現場を知り、現場の視点から物事を考えていく素養を身につけていくことを目指していく。 そして、フィールドワーク活動で得られた知見を皆で討議し、研究成果としてまとめていくことを目標とする。	
	心理学基礎実験	心理学は科学的・客観的な研究によって構築されてきた理論体系である。その根幹となる研究方法である実験法を体験し、科学的研究のスキルを養う。テーマとしては、錯視、記憶、発達、社会的影響など、各分野における基礎的な実験を行う。受講者は、データ収集、データ処理、実験レポートの作成など一連の流れを体験する。目的、方法、結果、考察の4つの手順に基づいて、仮説を立て、それを検証する基本の手順を習得することを目的とする。 (オムニバス方式／4 5回) (風間雅江／9回) 心理学実験についてのオリエンテーションを行う。また、「葛藤」をめぐる、認知的水準での心的葛藤の測定実験の実施、および、日常生活での葛藤体験の洞察による検討を行う。 (佐藤至英／6回) 記憶の代表的な実験のうち、自由再生法における系列位置効果について、複数の実験条件を設定して行う。 (川崎直樹／6回) 社会心理実験として、対人行動や社会的認知についての実験を行う。 (新川貴紀／6回) 心理学研究法の中の観察法についての概説と動画刺激による行動観察を体験する。 (伊藤博晃／1 8回) 錯視、両側性転移、言語理解にかかわる認知心理学的実験を行う。	オムニバス

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	心理学研究法	心の働きを科学的に研究するための具体的な方法について学部ことを目的とする。講義では、まず質問紙調査法や実験（要因計画）法などの代表的な数量的手法について、基本的な理論について解説を行う。加えて、面接やフィールドワークを用いた質的な研究法についても解説を行う。また特に、臨床実践にまつわる単一事例による研究の方法やアクションリサーチなどについても理解を深め、対人援助実践の過程に対する客観的な視点を養う。	
	心理面接演習	心理療法の実践について習熟するためには、単にテキストに書かれていることを覚えるだけでは十分ではなく、実際のトレーニングを通して体験的に理解してゆることが必要である。本講義では、心理面接の実践について、基礎的な理論と体験的演習とを合わせて学ぶことで実践的に理解をしてゆくことと、体験を言語化・文章化することにより、学びの定着と自己理解の深化をはかる。また、節目におけるレポート作成を通して、心理学的事象についての報告書作成スキルの習熟をめざす。 (オムニバス方式／全30回) (小坂守孝／12回) カウンセリング、ならびに初回面接の訓練としてのロールプレイの役割・方法を学び、実際のロールプレイを数セッションを体験する中でカウンセラー・クライアント・観察者としての振り返りを行う。 (飯田昭人／10回) 面接演習として、次の2点を行っていく。①表現療法的アプローチ（描画法、箱庭療法、コラージュ療法）を通じた面接の実践について体験的に考えていく。②自殺や、自傷行為、虐待などの危機介入の視点が求められる面接の留意点について考えていく。 (佐藤至英／4回) 構成的グループエンカウンターの基本的事項を学んだ後に、代表的なエクササイズをいくつか体験して振り返りを行い、体験報告書を作成する。 (広瀬慎一／4回) 不安障害やうつ病などに効果のあるといわれている認知行動療法（CBT）の基本的考え方について、体験的に学んでいく。	オムニバス
	認知心理学	我々個々人には、様々な心的機能が備わっている。たとえば、五感の機能、記憶や学習や思考の機能、さらには、言語や音楽の機能、等々である。そうした心的諸機能は、他の動物のそれと較べてみたときに、あるいは、人工的に実現させてみようと思ったときに、はじめて、いかに精妙で不可思議なくみの上に実現されているものであるかが分かる。この授業では、人間の知の働きとしくみについて学習を進めてゆく。 (オムニバス方式／全15回) (阿部純一／7回) 心理学における認知心理学の位置づけ、問題解決における経験や学習の重要性、トップダウン処理とボトムアップ処理、遺伝と環境をめぐる論争、脳のモジュール性について概説する。 (伊藤博晃／8回) 感覚・知覚、記憶、知能についての認知心理学の知見を紹介する。	オムニバス
	脳と心の科学	本講義では、知覚、認知、注意、言語、記憶などの心理的な機能が、脳神経系の構造や活動とどのように関連しているのかを学ぶことを目的とする。そのための基礎として、まず脳神経系の構造について理解することをめざす。また、この分野の研究知見は、脳の損傷によって生じる機能障害の様相を、さまざまな検査や実験の手法を通じて把握することで、各心理的機能と神経機構との対応を明らかにしているが、そうした個別事例から科学的結論を導き出すための方法論についても学ぶこととする。	
	犯罪心理学	犯罪（非行）という行為を通して、社会や人間のあり方を考えることを目的とする。過去や現在の犯罪（非行）の情勢、その特徴、対策や対応などについて、心理学的視点をもとに考えていく。 具体的には、犯罪（非行）の発生する生物・心理・社会的要因について考えることや、暴力犯罪や窃盗、性犯罪などの罪種についての概要、警察におけるプロファイリングなどの犯罪対応、矯正の現場など多岐にわたって取り上げていく。	
	こども理解	教育や福祉などの現場で子どもと関わりを持つとき、対象である子どもの心と身体、行動の発達について理解しておく必要がある。本講義では乳児期から幼児期における発達の原理とその基本的特徴について学習するとともに、現代の子どもに関わる諸問題について考えてゆく。	
	ライフサイクルの心理学	ライフサイクルという人間の一生の歩みを生涯発達という観点からとらえ、それぞれの段階の特徴、課題、およびさまざまな問題について考えていく。本講義では、人間の発達の特殊性、発達をめぐる心理学的理論、発達課題と成長について、はじめに概説し、続いて、乳児期、幼児期、児童期、思春期、青年期、成人期、老年期と順次、年代における特有の課題について検討する。また、現代社会特有の事象にからめながら、適宜事例を提示し、具体的に考えていく。	
	臨床心理援助技法論Ⅰ（精神分析療法）	精神分析療法とは、人間の感情・思考・行動は無意識によって規定されているとし、その無意識を意識化することで心の悩みの問題を解決しようとする心理療法の1つである。本講義では、精神分析療法の臨床的特徴のほか、顕在的・潜在的訴の扱い方、アクティングアウト、転移と逆転移といったトピックスを取り上げ、種々の人格発達論にも触れながら、クライアントの心理力動の理解と治療的援用について基礎的な知識を得ることを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	臨床心理援助技法論Ⅱ(認知行動療法)	近年、心身の問題に関する治療法として、多くの研究によってその効果を実証されつつある認知行動療法について、その基礎理論と実際について講義を行う。講義では、行動とその結果に焦点を当てる行動的アプローチ、出来事や状況への解釈や考え方に焦点を当てる認知的アプローチ、そして新しい流れであるマインドフルネス・アプローチについて、その理論的展開の経緯を踏まえながら解説する。また、実践的な小ワークを実施することで体験的な理解をし、その効用と限界について考察できるようになることを目指す。	
	臨床心理援助技法論Ⅲ(ブリーフ・セラピー)	今日の心理療法の世界はより短期の效果的、効率的な治療が求められている。また、クライアントの問題点を見つけ、その部分に焦点を当て改善を目指すのではなく、クライアントの強み、資源(リソース)に焦点をあて解決を目指す心理療法も盛んに行われるようになってきている。本講義ではこのような視点に立ち、ブリーフ・セラピーの理論と技法を学ぶ。	
	障害児教育論	現代社会における教育の最新事情にふれ問題を整理したうえで、障害をもつ児童生徒に対して、一人ひとりの教育的ニーズを把握し、潜在的にもつ能力を引き出し、さらに高めるうえで何が求められるのかについて多面的に検討していく。「障害」をめぐる国内外の認識の変遷、発達のプロセス、障害と心理的影響、障害のある子どもの発達援助の原則について概説し、個別のさまざまな障害について基礎的な知識を確認し、障害についての理解を深めつつ、教育的観点からの適切な対応について主体的に考え、課題を解決していく力を養う。	
	障害児教育実践論	特別な支援を必要とする児童・生徒のかかえる障害の種類や程度は多岐にわたり、アプローチの方法も多様である。障害とは何か、特別支援教育の対象となる児童・生徒、障害のある子どもをどのように理解するか、そして一人ひとりのニーズに応じた指導法とは何かについて、概説する。障がい児にかかわる教育実践・相談場面において、どのように着目し、どのように対処しているのかについて、理解を深めることを目的とする。到達目標：(1) 児童・生徒の多岐にわたる障害の種類や程度を理解する。(2) 障害のある子どもに必要な教育的対応を理解する。	
	発達支援論	発達の理解とその保障について幼児期・児童期を中心に解説する。育児不安や児童虐待など発達にまつわる日常における課題を、子育て・子育て・親子関係などの点からとらえ、さらに具体的な事例なども交えながら、それらに対して取り得る支援の考え方や方法を学ぶ。	
	家族心理学	近年、さまざまな社会情勢の変化に伴い、家族の在り方や形態、その存在意義なども従来より大きく変わってきたと一方では言われている。ただ、家族の何が変わり、何が変わっていないのかをしっかりと吟味していくことが求められているとともに、家族の問題が背景にあるであろう、さまざまな諸問題について、心理学的視点から考えていくことを本講義の目的とする。特に「親子関係」「結婚生活」「子育て」「家族の病理」など具体的事象から考える。	
	産業・組織心理学	産業・組織心理学は、心理学の応用分野の1つであり、企業等の組織に関与する人間の問題及び人間関係の問題を扱う学問領域である。本講義では、働く場を取り巻く心理学的なトピックスを紹介し、組織の一員となる上で、または組織を研究対象とする際に有益な基礎知識を得ることを目的とする。そして、働く場における組織の特徴、職務満足に関わる諸要因、消費者心理に影響を及ぼす諸要因について理解できるようになることを目指している。	
	コミュニケーション心理学	本講義では、人間が社会的存在として生きていくうえで必要不可欠なコミュニケーションについて、心理学のさまざまな観点(知覚、認知、発達、臨床、教育等)から多面的に概説し、言語と非言語両方の重要性を認識したうえで、対人関係において豊かなコミュニケーションを成立させるうえで何が求められるかを考察する。また、現代のメディア・コミュニケーションの特徴および人間に及ぼす影響や、小児と成人のさまざまな言語障害とその支援もテーマに含め、コミュニケーションをめぐる人間心理についての洞察を深める。	
	スクールカウンセリング	不登校やいじめ、校内暴力、学級崩壊、中途退学などの問題が学校で生じており、その支援を行うことが教育・心理・福祉分野共通の課題となりつつある。本講義では、子どもを取巻く様々な問題を取り上げ、どのような対応が求められているのかを考え、学校カウンセリングの理論や方法と、その実情について学びを深めることを目的とする。	
	ポジティブ心理学	近年、米国を中心に台頭しているポジティブ心理学について、その概要の解説を行う。20世紀の心理学が人間の弱さや病理面に焦点を当ててきたことに対し、21世紀の心理学には強さや健康面に焦点を当てた研究や実践が求められている。本講義では、人間の強みを発見・活用・発展させていくための諸知見を紹介していく。希望、ポジティブ感情、楽観性、ユーモアなどのテーマを扱い、受講者自身が自他の肯定的な資質や資源に気づきやすくなる感性を養う機会となることを目指す。	
	モチベーション心理学	今日の学校教育場面において、モチベーションの低下が指摘され、学習に対するやる気をどのように高めていくかが課題となっている。また企業においても、バーンアウト(燃え尽き症候群)の問題が話題にされる一方で、社員のモチベーションをいかに高めるかが問題視されるようになってきている。モチベーションとは何か、モチベーションをどのように高めていくのかについて、心理学の基本的理論をもとに、理解を深めることを目的とする。到達目標：(1)モチベーションに関する心理学的知見を理解する。(2)モチベーションを高める具体的方法を理解する。(3)モチベーションを維持する方法を理解する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	社会的養護論	社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことであり、理念としては「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」の2つが特に重要である。本講義では、児童養護施設や児童自立支援施設、里親およびファミリーホームなどの歴史の変遷や現状、課題などを論じ、社会的養護を取り巻く問題などについて考えていくことを目的とする。	
	少年非行と矯正教育	現在、少年非行については、凶悪犯罪の減少化傾向が進んでいるものの、万引きなどの窃盗は依然として少なくなく、また凶悪犯罪についても動機の明確でないものが多いと一方では言われている。被害者の視点をより重要視し、少年犯罪の厳罰化が叫ばれる風潮もあり、改めて少年非行についてその現状や課題を考えていくものとする。また、法務省管轄の少年院や少年鑑別所などだけでなく、厚労省管轄の児童自立支援施設などでの矯正教育の実状などについても学んでいくものとする。	
	キャリアカウンセリング	今日の経済や雇用環境の複雑化により、個々人のキャリア像は倒産やリストラ等により大幅な変更が強いられることがあり、個人のキャリア形成に関する悩みを解決するための支援が必要となっている。本講義では、キャリアカウンセリングが必要となっている社会的背景、特に日本における雇用の問題や組織における人事制度、そしてキャリアカウンセリングの技法、様々なキャリア形成支援について包括的に取り上げてゆくことを目的とする。	
	高齢社会と生涯教育	超高齢社会を迎える今日の日本において、高齢者を含めたすべての人々が健康で、生きがいを持ち、安心して暮らしていける社会の実現が求められている。その実現のために、生涯学習は大きな役割を担っている。高齢社会における生涯教育とは何か、生涯教育に何ができるのか、生涯教育の直面する課題は何かについて、概説する。到達目標：(1)超高齢社会における生涯教育の意義と目的を理解する。(2)生涯教育に求められる役割を理解する。(3)生涯教育の課題を考察する。	
	現代社会と臨床心理学	大きく変容している現代社会において、今日の臨床心理学がどのような背景をもって発展してきたのか、そして現在、どのように展開されているのかについて、基本的理解を得る。また今日、クローズアップされる心の問題に対して、臨床心理学ができることと期待されることは何か、未解決の課題について、今後、臨床心理学はどのように展開されていくのかを考察する。到達目標：(1)臨床心理学がどのように発展してきたか、臨床心理学の歴史を理解する、(2)臨床心理学の基礎理論を理解する、(3)現代社会における問題に対して、臨床心理学はどのようなアプローチをとるのかについて、理解する。 (オムニバス方式／全15回) (佐藤至英／2回)今日の社会現象、特に、引きこもり、ニート、そして虐待、自殺、尊厳死というキーワードを取り上げ臨床心理学的観点から考察する。 (風間雅江／2回)高齢期におけるQOLや心理的ウェルビーイングに関する心理学的知見を紹介した後、高齢社会における介護者のメンタルヘルスを取り上げ、現代社会の特徴について考察する。 (小坂守孝／2回)働く人を取り巻くメンタルヘルス上の諸問題に対する臨床心理学的な取り組みとして、予防策としての側面と、実際の相談活動や職場復帰支援について考察してゆく。 (新川貴紀／2回)現代の少子高齢社会における子育ての現状や問題、そして乳幼児虐待の背景にある要因に関する心理学的知見を紹介し、現代社会の変化との関連について考察する。 (川崎直樹／2回)現代人のライフスタイルと自己意識に焦点を当て、自己や他者への感じ方の変化と現代社会の変化との関連や、SNSをはじめとする情報技術の発展と自己意識との関連について考察する。 (飯田昭人／2回)胎児の障害について診断を行う出生前診断に関する現状と課題、そして犯罪における加害者と被害者の対話による和解をめざす修復的司法について、臨床心理学的視点を交えて考察する。 (全担当者／3回)2担当者終了ごとに中間講評を行い、受講生との議論を交えながら現代社会の諸側面について臨床心理学的視点からの理解を深める。	オムニバス
	対人コミュニケーション演習	社会的スキルとしてのコミュニケーション能力の向上と、さまざまな領域の職業生活ならびにライフサイクルの全ての段階においてより広く応用できる柔軟なコミュニケーション能力の修得をめざし、心理学的観点から概説を行う。さらに、学生自らロールプレイや小グループでの実践ワークを毎回行い、体験発表を行う。講義と体験と発表を繰り返すことにより、他者の意図を的確に把握し安心と信頼を生み出す傾聴力と、対人関係を円滑にし集団としてのパフォーマンスの向上に繋がる自己表現力の定着をめざす。	
	医学概論	科学と医学の進歩により、例えばヒトの遺伝情報の全貌が明らかにされつつある。このような現代医学の進歩を踏まえて、健康と長寿をキーワードとし、介護や福祉に従事するために必要なからだのしくみを習得する。また心身機能と身体機能及び疾病や傷害について、人間の成長・発達と日常生活との関係を踏まえて理解する。さらに国際生活機能分類（ICF）に基づきリハビリテーションの概要を理解する。	
	医学知識	死・ターミナルケア・緩和医療などを念頭に、からだのしくみの基礎、すなわち身体の構造並びに生理機能、特に死にゆく人のこころとからだのしくみを理解するために医療の各分野を一般的に紹介し、現代に特徴的な疾病についての講義をねらいとする。特に死の捉え方、終末期から危篤の時期・死亡時の身体的・精神的諸問題の理解など、医療職との連携をふまえ、疾病をひろく理解できることを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	社会学	家族、企業、地域等々、現代社会は様々な領域において深刻な社会問題を抱えている。本科目では、これら生活上の諸問題が生み出された背景について、近代の主要な社会変動とのかかわりから理解しつつ、社会学者がどのような理論構築をしてきたのかについて講義する。さらに、いくつかの話題を例示しつつ、様々な問題解決に必要な福祉のあり方を考える機会を設け、学びを深める。	
	現代社会と福祉Ⅰ	わが国の福祉政策がどのような歴史的経緯を経て現在の姿になっているかを学ぶとともに、福祉政策の根幹となっている福祉の価値、哲学について自由主義との関係で理解を深める。さらに、今日において福祉政策が他の社会政策にどのような影響を及ぼしているか、教育、医療、雇用、住宅等の分野について具体的に学ぶ。	
	現代社会と福祉Ⅱ	わが国の福祉政策について、その理念、主体、方法、体系について学ぶ。さらに、わが国の福祉政策と他の福祉国家における福祉政策を比較検討し、わが国の福祉政策の特徴を理解する。そして、社会福祉士として福祉政策における相談援助活動がどのような役割を果たしているかを学ぶ。	
	地域福祉論Ⅱ	地域福祉論Ⅰの内容を踏まえながら、地域福祉の実践主体である社会福祉法人やボランティア団体、専門職の役割と実際を学ぶ。また地域福祉を実施するための地域におけるネットワーク、社会資源の活用・調整・開発、福祉ニーズの把握方法、サービスの評価方法等、地域福祉の推進方法について理解する。	
	社会保障論Ⅰ	社会保障の理念や経済的な機能について解説するとともに、社会保障を構成する諸制度（公的年金、医療保険、介護保険、労災保険、雇用保険、生活保護など）の仕組みについて解説を行う。これにより各制度により保障される生活の水準を理解することを目的とする。また、社会保障の財政事情を解説して、その規模と課題を理解することも合わせて目指す。 講義形式で展開し、現代社会とのつながりを理解するため適宜、新聞や専門誌の記事およびVTRを紹介する。	
	社会保障論Ⅱ	社会保障の歴史的な展開について理解を深めることを目的とする。単に日本の社会保障の歴史にとどまらず、ヨーロッパおよびアメリカにおける歴史的展開過程にも言及し、社会保障の特質を解説するとともに、各国の差異とその背景についても理解を深めることを目指す。 講義形式で展開し、現代社会とのつながりを理解するため適宜、新聞や専門誌の記事およびVTRを紹介する。	
	公的扶助論	長びく不況の中で貧困格差が大きくなり、様々な社会問題が浮上してきている。ワーキングプア、ホームレス、孤立死等の事象を踏まえて最後のセーフティネットといわれている生活保護制度を中心に公的扶助制度がそうした社会問題にどのような役割をはたしているか、を歴史、仕組み、実態等から学び、これからの貧困問題について考える。	
	社会福祉行政・福祉計画論	地方分権の進行とともに社会福祉も社会福祉法でその目的を「地域福祉」ということに規定され、全国一律の画一的な福祉ではなく、それぞれの地域の特性をいかした福祉の実現が求められるようになった。そこで、地域福祉の時代における市町村の役割と財政について、各種福祉計画の策定、地方自治の仕組み等を通して学ぶ。	
	医療福祉論	保健医療分野におけるソーシャルワークについて、その理念、価値、視点を学ぶ。保健医療の歴史的背景や制度・政策動向、社会環境の変化を理解することを通して、疾病や障害を負うことによって生じる生活の諸問題について学び、この分野を入口とした他福祉分野との関連についても理解を深める。また、相談援助過程で必要となる医療保険制度や保健医療サービス、さらに実践現場における専門職の役割と実際、他職種協働についての理解を深める。	
	権利擁護と成年後見制度	今日の契約社会において、自ら契約することが難しい人々や誰かの助けがあれば日常生活を営むことができる人々に対しての「権利を護る」ということについて学ぶ。社会福祉基礎構造改革以降、福祉サービス利用者は「利用契約制度」が中心となった。相談援助活動において、利用者の「権利をいかに護るか」、「自己決定をどのように尊重するか」は重要な課題である。権利を護るにはどのような制度があり、その制度を利用するにはどのような方法があるのか等について理解することを目的としている。	
	障害者福祉論	障がい者の支援はライフステージ全域にわたり、その領域も福祉、保健医療、労働、教育等多岐にわたる。まずは障がい者（児）支援の基本的理念を理解し、障がい者（児）の生活実態や生活ニーズを把握する。そして、障がい者福祉の発展過程および障がい者に関わる法や施策について概観する。そして障害者総合支援法における障害福祉サービスについて具体的に学ぶ。	
	精神医学Ⅰ	精神保健福祉士に求められる精神医学全般に関する基礎的知識と精神障害に関する医学的な知識を身につけることを目的とする。具体的には、①精神医学・医療の歴史と現状を知り、精神医学の生物学的背景とこころを理解すること、②精神疾患総論として、精神障害の概念と精神疾患の成因・分類の理解すること、③各論として、代表的な精神疾患について、成因、症状、診断法、治療法、経過、本人や家族への支援といった観点から理解すること、④精神科病院等における専門治療の内容及び特性について理解することを目標として講義を展開する。	

授 業 科 目 の 概 要 (教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	精神医学Ⅱ	精神保健福祉士がその実務を行う上で必要となる精神科チーム医療の考え方や精神医療・福祉との連携の重要性を理解することを目的とする。具体的には、①精神科医療機関の治療構造及び専門病棟についての知識を得ること、②精神科治療における人権擁護の重要性を理解すること、③精神科病院におけるチーム医療と精神保健福祉士の役割に関して理解すること、④精神医療と福祉及び関連機関との間における連携の重要性 について理解することを目標として講義を展開する。	
	精神保健Ⅰ	精神保健福祉士に求められる精神保健の基礎的知識の習得を目指し、精神の健康についての基本的考え方と精神保健の役割について理解することを目的とする。具体的には、①精神保健に関する歴史的経緯とその意義、②ライフサイクルや具体的な生活の場面における精神保健の役割の重要性、③現代社会における精神保健の諸課題、④精神保健の実際及び精神保健福祉士の役割、⑤精神保健を維持、増進するために機能している専門機関や関係職種との連携、⑥国際連合の精神保健活動や他の国々における精神保健の現状と対策について理解することが目標である。	
	精神保健Ⅱ	精神保健福祉士として求められる精神保健の基礎知識習得を目指し、実際に現場でおきている今日の複雑な精神保健問題に対応できるよう、多角的視点を養うことを目的とする。具体的には、①精神保健の基本概念の理解を一層深める、②今日の精神保健問題への理解を深め、諸外国、国連やWHOの活動などを理解し、今後の精神保健の発展の可能性を把握する、③事例検討を通じて、その疾患及び障害の特性を理解するとともに「生活」に及ぼす影響について総合的に理解できるようにすることである。	
	ソーシャルワーク概説Ⅰ	社会福祉士やソーシャルワーカーに求められる人間の多面的理解と尊厳の保持、自立、自律した生活を支える必要性について理解することを目的とする。さらに、ソーシャルワークの形成過程を踏まえつつ、相談援助に必要な社会福祉の理念について学ぶことを通して社会福祉やソーシャルワークの基本的概念を理解する。	
	ソーシャルワーク概説Ⅱ	ソーシャルワーク（相談援助）専門書の内容や専門職の倫理について我が国の資格制度と関連させながら、社会福祉専門職の役割や専門性をわきかきすることを目的とする。また、地域におけるソーシャルワーク（相談援助）の考え方やその理論的背景について理解することをねらいとする。	
	精神保健福祉援助技術総論	精神保健福祉士の行う相談援助の対象・価値・意義について理解し、権利擁護や連携する多職種、チームアプローチなどについて学ぶ。具体的には①精神保健福祉士が行う相談援助の対象と相談援助の概要、②精神障害者の相談援助に係る専門職の概念と範囲、③精神障害者の相談援助における権利擁護の意義と範囲、④精神保健福祉活動における総合的かつ包括的な援助と他職種との連携の意義および内容、について理解し、精神保健福祉士の役割および理論や実践について体系的に学ぶ。 (オムニバス方式／15回) (今井博康／8回) ソーシャルワークの定義と構成要素を学び、精神保健福祉領域におけるソーシャルワークの歴史、実践から精神障害者の相談援助における権利擁護の意義と範囲について理解する。 (橋本菊次郎／7回) 精神障害者の支援における多職種チームアプローチにおける精神保健福祉士の役割と専門性について理解する。また現代社会における精神保健福祉士への要請課題を明らかにし、求められる援助技術や役割の発展の可能性について理解する。	オムニバス
	精神科リハビリテーション	精神障害リハビリテーション学の内容と構成、各領域でのリハビリテーション実践、および精神保健福祉士の役割について理解する。到達目標として、①精神障害リハビリテーションのプロセスにおける、実施機関や施設などにおいてどのような援助技術や方法が用いられているのかを把握すること、②精神保健福祉士が行うリハビリテーションの実際を理解する、③リハビリテーションにおける他の専門職者との連携のあり方などを理解するである。また諸外国の先駆的な取り組みなどと日本における実践、展開の可能性についても検討できるようにする。	
	精神保健福祉援助技術各論Ⅰ	精神保健福祉士には、精神障害者の疾病・障害に配慮した援助が求められる。また今日、メンタルヘルスの課題が生活問題として表出する事例が急増しており、司法・医療・労働・教育・家庭という領域特性を考慮したアプローチも必要とされる。本科目では、ソーシャルワークの価値・理論を基盤に置く実際の支援方法を講義によって理解することを達成目標に置く。より具体的には、心理社会的アプローチや問題解決アプローチ、今日のナラティブモデルの紹介、それらの個別援助・集団援助・コミュニティワークにおける活用の概要を学ぶ。	
	精神保健福祉援助技術各論Ⅱ	精神保健福祉援助技術各論Ⅰをさらに発展させ、ソーシャルワークの価値・理論を基盤に置く実際の支援方法について演習を含め展開し、心理社会的アプローチや問題解決アプローチ、ストレングスアプローチ、ナラティブモデル等を、それらの個別援助・集団援助・コミュニティワークにおいてその理論と実践の統合化、基本的スキルの獲得を目指す。また領域特性を勘案して適したモデルの活用も検討する。	
	精神保健福祉学Ⅰ	精神保健福祉士の基盤となる科目である。また今日の社会問題が広く人びとのメンタルヘル스에深刻な影響を与えている事実を考慮すると、他領域の専門職にとっても学んでおきたい科目である。本科目では、精神保健福祉士の実践に不可欠な視点、技術、知識を包括的に取り扱うとともに、とりわけ精神科疾患や障害を有する人びとが侵害されがちな人権、及び権利擁護について重点を置きつつ精神保健福祉領域の基礎知識を学習することを目的とする。なお精神保健福祉学Ⅱ・Ⅲも連動しており、精神保健福祉士国家試験受験指定科目である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	精神保健福祉学Ⅱ	精神保健福祉の基盤となる科目であり、精神保健福祉士の実践に必要な視点、技術、知識を習得することを目的とし、特に精神保健福祉に関する制度とサービスが、精神保健福祉士の実践および精神障害者の生活にどう影響しているのかを理解し、制度やサービス上の課題についても検討できるようにする。具体的には①障害者基本法等全ての障害者に共通の福祉施策の概要について理解する、②精神障害者に対する相談援助活動等を理解する、③精神保健福祉施策の概要について理解する、④精神保健福祉の関連施策について理解することが目標となる。	
	精神保健福祉学Ⅲ	精神保健福祉学Ⅰ及びⅡにおいて精神保健福祉実践に必要な視点、技術、知識について学んだところであるが、本科目では、精神保健福祉援助実習において経験した精神保健福祉士の業務内容、実習場面において必要と感じられた技術・知識について、精神障害者の生活支援の意義と特徴について再確認を行う。また、めまぐるしく変化する精神保健福祉関連制度、施策等（居住支援や就労支援等）の改正などの最新動向を理解することを目的におく。 （オムニバス方式／15回） （今井博康／7回） 精神障害者の生活支援の意義と特徴を精神保健福祉士の相談援助活動の実際から理解する。 （橋本菊次郎／8回） 居住支援や就労支援等精神障害者福祉に関する制度が相談援助活動においてどのように活用されているのか、また課題等について制度の改正動向も踏まえ理解する。	オムニバス
	精神保健福祉援助演習Ⅰ	本演習では、精神保健福祉士講義系科目を応用し、体系的な援助実践を模擬的に進めることを達成目標に置く。現任精神保健福祉士と担当教員のコラボレーションによって、理論と実践の統合を図ろうとするものである。精神保健福祉士の援助は自らをツールとして利用者と援助関係を形成する特質があることから、自己の価値観・援助観・精神障害者へのイメージ、これらがどのように形成されてきたかを振り返り、援助過程においてこれらに自覚的であることの必要性を少人数制によるグループによって学ぶことに主眼を置く。 （今井博康／15回） （小嶋健二／15回）	
	精神保健福祉援助演習Ⅱ	精神保健福祉援助演習Ⅰを基礎として、また種々のソーシャルワーク理論の活用を意識しつつ、個人・家族・グループ等への援助過程をロールプレイングによって模擬的に経験する。ここでも少人数制のグループを活用し、参加者同士の意見交換を行い、教員の個別指導とを併用しながら修正を図り、より実際の専門職倫理を備えた精神保健福祉士となるためのトレーニングを実施する。 （今井博康／15回） （小嶋健二／15回）	
	精神保健福祉援助演習Ⅲ	精神保健福祉援助実習後に展開される科目であることから、実習経験を踏まえつつ具体的な援助事例を読み込む。事例検討を中心に展開し、その援助プロセスの整理と批判的考察力を涵養する。また、インシデントプロセス法の活用によって必要な情報収集力を高め、より正確なアセスメントができる力を育てる。模擬的に支援計画が作成できることに達成目標を置き、卒業後、現場で求められる一定水準を獲得できる指導を展開する。また用いる事例は精神障害者の地域移行のほか、司法・医療・地域・教育・労働といった国民のメンタルヘルスと関連深いものも含む。 （今井博康／15回） （橋本菊次郎／15回）	
	精神保健福祉援助実習指導	学部3年次後期から4年次後期にわたり展開される科目である。精神保健福祉援助実習開始前には、①実習生として求められる態度と職業倫理の涵養、②関係法制の基本的理解、③配属先の設立根拠となる法制の理解、及び④配属先の情報収集を行う。その後、①自己の課題対処傾向、刺激に対する反応の傾向への理解を深めるとともに、指導教員の下で②実習課題を設定する。実習事後指導では、グループスーパービジョン、個別指導を通じて総括と課題の達成度の確認を行い、実習指導者及び3年次学生を前に発表し実践者となるための課題を意識化する。 （今井博康／45回） （橋本菊次郎／45回）	
	精神保健福祉援助実習	精神科医療機関、障害福祉サービス事業等2か所において210時間以上の実習を行う。実践現場に触れ、対象・知識・技術・関連領域についての理解および相談援助・リハビリテーション・社会生活支援に必要な資質・態度・能力・技術を修得する。また職業倫理を身に付け、専門職としての自覚に基づいた行動と対象の人権擁護について検討できることが実習の目標となる。また実習での体験や援助活動を記述とスーパービジョンを通して、専門的援助技術、チームアプローチ、ネットワークなどについて体系立てて理解する能力を涵養する。 （今井博康／210時間） （橋本菊次郎／210時間）	
	就業力特別演習	本学科を卒業した学生が自らの素質を向上させ、社会的・職業的に自立を図ることができるよう、対人援助実践の基礎となる能力の涵養を目標とし、グループワークやロールプレイなどを通してコミュニケーション能力や問題解決能力のトレーニングを行う。	
	就業力特別講義Ⅲ	本学科を卒業した学生が自らの素質を向上させ、特に専門性を生かしながら社会的・職業的に自立を図ることができるよう、心理や福祉、医療の領域において必要とされる実践力についての理解を深めることを目標とし、各領域の具体的な実践例について解説する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	就業力特別講義Ⅳ	本学科を卒業した学生が自らの素質を向上させ、各領域の専門職として社会的・職業的に自立を図ることができるよう、心理や福祉、医療の領域において必要とされる知識や実践力の定着を目指し、ポイントを絞り各領域の解説を行い必要とされる知識の確認を行う。	
	専門演習Ⅰ	学生自身が疑問に感じたこと、興味関心を抱いていることについて、学術的に追及して明らかにし、まとめ、発表を行うことで、研究に必要とされる基礎スキルを習得することを目的としている。研究を実施する上で必要な基礎知識を習得し、また集団でのディスカッションやグループワークを行い、調査を実施し、分析・解釈を行い、論文としてまとめる、といった一連の流れを体験する。個人の研究スキルと合わせて、対人的・集団的な活動のスキルを養うことも合わせてねらいとする。 (小坂守孝) 産業・組織心理学とコミュニティ心理学の接点となる、働く人のメンタルヘルスに関連する文献等の購読やディスカッション等を通して、働く場における臨床心理学的アプローチについて理解を深める。 (風間雅江) 「コミュニケーション」に焦点をあて、認知心理学や社会心理学、臨床心理学をはじめとしたさまざまな観点の文献の詳読とディスカッションを通して、コミュニケーションをめぐる心のはたらきについて理解を深める。コミュニケーションの障害についても概観し、学外活動として、患者会への参加などのフィールドワークも行う。 (今井博康) 精神障害者の社会参加、心の健康の重要性が強調される時代にあって、一般市民の精神障害に関する理解は未だ不十分である。障害者のパワーレス脱却からのためにはこの解消が不可欠である。そこで本演習では、コンフリクトの構造、偏見・差別の形成過程について文献研究をすすめ現状認識を図る。 (飯田昭人) 非行や発達障害、不登校、虐待、うつ病など、子どもや家族が生きにくさを感じていたり、つまずきを抱えていたりする状況が少なからず存在する。このような子どもや家族への支援方策について、関連する文献や論文を講読していき、それぞれが発表し、皆でディスカッションを行う。その中で事実に基づきながら、しっかり考えるということを目指していく。 (新川貴紀) 各自の興味関心のある子どもや家族への支援に関する心理学的研究の文献を購読し理解を深める。 (川崎直樹) 本演習では、青年心理学や性格心理学を中心として文献の輪読と発表を行いながら、文章読解・文書作成・説明などのスキルを訓練する。各個人が自律的に社会活動や研究を実践できるための基礎を固めることを目的とする。 (寺田香) 実践現場でのフィールドワークを通して社会福祉支援活動の実践について学び、支援を必要としている対象者の抱えている生活障害について構造的に理解を深めることを目標とする。 (橋本菊次郎) 精神保健福祉関連領域の支援をテーマに専門雑誌などから文献を入手し、レジメを作成・発表、ディスカッションをし、理解を深める。また、より実践的な検証ができるように施設見学やイベントに参加することを積極的に行う。	
	専門演習Ⅱ	専門演習Ⅰで習得した研究の基礎スキルを基に、学生個人の関心に合わせてオリジナリティある研究へと発展させることが目的である。少人数のゼミナール形式で、各指導教官の元で演習を展開する。次年度の卒業研究への準備段階として、研究テーマを設定し、先行研究をレビューを行い、研究方法に習熟する。文献講読やグループでのディスカッションを通して問題意識を深めるとともに、中長期的な計画を立案・実行する作業スキルを身につけることもねらいとする。 (小坂守孝) 専門演習Ⅰで学んだ内容をもとに、広く臨床心理学・コミュニティ心理学に関連する領域の中で各自が関心のあるテーマを定め、関連する文献の購読をしつつ、研究計画を組み立ててゆく。 (風間雅江) 専門演習Ⅰで得た知識や体験をふまえて、卒業研究を視野に入れ、学生各自が関心のある研究テーマを設定し、より専門性の高い文献を収集し、その内容をレジメ等にもまとめ、口頭発表し、意見交換を行う。 (今井博康) 精神障害に関する理解の促進のために、具体的にはどういった一般市民への普及啓発活動が可能か。産官学の協働の観点から、現状認識の中から学生・教員の立場から他機関との協力で実施しうる方法を模索し立案・計画を行う。可能であれば模擬的に実施する。 (飯田昭人) 専門演習Ⅰで学んだ心理学的視点を中心にしながら、教育や社会福祉などの近接領域もふまえて考えていく。更に卒業研究を視野に入れ、関心ある領域やテーマを選定し、それらについてレポートを作成していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育文化学部心理カウンセリング学科)			
区 科 分 目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	専門演習Ⅱ	(新川貴紀) 専門演習Ⅰで学んだ内容をもとに卒業研究に向けて具体的な調査方法および分析方法について学習する。 (川崎直樹) 本演習では、青年心理学や性格心理学を中心とした研究や実践活動を計画・実施することを試みる。グループでの協議や共同作業などを通して、1つの企画の立案・実施・振り返りのサイクルを体験し、実践的な諸スキルを訓練する。 (寺田香) ソーシャルワークの支援活動が展開される際に求められる価値・知識・技術について体系的に理解を深め、同時にソーシャルワークの倫理について学ぶ。 (橋本菊次郎) 専門演習Ⅰで得た知識・知見をもとに、各自の関心・興味のあるテーマを選び、文献講読や必要に応じて調査なども行う。精神保健福祉領域の支援における課題を明らかにし、新たな支援の可能性について検討（提案・創造・実践）できることを目標とする。	
	卒業研究	学生自身の興味・関心に基づき選択したテーマについて、担当教員の指導のもとに文献・調査等による研究を行い、4学年の学業の総まとめとして、卒業研究に取り組む。 1) 研究のプロセスについて実践できる 2) 研究的思考の重要性について理解し、自己啓発につなげていく	